



* 0025201000 *

0025201-000

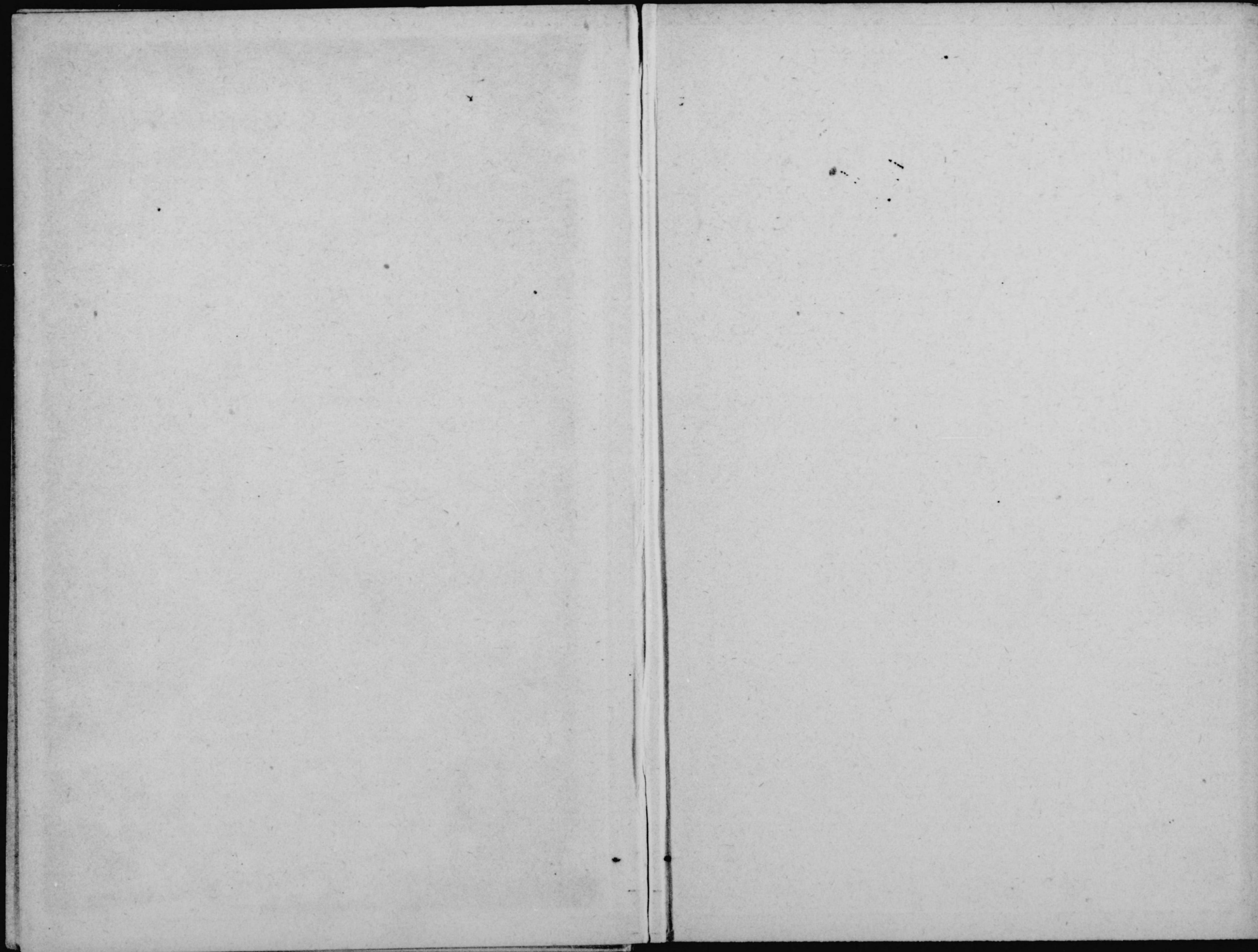
334.5-M494r

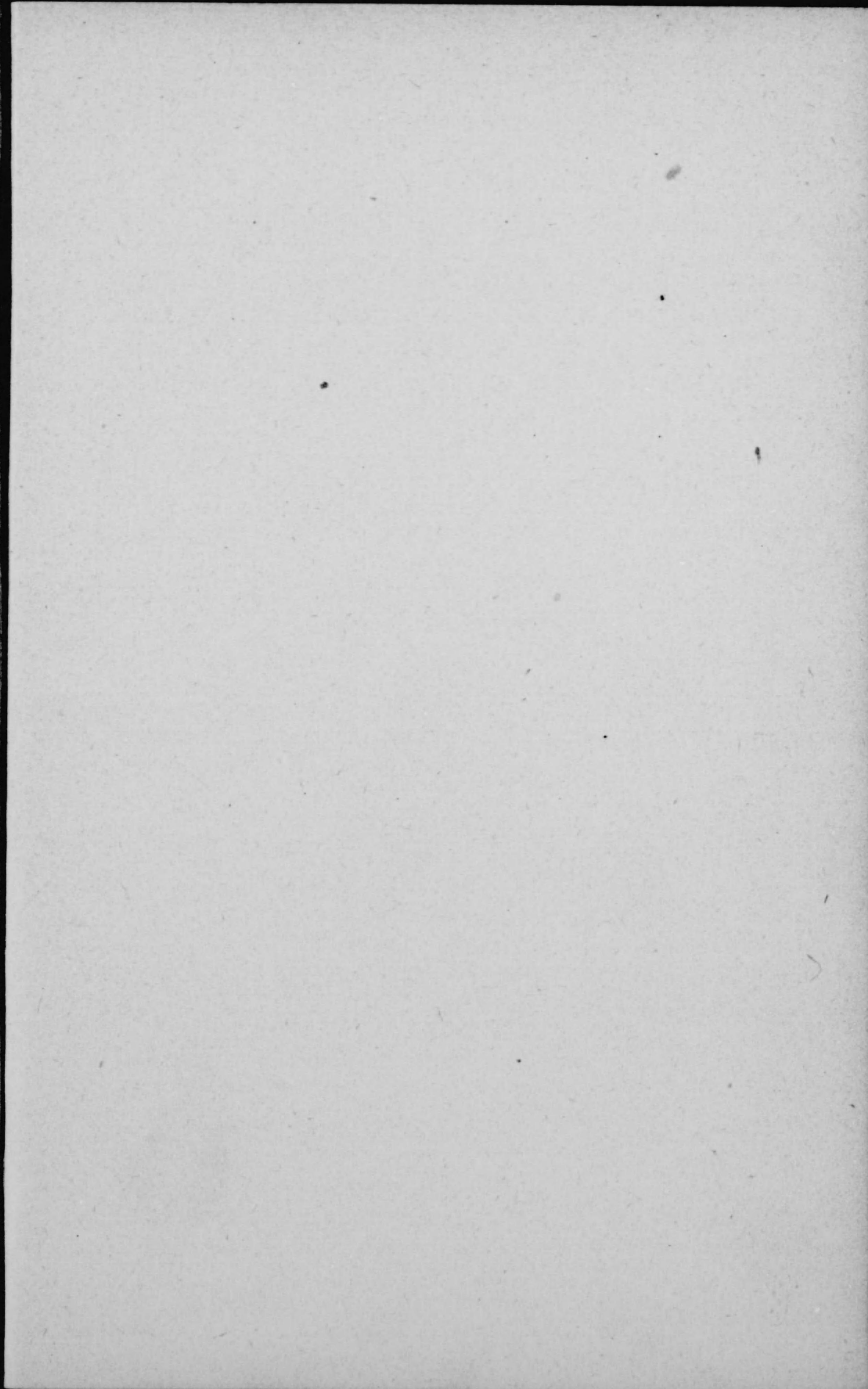
蘭領印度に於ける華僑

南滿洲鐵道東亞經濟調查局

1940

ADE





南洋華僑叢書 第四卷

蘭領印度に於ける華僑

滿鐵東亞經濟調查局刊

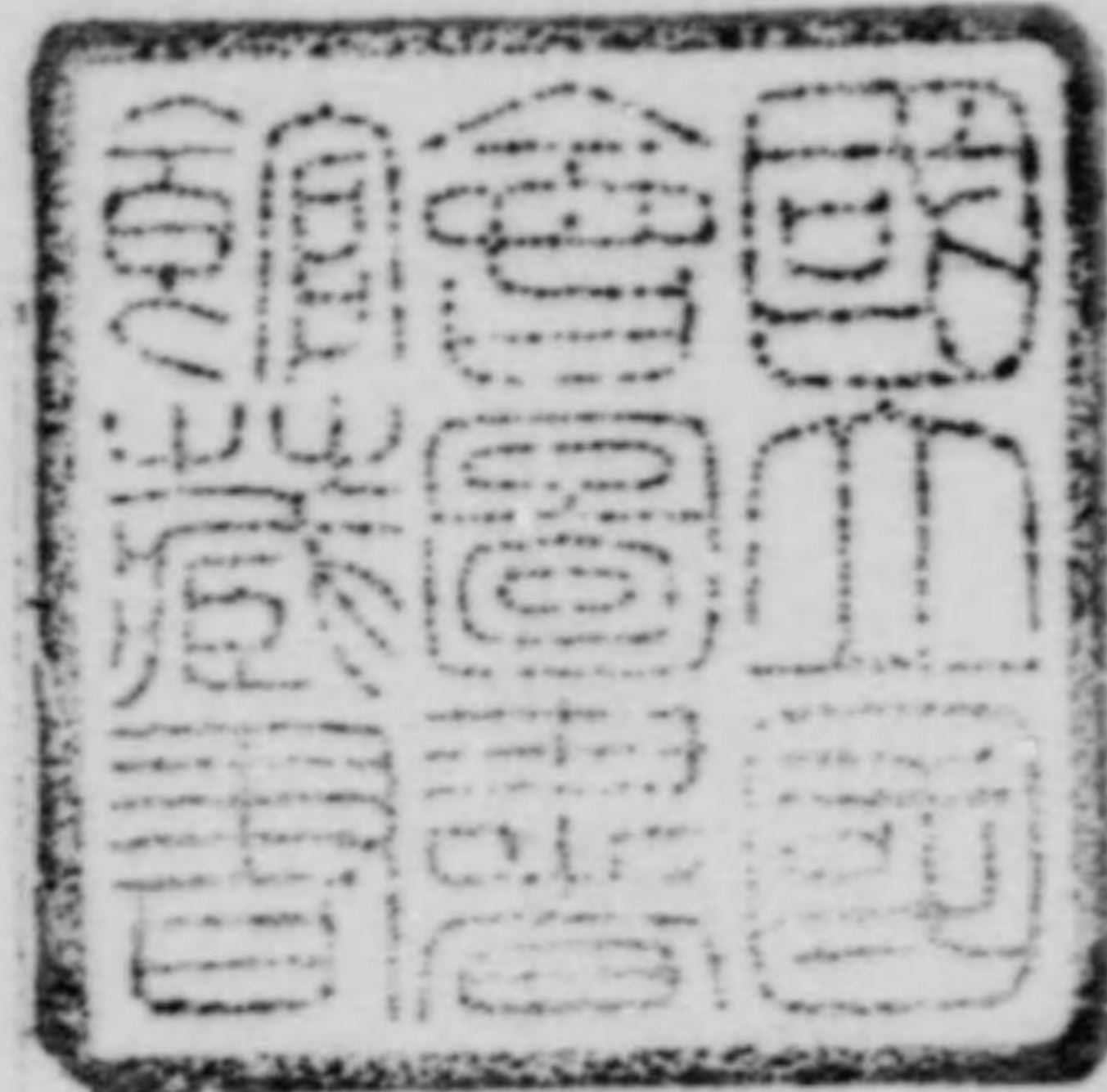
序

國家としては混亂不統一を續けてゐる支那も、民族や社會としては著しい發展を遂げてゐる。

海外に移住せる支那人、即ち「華僑」が何等國家的保護を享けること少きにも不拘、今日の如き地歩を築き得たことは實に驚嘆に値する所である。

今次の支那事變を契機として、新亞細亞の自救と確立とは、今後我が日本に課せられた重大使命である。この歴史的使命は、わけても支那人の協力が必要とする。それは本國に在るものと海外に在るものとを問はない。この意味に於いて、華僑の今後に於ける役割は、重且つ大でなければならぬ。

殊に「南洋華僑」は、その數凡そ七百萬に上り、全華僑の過半數を占め、今後新亞細亞の確立上に於いては勿論、我が南洋貿易並に南洋方面經濟開發等所有する點に於いて、我等とは一層直接的關係に入らざるを得ない。此の意味からして「南洋華僑」は、我等



の協力者としてのみならず、その経済的乃至社会的地位よりして無視し能はざるものである。南洋華僑研究の緊要なる所以は實に茲に存する。

本叢書の目的は、上述の如く我等の協力者たるべき南洋華僑に就いて、その實狀を各所在國別に夫々政治、經濟、社會及び文化の各部門に互つて究明し、以てこの方面の研究上の参考に資せんとするに在る。併し乍ら、何分各部門共に、就中經濟部門に於ける華僑の事業の形態、組織、經營方法、資金關係及び資産狀態等に就いては具體的正確な資料に乏しくて、完璧を期し得なかつたことを遺憾とする。此點今後各方面の現地調査によつて補正せられんことを希望する。

本叢書は左記六卷よりなる。

- 第一卷 タイ國に於ける華僑
- 第二卷 佛領印度支那に於ける華僑
- 第三卷 比律賓に於ける華僑
- 第四卷 蘭領印度に於ける華僑

第五卷 英領馬來に於ける華僑

—附北ボルネオ、サラワク、ブルネイ、ビルマ、濠洲に於ける華僑—

第六卷 南洋華僑と福建、廣東社會（翻譯）

本篇は即ちその第四卷である。

本篇の執筆は局員岩隈博、竹林勳雄及び後藤友治に擔當せしめた。

昭和十五年一月

滿鐵東亞經濟調查局

例言

一、蘭領印度と支那との交渉は遠く唐代に初まり、十七世紀に入るや和蘭東印度會社の華僑移住獎勵策によつてその數の増加を見、爾來和蘭人・東印度人間に介在する間接的存在として着々と強固な地盤を獲得し、永く蘭印經濟界の一勢力を占めて來た。而して特に近年に於ける彼等の人口増加力の熾烈さは益々抜くべからざる勢力を扶殖し、更に驅つて政治的分野へと行進を開始するの勢を示した。於是、和蘭政府も徐々に制限取締令を設けて之が對策を講じ、彼等華僑の勢力を縮小せんと試みつゝあるも、その前途には尙ほ幾多の多難さが認められて居る。乍併、ともあれ、吾人は蘭印社會を研究するに當つて、永年に互り培ひ來つた華僑經濟力を無視する事は出來ない。

一、本書は蘭領印度に於ける華僑の地位を闡明する目的で編纂したが、調査に當り歴史的な資料の比較的豊富なるに反し、その現状就中その經濟的實狀を知るの文獻は極め

て乏しく、爲にこの目的を充分に果し得なかつたことを遺憾とする。

一、本書を編ずるに當つては Cator, W. J.:—The Economic Position of the Chinese in the Netherlands Indies, 1936 に負ふ所多く、統計は主として Departement van Economische Zaken: Volkstelling 1930, Deel VII, Chinezen en Andere Vreemde Oosterlingen in Nederlandsch-Indië. Centraal Kantoor voor de Statistiek van het Departement van Economische Zaken: Indisch Verslag, 1938 等に依つた。

一、本書は始め一、二、四章を岩隈博、三章を竹林勳雄、五、六章を後藤友治と夫々擔當執筆したが、途中岩隈出征せる爲め、竹林一、二、三、四章(除三節)、後藤四(三節)、五、六章と分擔を變更して編纂に當つた。然るに脱稿直後竹林亦出征し、後藤亦公用のため東京を去るの餘儀なきに至り、爾後の編輯、校正、索引作成等は總て餘人の當る處となりし爲め、文中或は不統一なきやを期し難い。特にこの點を附記して讀者の寛恕を求むる次第である。

蘭領印度に於ける華僑 目次

序 説 一

第一章 華僑發展の史的概要 六

第一節 封建時代 六

第二節 東印度會社時代 一〇

第三節 一八七〇年迄 二七

第四節 産業資本主義確立以後 三〇

附 ボルネオ西部州華僑發展史 三二

A、華僑採金業發生前の状態 三三

B、華僑採金業の發達と衰退 三五

イ、起原と發達 三五

ロ、衰退 四〇

ハ、採金業のこの地方に及ぼした影響……………四

ニ、政治的影響……………四

C、公司戦争終焉後……………四

第二章 華僑人口に關する統計的考察……………四

第一節 概 説……………四

第二節 出生地別……………五

第三節 地域的分布……………五

第四節 出身地別……………七

第五節 職業別……………八

第六節 人口増加の趨勢とその原因……………九

第三章 蘭印政府の華僑對策……………一四

第一節 概 説……………一四

第四章 華僑の經濟的勢力……………一七

第一節 概 説……………一七

第二節 商業……………一八

第一項 概 説……………一九

第二項 ボルネオ西部州……………二〇

第三項 ボルネオ南東部州……………二〇

第四項 スマトラ……………二二

第五項 大東地方……………二七

第三節 金融業……………二九

第二節 政治的地位……………二〇

第三節 三民主義運動と共產主義運動……………二一

第四節 法律的地位……………二六

第五節 國籍問題……………二四

第六節 入國法及び勞働法……………二九

第一項 概説……………三九

第二項 華僑系銀行……………三〇

第四節 農業……………三七

第一項 概説……………三七

第二項 ボルネオ西部州……………三〇

第三項 スマトラ……………三〇

(一) 概説……………三〇

(二) スマトラ東海岸……………三〇

(三) デリーの煙草エステート……………三〇

(四) バンカ島……………三〇

(五) ニアス島及びリオウ群島……………三〇

第四項 其他の地方……………三〇

第五節 工業……………三〇

第六節 鑛業……………三〇

第一項 概説……………三〇

第二項 ビリトン島……………三〇

第三項 バンカ島……………三〇

第七節 林業……………三〇

第八節 漁業……………三〇

第五章 華僑の文化と社會……………三〇

第一節 教育……………三〇

第一項 概説……………三〇

第二項 華僑學校……………三〇

第三項 歐人學校及び土民學校……………三〇

第二節 宗教及び曆……………三〇

第三節 言論機關……………三〇

第四節 團體及其の構成員……………三〇

第一項 概説……………三〇

第二項 各種團體……………三〇

(一) 出身地別團體……………三四〇

(二) 職業團體……………三四二

(三) 互助團體……………三四五

(四) 文化團體……………三四六

第五節 阿片……………三四六

第六節 犯罪……………三四八

第六章 華僑の本國への寄與……………三五五

第一節 經濟的寄與……………三五五

第二節 政治的寄與……………三五二

第一項 概説……………三五二

第二項 清末より支那事變以前まで……………三五四

第三項 支那事變……………三五九

(一) 概説……………三五九

(二) 各地の狀況……………三六七

(1) バタビア……………三七七

(2) スラバヤ……………三九〇

(3) 其他内領各地……………三九五

(4) ボンチャナ地方……………三九八

(5) スマトラ各地……………四〇〇

(6) 其他外領各地……………四〇一

附録

(一) 主要都市華僑重要人物調査表……………一一四

(二) 華僑主要企業名鑑 (Handbook voor Cultuur en Handelsondernemingen)……………一一三

(三) 職業別華僑人口統計(一九三〇年度國勢調査)……………一一九

本文索引……………一一三

統計表并に諸表索引……………一一五

附圖 蘭印華僑地域別分布圖(一九三〇年度國勢調査)……………卷末挿入

南洋華僑叢書
第四卷

蘭領印度に於ける華僑

蘭領印度に於ける華僑

序 説

蘭領印度に於ける華僑を敘述するに當つて、まづ南洋華僑一般の概念を左の如く規定する。

『華僑と云ふのは「支那人の外國に移住したもの」であり、其の字義は華人の僑居、即ち一時的居住を指すのであるが、今日では海外に於ける一時的居住者の外に永住者をも包含するのである。而して華僑中には支那本國の生れで外國に居住する者と外國で生れた者とがある。前者の中にも比較的長期間居住し同化せる者と新に移住して同化せざるものとあり、後者の中には支那人の親から生れた純支那人と、支那人と土民の女と結婚してその間に生れた混血兒とがある。又混血兒の中にも單純混血兒と複雑混血兒とがある。

南洋華僑を通じ混血兒の數を見るにタイ國、フィリッピンは純支那人に比して著しく多く、蘭印、英領マレー、佛領印度支那等は少いのである。南洋地方に華僑の混血兒の多いことには古來二つの原因がある。第一は支那の移民は獨身の

男子が大部分を占め、既に元代からは女子の海外移住を禁止したので、華僑は土人女子と結婚したこと、第二は支那人の素質は心身共に土人に比し優り、土人の女は華僑の妻たることを光榮であり、利益であるとして喜んだ風があつたとである。

支那の文獻には華僑の中、移住地で生れた者を僑生と云ひ、母國生れの者を遷民と云つてゐる。僑生の父又は祖先は支那本國から移住したものであるが、本人は在住地で生れ、母親は其の土地の土人の女であり、又は南洋で生長した支那人の女であることもある。華僑に對しては各地にそれ／＼特別の俗稱がある。

蘭印に於ては、華僑自身は、支那本土に生れて移住したもの、即ち遷民を「新客」(Singkeh)と呼び、蘭印生れのもの、即ち僑生を「峇々」又は「哇々」(Baba)と呼んでゐる。土民は、華僑自身の稱呼を使ふこともあるが、大抵は「峇々」を「チナ・プラナカン」(Tjina Pranakan)「新客」を「チナ・トトク」(Tjina Totok)と呼んでゐる。ヨーロッパ人は、華僑自身の稱呼及び土民による稱呼を用ゐる外、「峇々」を「プラナカン・ヒネーゼン」(Pranakan Chineseen)又は「インド・ヒネーゼン」(Indo Chineseen)「新客」を「トトク・ヒネーゼン」(Totok Chineseen)とも呼んでゐる。一八六〇年(蘭印産業資本確立前)に於ける蘭印在住の華僑は、約二十二萬人であつたが、彼等の血管の中には多量に土民の血液が混じてゐた。

華僑間の日常會話にはマレー語が廣く用ひられてゐる。峇々の中には全然支那語を話すことの出来ない者が多い。新客は、出身地を同じくする者との間にその郷土の方言を用ひる場合もあるが、主として共通語たるマレー語で話してゐる。かくの如く言語の點ではいち早く土民に同化されるにも拘らず、社會的慣習の點では華僑の殆んど大部分が依然と

して今尙本國の風を墨守してゐる。

蘭領印度に於ては種々様々の華僑在住の型がある。

先づジャワ及びマヅラでは多數の永住者の基本層が存在する。即ち蘭印に永住的に定住する者で、その内の多くは既に數世代をこゝに過した家族を構成するものである。これらの華僑の多くはもはや彼等の故國に歸ることを欲せず、良い生活の方法を發見し、家族を形成し、さうして華僑の永住的社會を擴大させて行く。華僑社會を特徴づけてゐる東洋的家族制度、彼等の故國の生存條件に比して遙かに良好な福祉水準、支那人獨得の順應力、彼等が歸國した際に受けるかも知れぬ危険、これらは華僑の永住者社會を不斷に膨脹せしめて行く要因である。蘭領印度の各地には、かういふ永住的集團が所々に存在する。ボルネオ西部州には既に古くから、可なり多くの永住的華僑社會——主に農業社會——が存在してゐる。^{註5}同州の地理的條件からして彼等はシンガポール及び南支那と緊密な接觸を保つてゐる。古い永住華僑の子孫で、スマトラの若干の地方でいくらかの勢力を有してゐるものがある。例へば、パンカ、アチエーの一部、スマトラ西海岸に居住する華僑は、多くの場合、新來華僑が求める様な職業には就いてゐない。「新客」の蘭印生れの子女が、鑛山、農園、又は一定の華僑の仕事の領域で、彼等の父の職業を再び選擇するといふことは稀である。外領の他の地方にも亦、蘭印に生れ、主に商業に従事する基本層がある。而して又ジャワ及びマヅラに於けると同様に大部分は永久的に蘭印に定著して居る多數の新客も居る。

他方では又到るところに、特に東印度群島の西方領域に於ては、在住の他の型が支配的である。スマトラ(スマトラ東海岸、パンカ、ピリトン、南部スマトラ)の農鑛企業地域に於ける勞働力の甚しい不足が、十九世紀の後半期以後支

那人苦力の常続的輸入を行はしめた。これら労働者の大部分は数年間滞在し、貯金を携へて故國に歸還するのである。而してかくの如き滞在が同一人に依つて數回繰返される場合もある。

スマトラに一時的に滞在する華僑はこればかりではない。各種の華僑職業部門、例へば漁業、胡椒及ガンビル栽培、パンロン等に、又商業に於ては、團體的に又は獨立的に、或は他に雇傭されて、一個の勢力を成してゐる。これらの内には家族を持つものもあらう、併しそれに依つて必ずしも蘭印に定住するとは限つてゐない。妻が土人の女であつても、彼女を帶同して支那へ歸ることもある。

東印度群島の地理的條件が比較的纏りが悪いのと、經濟の發展段階がジャワ及びマヅラと外領とでは格段の相違があり、前述の如く華僑の蘭印在住の型が種々様々である爲め、蘭領印度の華僑を總括的に述べることは可なり冒險であるやうに思はれる。カーターの著書^{註6}も、恐らくは右に述べた配慮からであらう、原則的にはジャワの華僑と外領の華僑とを別個に取扱ひ、特殊の問題に限つて資料の最も揃つてゐるジャワの華僑を以て蘭印全體の華僑を代表させてゐる。然しながら、本書は南洋華僑叢書の一部として、大體に於て他國と同様の規準に依つて記述しなければならぬ關係上、筆者は總括的に論ずるといふ冒險を敢てなした。

〔註〕1 Bala とは、平岡閩造、ハチー・ビン・ウォンチ共著「馬來—日本語字典」によれば、「海峡植民地生れの支那人」、「南洋生れの支那人」、「馬來(南洋)生れの外國人」を云ふ。

2 Peranakan Chinezen とは、J. Moerman Jz: In en om de chinesche Kamp, p. 16 によれば、「蘭印に於て出生した者で、母親の種類の如何を論ぜず、其の父親が支那人の血液をその血管中に有する者」を言ふ。
 なお、Peranakan とは、Dale: Groot Woordenboek der Nederlandsche Taal によれば「支那人、アラビヤ人及び其他の東洋外國人と土民の婦女との間に生れた子孫」であり、R. J. Wilkinson: Malay-English Dictionary によれば「其土地生れの」或は「移住地生れの」といふ意味で、この語を分析すれば、Per (接頭語) + anak 子供 (名詞) + is (接尾語) となる。

3 Totok Chinezen とは、マレー語で純支那人の意味である。即ち新客を指す (J. Moerman: 前掲書 p. 16.)
 4 Indo-Chinezen とは、Vandenbosch: The Dutch East Indies, p. 302. によれば、「蘭印生れの支那人の大部分を占め……數世紀間蘭印に在住し、而して幾世代にも互つてインドネシヤ婦人と結婚によつて土民の血液を吸收した先祖の子孫」である。

5 南洋華僑叢書第六卷「南洋華僑と福建・廣東社會」九頁參照

6 W. J. Cator: The Economic Position of the Chinese in the Netherlands Indies.

第一章 華僑發展の史的概要

カーターは時間的な分類の基準として「一八一六年」を摘採してゐるのであるが、この年はナポレオン戦争後のヨーロッパの情勢に依つて東印度群島がイギリスの中間統治からオランダの統治へ復歸した時期であつて、蘭印の社會經濟史上から見た華僑の運命にとつては必ずしも重要な轉機とは云へないのである。卑見を以てすれば、土地法の公布に依つてインドネシア民族が商業資本的搾取から産業資本的搾取に編成替を受けた一八七〇年が華僑にとつても、オランダの東印度群島統治三百年間に於ける最も「紀念すべき」年であると考えられる。

第一節 封建時代

蘭印に於ける現代華僑社會の發達過程を理解するためには、彼等の東印度群島への移住の簡単な歴史を知つて置くことが必要である。

東印度群島に於ける封建國家の成立は、西曆紀元四、五世紀頃の西部ジャワに於けるヒンヅの建國に始まる。

當時支那とヒンヅ國家との接觸が未だ發生してゐなかつたことは、法顯の記録に依て明かである。彼は西曆四百年陸路支那からインド及びセーロンに旅行し、歸途西曆四一三年頃ジャワに數ヶ月を過したが、當時ジャワには未だ支那人の居住を見なかつたと敘べてゐる。

その後唐朝(六一八—九〇六)の諸年代記中にはジャワの記述が至るところに見られ、その内にジャワが支那皇帝に貢納したとある。宋の時代にも九二二年頃に支那と蘭印間の定期の交易に従つた多數の船舶の所有者であつた富裕な一華僑商人の記事が見えてゐる。従つてヒンヅ國家の成立後一、二世紀の後、カリンガ王朝又はサンジャヤ王朝の封建支那への貢納の形式で商業關係が發生したものであつて、シュリーヴィジャヤ(室利佛逝)佛教王國の興隆に伴つて、蘭印・支那間の交通も頻繁となつたが、未だに華僑社會集團の移住は無かつたのである。斯様な交易關係がその後にもシンド王朝二百年の間繼續したが、ジャワと支那との關係は次第に變化し、ツマベル王朝のケルタネガラ王時代(一二八九—一三〇九)年、元の忽必烈皇帝の命を受けた一使節はジャワの王宮を訪れ、支那の宗主權を認むべきことを傳へた。之に對しケルタネガラ王は唯に支那の要求に聽從しなかつたのみでなく、使節を虐待した後放逐したのであつた。かくて日本に對する會ての元の行き方と同様に、支那は膺懲のための兵隊二萬を編成し、一二九二年ジャワに襲來したのである。併しこの遠征軍も甚しい損害を受け、壊滅に瀕して逃げ歸つたと謂ふ。

尤もその後にも商業關係としての貢納はなほ存在してゐたが、マジャバイト王國(一二九四—一四七八)の末期には次第に稀薄となり、終には完全に跡を絶つた。

ジャワの支那に對する貢物の交換關係はかくて消滅したのであるが、ジャワ自體に於ては右の軍事行動の結果、支那的要素の成長を促したのである。殊に遠征軍が主に福建からの募兵から成つてゐたために、その後にはける福建人の特殊地位の形成に大に役立つたといはれる。ともかくこの事件を契機にジャワに對する定著的な支那人の移住が開始されるに至つたのである。

次で十五世紀の初期、明の成祖永樂帝の命を受けて鄭和が南海遠征をなした際、ジャワ、スマトラ等には可なり多数の土著支那人が居たやうである。鄭和がジャワに到つたのは永樂四年（一四〇六年）である。^{註1}
華僑の重要な商業中心地は、東部ジャワのグリセー（革兒昔、Gresik）及びスラバヤ（蘇魯馬益）、ツバン（杜板、賭班 Toeban）で十五世紀初めには各千餘家の富裕な廣東、漳州、泉州商人の居住した支那人居住地が出来、その内のあつたものはイスラム教に改宗してゐたといはれる。^{註2}

當時の華僑の輸入品は、陶器、硝子珠、絹織物、鐵器。輸出品は米、鹽、胡椒、更紗、鸚鵡等にして支那の貨幣は各地で通用した。

グリセーは港内の泥砂の堆積のため衰運に向ひ、ツバンは海賊の劫略に悩まされた。これがために貿易の一部は、ヨルタン（Yortan=東部ジャワ）及び西部ジャワ（バンタム及びジャカトラ）に移つた。^{註3}

ジャワの沿岸一帯のこれ等の多数の商業地は胡椒、米、砂糖等重要海岸貿易の興隆に導いた。

而して華僑の活動は獨りジャワに限らず、他の諸島にも展べられた。第一にスマトラであるが、同島はジャワよりも寧ろ早く華僑の影響を受けてゐた、蓋し支那から印度への通路に位置してゐたからであらう。

既に劉宋朝孝武帝時代（四五四—四六四）スマトラの一朝貢使笠留隨が王命を受けて支那に赴いてゐる。後にも定期に金銀、棉花、樟腦、藤、木棉、象牙、木彫、香、織物等の交易が行はれ、各地に支那人の居住するものが増加してゐる。^{註4}

十五世紀初頭には南部スマトラのパレンバン（三佛齊、舊港）に支那人の永住地が設けられてゐる。廣東の有名な海賊であつたパレンバンに住む支那人首長陳祖義は自己の船隊を持つてゐた。彼は、かの有名な鄭和をその西洋よりの歸

途、詐つて襲撃しようとし、同じ華僑の有力者施進卿の密告により反つて捕へられ、後に支那で死刑に處せられた（一四〇七年）。この後施進卿は支那皇帝より舊港宣慰司の稱號を授けられ同地の首長になつてゐる。^{註5}

パンカ、バリ及びスマトラ北部については年代記中に華僑に關する若干の記録がないではないが、これ等の地方と支那との間には左程密接な接觸はなかつたらしく思はれる。併し西部ボルネオは支那と重要な聯繫を保つてゐた。一四〇八年西部ボルネオのプー王（Prince of Puni=ブルネイ王）の支那渡航は、支那皇帝が、ジャワに對するプー王の朝貢の義務を免ぜしめた際に行はれてゐるが、それは、事實上ジャワ人の支配（マジジャバイト）に従つてゐる諸國へ貢納を要求することによつて群島に於けるジャワ人の宗主權を削減せんとする支那側の政策に出でたものであつた。^{註6}

又同様に、支那とジャワとを反目させるために、ジャワの小土侯によつて支那へ貢物が贈られてゐる。

如上の貿易關係の結果、ジャワ（ツッパン、グリセー、スラバヤ、ヨラタン、バンタム、ジャカトラ）及び其他の諸

〔註〕1 李長傳 中國殖民史 一一一頁

山本達郎「鄭和西征考」東洋學報 二十一卷 第三號

2 馬歡 瀛涯勝覽 爪哇國條

3 張燮 東西洋考 卷四 蘇吉丹

4 梁書 卷五四

5 明史 卷三二四 三佛齊傳

6 Krom: Hindoe-Javansche geschiedenis, p. 411.

島（スマトラ、西部ボルネオ）に十六世紀の終末にかけ多數の華僑の商業中心地が発生した。これ等の華僑は福建及び廣東省の出身であつた。更に、當時既に華僑の胡椒園及び米田がバンタムにあつたことが知られてゐる。エドモンド・スコット（一六〇二年）は次の如く述べてゐる。^{註7}『支那人は植物を植ゑ、胡椒を採集し、又米を作つてゐる。……だが彼等は國土の一切の富を吸収してゐる。』自家消費のための食糧作物の植付は、海岸地帯に住む商人にあつては當然であるが、一ヶ年以上の成育期間を要する胡椒の如き作物の栽培を行つてゐたといふことは、彼等が比較的永久的な居住を營み、背後地との聯繫を有してゐたことを示すものである。かくして、華僑のジャワへの猛烈な侵入が始められたのである。

一五九六年に最初の和蘭人航海者ハウトマンは、^{註8}バンタムの支那人區域について『美麗な住宅を有し、頑丈な寨柵で圍まれた特殊の地域をなして居る』と記して居り、又バンタム自体はジャワ本島の主要商業都市で支那、モルッカ群島、印度、アラビア等の一切の物産の集散地であつた。

ジョン・ジュールデーンの旅行記(John Jourdain, 1608—1617)にバンタムに關して『我々及び和蘭人は胡椒の代金として、年々多額の金子をバンタムに齎したにも拘らず、支那の戎克が年々それを支那へ持ち去るために、貨幣は常に缺乏してゐた』とある。^{註9}

第二節 東印度會社時代

東印度會社の存続は周知の如く一六〇二年から一七九八年までである。

一五九六年オランダ人の東印度到來は、既に不拔の地位を築いてゐた華僑にとつては、一の輝かしい時代の開闢を意味した。何故なら、聯合東印度會社の存続した二世紀間は、オランダ商業資本の選手として、又會社の手厚い保護と利益を樂しんだ時期として特徴づけられるからである。

オランダの掠奪貿易の手先としての華僑の地位を決定してゐるものは、第四代總督ヤン・ピーテルスゾーン・クーンの書簡である。即ち會社の商業は「大卸賣商業」に限定し、「市民」は仲介商人として活動し、小賣商は華僑のために残置さるべきものと定められた。

而して「市民（＝オランダ人植民者）の仲介商業が失敗に終つたのに反し、華僑の小賣商業は公然と發達に向ひ、前者の仕事の分野にまで喰ひ込んで行つた。

ヨーロッパ人の東印度出現は常に政廳、企業又は商館の開放を伴ひ、治安の確保の努力は、華僑の商業活動の地盤の擴大と身體財産の安全の増大を齎し、物質上の發達のためにオランダ人活動の利益に便乗することを可能とした。

東印度内部に生産力の培養を圖ることに依つては、なく、植民地特産品の流通過程に於て資本の蓄積を達成することを目的とした會社活動の本質からして、仲介業及び小賣業に於ける華僑の立場に相當の考慮が拂はれ、會社の輸入品の賣捌機構として尊重せられたのは當然である。

〔註〕7 Edmund Scott: A discourse of Java-etc. (Purchas His Pilgrimes, vol. 2. p. 441)

8 De eerste schipvaart der Nederlanders, (Linschoten vereniging), vol. 1, p. 121.

9 The Journal of John Jourdain, 1608—1617. (Hakluyt Society, p. 316.)

併し會社の獨占商品（コーヒー、胡椒、錫、香料）の買上取引に對する華僑の活動は非常に制約された。クーンが會社と競争して胡椒を購入し、市價を暴騰させる華僑を壓迫した如きはその一例である。

ジャカトラ（後のバタビア）で職人、米穀商蔗農及び椰子酒醸造人として働く華僑は會社の專賣に危険を及ぼすものでなかつたから、會社の保護を受けた。製糖及び醸造は關稅上の特惠をすら受け、無利子の資金を貸與された。且つ華僑の沿岸貿易及びジャワ支那間航路は政府の獨占權を侵害しない限り、凡ゆる援助を受け、保護の爲めの各種の規則が設けられてゐる。すなはち既に一六二〇年、從價五%の關稅が輸出入商品一般に賦課された。又會社貿易を保護するために、胡椒、花肉荳蔻、肉荳蔻、丁字及び樟腦に對する關稅は、輸入五%、輸出一〇%に定められた。然るに地方の醸造業及び同生産品に對する會社の商業を保護するためには、酒類の輸出入税は從價一〇%と定められた。だが、輸入にも輸出にも特別禁止品はなかつた。併し一六七一年には阿片（會社獨占品の一）及び酒類は絶對輸入禁止となつた。酒の輸入禁止は特に華僑の地方工業の保護のためであつた。一七四三年にはバタビアの製糖業は砂糖に對する二〇%の輸入税の創設によつて同様保護された。

當時のオランダ人の最大の商業根據地であつたバタビア港へ貿易を集中させるために、他の港に對する高率關稅の賦課を斷行し、若くはオランダ製織物と競争して輸入される外國商品に二倍の高率輸入税の賦課、後には輸入禁止の措置が執られたが、華僑の戎克によるバタビア貿易はかういふ苛酷な制限を免れた。一六四三年に支那より來る戎克は「積荷の多寡大小に拘らず、行先地の有無に關せず」一隻五五〇レアルを支拂ふのみで、「一切の繁雜な手數」から免除されること規定された。

右の所定金額支拂による關稅免除の制度は、後に至つても、戎克の大きさ及びその出發港によつて多少の變更あつたのみで（一七四三年、一七四六年、一八三七年）、存續されて行つた。一八三七年制定の規則によれば、支那より來る戎克は、その大小及び出發港に從つて輸入貨物一隻當り二、〇〇〇ギルダー乃至六、〇〇〇ギルダーの定額を支拂つた。^{註10}ラッフルスは彼の有名な「ジャワ史」に華僑活動の形貌を次の如く描いてゐる、「オランダの政策は華僑に凡ゆる援助を與へるにあるらしく思はれる。彼等はオランダ人の代理商である。彼等は外國商品のためのジャワ市場に殆ど無制限の支配權を握つてゐる。『市を介して營まれるもの他は、一切の島内商業が華僑の掌中に握られてゐる。彼等は相當の資本を擁し、屢々大掛りの投機を行ひ、問屋業の大部分を獨占し、土民栽培者から主要輸出品を買上げ、それを沿岸都市に搬送し、且つそれと引換へに島内に鹽及び……外國から輸入された重要商品を供給する。』沿岸貿易は主に支那人、アラビア人及びブギス人所有の船舶で以て營まれてゐる。』

ヤーン・ピーテルスゾーン・クーン總督のバタビア發展策は華僑の地位をますます強固擴充せしめて行つた。彼はバタビアを速かに「全東印度中の最大の商業都市」たらしむべく、そのために、他の地方、特にバタビアと拮抗しつゝあつたバンタムの商權を吸引し、商工業に従事する華僑の移住を奨励した。のみならず、バタビア港に寄港する支那戎克中の乗組員の一定數は同地に居住する義務あるものとし、必要のある場合には暴力をさへ振ふことを辭さなかつた。

併しクーンのこの政策は最初の間、充分な成功を博するには至らなかつた。その理由は先づ、バンタム土侯側の引止策が一應功を奏したのと、會社とジャカトラ、バンタム及びマタラムとの交戦繼續中で生命・財産の危険を懼れ華僑が

【註】 O Raffles: History of Java, Vol. I, p. 199—201—224.

躊躇したためであつた。^{註11}

一六一九年に三〇〇—四〇〇人であつたバタビアの華僑人口は一六二九年に二、〇〇〇人に増加したが、一萬人になるためには一七二五年迄待たねばならなかつた。^{註12}

バタビア附近の戦争状態の終焉後、なほ近郊には殺人、誘拐、放火等の犯罪が行はれて居たが、城内に於ける華僑居住者は激増し、従来も殆ど華僑の独占であつた製糖及び醸造等は益々繁榮した。これらの營業は一六一四年には既に存在してゐたが、バタビア政府がマタラム國から重大な利権を獲得した一六八〇年後に一大躍進を遂げたものである。

甘蔗の栽培及び糖廓の經營は主に貧困な華僑がバタビアの華僑富商から工場と資金の貸與を受けて營んでゐた。一工場約二百人の職工中平均六十人は華僑であつたといふから、バタビア近郊の農村に百三十の工場があつた一七一〇年には、七、〇〇〇人を下らぬ華僑が製糖工場に働いてゐたわけである。^{註13}

一七一〇年以後製糖業は、製品販路の減退と地方的な諸要因（一例、燃料の缺乏）のために漸衰するに至つた。一七五〇年になほ、六六個の糖廓があつた。一八一五年には僅かに三二個が操業してゐたが、同年以後に於てはジャワの他の地方での甘蔗の強制栽培制度の實施の結末として全く崩壊した。生産高は一七七九年にバタビア近郊で年額約十萬ピクルと算定され、一八二六年は僅かに二萬ピクルになつてゐる。

醸造業は糖蜜が強度の酒精飲料製造原料であるところから、製糖業に附隨して發達したものである。一七一二年にバタビア近郊に醸造工場一二を有してゐたが、一七九三年には二〇に殖えてゐる。これは總て華僑の所有であること勿論である。（一八二七年には八工場を残したに過ぎない）。

右の二工業の他に、十六、七世紀を通じバタビア近郊、バイテンゾルフ及びブリアンガン土民理事州在住の華僑は、大規模にコーヒー其他種々の市場作物の栽培に従事してゐたらしい。^{註14}

以上に見た如く、華僑は東印度會社に附隨して經濟活動を營む立場にあつたから、會社と華僑の共通利害を基礎として、後者の社會的、政治的立場は積極的に又は消極的に擁護された。

クーン總督は華僑居住區域の秩序と清潔の維持及び火災防止のための規則を制定した。^{註15}

又バタビアの華僑は、他の住民と同様に、バタビア城の塹壕城寨の構築に協力する義務を負はされてゐたのであつたが、一六二〇年頃には、このやうな市民的義務の大部分は月々の人頭税の支拂によつて免除されることになつてゐる。

その理由はオランダ人の口吻を借れば、『華僑は築城工事に勞働するよりも、もつと生産的な商業、農業、漁業、石灰焼き、洋服屋其の他に従事する能力を持つ』からであつた。^{註16}

華僑内部の社會問題の處理も、會社の左述基本的態度からして、全然華僑自身に委ねられ、干渉を避けた。この政策の具體化は先づ、バタビアに於ける最初の華僑頭領の任命に現はれてゐる（一六一九年）。この華僑頭領は蘇鳴崗（So Bing Kong）通稱 Bencon と稱された。『四百名の支那人が現在當地に於て我々の保護下に生活を營んで居り、これ等の者の中から才能ある者を頭領に擇び、なるべく彼等の仲間内で風紀の維持と觀察に當らしめる必要があり、このためにベンコンといふ者が支那人有力者達の間から彼等全員の名を以て推薦せられてゐるから、このベンコンに右の支那人達の頭領としての公權を授け、一切の内政問題を決着し、一切の他のトラブルについて我々に協力させることにした』。^{註17}

後にこの稱號は「華僑甲必（比）丹又は頭領」（Capiteijn (Capitein) ofte overste der Chineesen）と變更された。^{備考一、二}

備考 二

バタビアに於ける華僑の歴代ライテナント人名表 (1678—1809)

支 那 名	任命されたる年月日			當時の總督名
	西 洋 曆	支 那 曆		
1 Lim Si Say 林	14 Juni 1678	康熙	17 4 26	van Goens
2 Li Tsoeko 李	16 Mei 1679	同	18 3 26	"
3 Oeij Koeko 黃	12 Januari 1682	同	20 12 4	Speelman
4 Que Pauko 郭	3 Augustus 1685	同	24 7 4	Camphuijs
5 Lim Kee(n)ko 林敬哥	4 Augustus 1685	同	24 7 5	"
6 Ong Gouko 王	26 Maart 1694	同	33 3 1	van Outhoorn
7 Que Kiauko 郭	10 Juni 1695	同	34 4 29	"
8 Tambocco 陳穆哥	16 Juni 1702	同	41 5 21	"
9 Que Hoenko 郭訓哥	5 Mei 1705	同	44 4 13	van Hoorn
10 Lie Joncko 李容哥	5 Mei 1705	同	44 4 13	"
11 Ho Lienko 何蓮哥	10 Juni 1707	同	46 5 11	"
12 Lim Tsoenko 林春哥	28 Juni 1720	同	59 5 23	Zwaardcroon
13 Lim Somko 林森哥	28 Juni 1720	同	59 5 23	"
14 Tan Engkong 陳榮公	28 December 1725	雍正	3 11 24	de Haan
15 Tan Tionqua 陳忠官	28 December 1725	同	3 11 24	"
16 Nilocko 連祿哥	8 Juli 1729	同	7 6 13	Durven
17 Ongeengsaij 王應使	8 Juli 1729	同	7 6 13	"
18 Io Seenkong 楊成光	21 October 1729	同	7 8 29	"
19 Ni Hoekong 連福公	6 Februari 1733	同	10 12 22	van Cloon
20 Li Hoko 季和哥	23 Juni 1733	同	11 5 12	"
21 Que Oeijko 郭威哥	12 Maart 1734	同	12 2 8	"
22 Nio Kanko 楊簡哥	31 December 1734	同	12 12 7	"
23 Oeij Tsomko 黃箴哥	28 September 1736	乾隆	1 8 24	Patras

備考 一

バタビアに於ける華僑の歴代甲必丹人名表 (1619—1809)

支 那 名	任命されたる年月日			當時の總督名
	西 洋 曆	支 那 曆		
1 Bencon 蘇鳴崗	11 October 1619	萬曆	47 9 6	Coen
2 Limlacco 林六哥	21 Juli 1636	崇禎	9 6 23	van Diemen
3 Bingam 潘明巖	4 Maart 1645	順治	2 2 7	"
4 Siqua 顏二官	10 April 1663	康熙	2 3 3	Maetsuijker
5 Tsoa Wanjock 蔡煥玉	14 Juni 1678	同	17 4 26	van Goens
6 Queeconko 郭郡哥	3 Augustus 1685	同	24 7 4	Camphuijs
7 Limkeenqua 林敬官	10 Juni 1695	同	34 4 29	van Outhoorn
8 Tambocco 陳穆哥	11 April 1707	同	46 3 9	van Hoorn
9 Quebauqua 郭昂官	3 Maart 1719	同	58 1 13	Zwaardcroon
10 Que Tioenqua 郭春官	6 Januari 1733	雍正	10 11 21	van Cloon
11 Nihoekong 連福公	11 September 1736	乾隆	1 8 7	Patras
12 Lim Beengko 林明哥	28 Juni 1743	同	8 5 7	van Imhoff
13 Oeij Tsomko 黃箴哥	21 April 1747	同	12 3 12	"
14 Oeij Tsjilauw 黃鍾老	7 Juli 1750	同	15 6 4	"
15 Lim Tjipko 林緝哥	27 Augustus 1756	同	21 8 2	Mossel
16 Ting Ingko 唐恩哥	31 Januari 1775	同	40 1 1	van der Parra
17 Oeij Hingko 黃恒哥	19 December 1775	同	40 10 27	"
18 Swa Toenko 蔡郭哥	26 November 1784	同	49 10 14	Alting
19 Ong Tjoseeng 王珠生	8 Juni 1790	同	55 4 26	"
20 Oeij Biankong 黃綿公	11 October 1791	同	56 9 14	"
21 Gouw Tjangsie 吳纘緒	27 December 1800	嘉慶	5 11 12	van Overstraten
22 Tan Peengko 陳炳哥	26 October 1809	同	14 9 18	Daendels

B. Hoetink : Chineseche Officieren te Batavia onder de Compagnie, (Bijdragen Deel 78) P. 8—9

					年	月	日	
50	The Tiako	鄭春哥	15 December 1772	同	37	11	21	"
51	Swa Thoenco	蔡郭哥	31 Januari 1775	同	40	1	1	"
52	Ong Soeseeng	王珠生	4 Augustus 1775	同	40	7	9	"
53	Tung Pi-Enko	唐偏哥	19 December 1775	同	40	10	27	"
54	Ko Kimko	高根哥	29 December 1775	同	40	11	8	van Riemsdijk
55	Nio Koangko	楊欵哥	8 Juli 1777	同	42	6	4	"
56	Tan Hoelo	陳富老	2 December 1783	同	48	11	9	Alting
57	Oeij Biankong	黃綿公	26 November 1784	同	49	10	14	"
58	Lim Hantan	林漢丹	12 October 1787	同	52	9	2	"
59	Oeij Geeko	黃繼哥	22 December 1789	同	54	11	6	"
60	Tan Poko	陳報哥	8 Juni 1790	同	55	4	26	"
61	Lim Tjoengkong	林春公	26 October 1790	同	55	9	19	"
62	Gouw Tjangsie	吳續緒	8 Februari 1791	同	56	1	6	"
63	Tan Koanko	陳寬哥	11 October 1791	同	56	9	14	"
64	Lim Tiangseeng	林長生	16 Maart 1792	同	57	2	24	"
65	Tan Peengko	陳炳哥	13 November 1792	同	57	9	29	"
66	Oeij Tamko	黃董哥	9 Januari 1795	同	59	12	19	"
67	Tee Honko	戴弘哥	1795	同				"
68	Gouw Kocko	吳科哥	20 April 1798	嘉慶	3	3	5	van Overstraten
69	Tan Soeijko	陳水哥	27 December 1800	同	5	11	12	"
70	Kang Phoboen	江波紋	6 Januari 1801	同	5	11	22	"
71	Souw Kongko	蘇廣哥	26 October 1809	同	14	9	18	Daendels
72	Lie Tongong	李東旺	30 November 1809	同	14	10	23	"
73	Tan Mappan	陳媽抱	30 November 1809	同	14	10	23	"

B. Hoetink: 前掲書 p. 88—95

					年	月	日	
24	Kou Tsinqua	許進官	27 Mei 1738	乾隆	3	4	20	Valckenier
25	Ni Tonqua	連鐘官	13 Juni 1738	同	3	5	8	"
26	Oeij Theeko	黃提哥	26 Januari 1740	同	4	12	28	"
27	Oeij Tsomko	黃箴哥	28 Juni 1743	同	8	5	7	van Imhoff
28	Tan Iko	陳怡哥	28 Juni 1743	同	8	5	7	"
29	Lim Kocko	林國哥	7 Mei 1745	同	10	4	6	"
30	Tsou Tsoen Seeng	蘇俊生	21 April 1747	同	12	3	12	"
31	Tang Wang Seeng	陳遠生	10 December 1748	同	13	10	20	"
32	Oeij Tsilauw	黃市關	10 December 1748	同	13	10	20	"
33	Lim Tjipko	林緝哥	3 Juni 1749	同	14	4	19	"
34	Ong Eng Saaij	王榮使	29 December 1750	同	15	12	1	Mossel
35	Lim Ki-Enko	林健哥	15 Juni 1751	同	16	5	22	"
36	Lim Theecko	林欵哥	8 November 1754	同	19	10	5	"
37	Khouw Hong Liang	許芳良	27 Augustus 1756	同	21	8	2	"
38	Thee Poanko	戴弁哥	18 December 1759	同	24	10	29	"
39	Khouw Tjangko	許燦哥	10 Juni 1762	同	27	5	18	van der Parra
40	Louw Nungko	盧郎哥	10 Juni 1762	同	27	5	18	"
41	Gouw Boenko	吳文哥	30 December 1763	同	28	11	26	"
42	Tung Ingko	唐恩哥	6 April 1764	同	29	3	6	"
43	Louw Sinkong	劉成光	5 Juli 1764	同	29	6	7	"
44	Oei Hinko	黃珩哥	19 Februari 1765	同	30	1	30	"
45	The Lionko	鄭隆哥	26 Mei 1769	同	34	4	21	"
46	Tan Tjaijko	陳彩哥	3 October 1769	同	34	9	4	"
47	Lim Teko	林德哥	22 Juni 1770	同	35	5	29	"
48	Gouw Poansoei	吳泮水	2 October 1772	同	37	9	6	"
49	Ong Tjako	王藉哥	17 November 1772	乾隆	37	10	22	van der Parra

會社の支配力がジャワ及び外領に浸潤するにつれて、多少共華僑人口の多い地方では、華僑系の頭領の任命が常に行はれてゐた。

會社は又、バタビアの市政に華僑代表を参加させてゐる、即ち一六二〇年會社によつて華僑の頭領が行政會議議員に指名され、『支那人に關する事項につき同國民の安全を向上するため議決権を與ふべきこと』が定められた。

更に華僑の相續問題の調整のために管理委員會の活動を促し、又會社の補助によつて同委員會は貧困華僑のために病院を設け、後には貧困華僑の子弟のために學校を設立した。本校は一七四〇年の叛亂後閉鎖されたが、一七五三年に再び開校された。^{註18}

右のベンコンは俸給は受けなかつたが、職務に伴ふ充分な財政上の利益を享けた、例へば、華僑の賭博行為に對する一種の税の分前、秤り税（税關に集まる物産の秤量に對する税）を賦課する權利の許可の如きである。而して一六三三年には土民流通用具として鉛貨鑄造の獨占權が賦與されてゐる。^{註19}更に彼は會社の材料及び工事請負人の供給者であつた。

以上のやうな相互利用の形の下にバタビア附近の華僑は著しく増加して行つた。併し蘇鳴崗の如き特權階級の存在を認めたことは華僑社會の内部に矛盾を胎ました。即ち會社の與へた特殊權益地盤の内に收容しきれない華僑大衆の發生が之である。かくて一七四〇年の華僑の叛亂とオランダ人の華僑大虐殺事件の要因が成熟しつゝあつたのである。

當時華僑移民は無制限に許可されてゐたのであつたが、華僑の頭領はかゝる移民に對し制限手段を執ることを會社に要請した（一六九〇年）。仍て法律が公布せられ、同法に依て、バタビア政府の招聘の結果バタビアに居住するに至つた一六八三年迄に移住した華僑は、適法の居住者たることが認められたが、その後に入國した移民は申告を行ひ、居住の

許可を受けることが要求され、無論「不適當な」華僑には許可書の下附が拒否せられた。^{註20}

併しながら本規則の實行は極めてルーズで實際的な効果は擧げ得なかつた。不正入國が従來同様に行はれ、浮浪華僑がバタビア附近に跳梁した。このために次々と、嚴重な（併し取締は出鱈目の）諸規則が公布され、ルンペン華僑の抑壓、犯罪人の檢擧、セーロン及びケープ・コロニーへの追放を以て脅威されるに至つた。

華僑の居住の可否を判斷する規準は先づ、會社の獨占貿易に差し障りの無いことであり、二つには治安の維持であつた。

- [註] 11 Hoetink : So Bing Kong, pp. 348—49. Colenbrander, Coen, Bescheiden, vol. 3, p. 517.
 12 Hoetink : So Bing Kong, p. 350.
 13 Archief voor de Suikerindustrie, 1923, pp. 405—8.
 14 de Haan, Prangan, vol. 3, p. 8.
 15 Hoetink : So Bin Kong, p. 347.
 16 Plakatoek, vol. 1, p. 76. Colenbrander : J. P. Coen, III, p. 648.
 17 Hoetink : So Bing Kong, pp. 354—5.
 18 Roo de la Faille : De Chineseche Raad te Batavia en het door dit college. pp. 307—312. Plakatoek, vol. 6, p. 533.
 19 Hoetink : So Bing Kong, pp. 360—362.
 20 Plakatoek, vol. 3, pp. 268, 275.

支那本國に於ける清朝の覇權の確保と共に明朝の殘黨を先頭に大量の支那人が流れ込んで來た。併し當時新しい支那の移民が經濟活動に充分參加すべき餘地は窄められてゐた。これらの不平分子を中心にバタビア附近に蠻行が繰返され、ケーブ・コロニー及びセイロンへの追放處分は嘗てない規模で厲行された。

この處分が次には、會社の墮落した警察官吏に依つて平和な華僑居住民の財産を強奪する手段に悪用されるに及び、不平不満は瀰漫し、會社の統治を轉覆せんとする計畫が華僑に依て企てられるに至つた。

遂に一七四〇年、バタビア近郊より襲來した華僑暴徒は叛旗を翻し、城寨の攻撃を始め、市内の多くの華僑も亦附近に雲集する武裝した無賴漢の中に身を投じた。政廳側の防備は手薄であつたが、間もなく城壁内の華僑區域に火災が起り、會社側は市内の華僑が全部叛亂に呼應して起つたものと認め、かくて華僑の大殺戮が行はれ財産は掠奪される一大慘事が生成した。

治安回復後、總督は會社の重役會議によつて責任を糾問され、公判の後、獄死した。

叛亂後バタビアには三、四三一人の強壯な華僑男子が残つた、即ち、商人一、四四二人、農夫、石灰焼及び酒造り九三五人、砂糖造り及び樵夫七二八人及び職人三二六人である。

かくて、狼狽したオランダ人は各國籍人毎に決められた一定の居住區域内に住む義務を定め、同地域外に生活することを欲する者は特別の許可を受くることを要すとした。この規則は、かつて嚴格に施行されたことはなかつたが、ジャワに於ては一九一九年までは全然廢止されずにあつた。

叛亂後諸般の情勢が全然改善されたとは見えなかつた。一七五四年に華僑頭領は再び、「不逞」華僑に對してモット強

硬な手段が執られることを主張した。同年の公令中に、支那人の密入國が「恐るべきものとなりつつある」と述べられてゐる。一七五四年の入國者四、六〇〇人中、僅かに一、九二八人が登録せられたにすぎない。^{註21}

十八世紀の終りにかけて、各種の政府の獨占品又は私人に對する權利を請負はす制度（以下獨占請負制度と呼ぶ）は華僑の支配的な經濟的地位の向上に寄與するところ頗る甚大であつた。殆ど全く華僑が請負人に指定されたのである。

ここでは獨占請負制の全部に互つて説明することは困難であるから、その内の最も重要なものだけに限定して一瞥しよう。

最古のものの一つは恐らく、「船荷請負」であらう。これは定率によつて（船舶の出入貨物に對し）輸出入税を賦課する權利であつて、一六二二年バタビアに始められ、會社領域の擴大と共に擴げられて行つた。この「船荷」請負は他の獨占請負と同様に、一年又は二年の期間を限つて最高金額の申込人に落札された。一六五五年—一七四〇年の間を除き、船荷請負は會社の存立の全期間を通じて慣例となつた。

土民の都市生活に大きな禍害を與へたものは「市場請負」（市場の使用に對し使用料を賦課する權利）と特定地域に於て土民生産品の全部を上げる請負制度であつた。

更に、鹽の製造販賣、特定河川江灣に於ける排他的漁撈權、煙草稅賦課及び一定道路に對する通行稅又は道路稅の賦課等々に對する請負制を擧げることができる。

この制度が恐るべき結果を遺したことはいふまでもない。何故なら殊に請負條件の恪守に對する監督は放漫なもので

[註]21 Plakatboek, VI, p. 666.

あつたし、請負人にあつても監督者達が自己と金錢上の親密な關係を結ぶようと賄賂の提供に努めたからである。

この獨占請負制は單に會社獨特の制度であつたのみでなく、多くの土侯達によつても亦行はれた。

全ジャワ（土侯領も含む）に汎く行はれた無制限も同様の市場請負制にあつて請負人は一國の交易全部を掌中に收めんと努めた。鹽製造の請負制のために、ジャワの幾多の沿岸村落が請負とせられ、その住民は請負人の利益のために契約労働によつて製鹽することを強制せられ、地代の支拂ひ、その製品の販賣の義務をも課せられた。

十八世紀の終りにかけて、會社の使用人達は俸給の他に得られる不法収入を當然なるものと思つてゐた。かゝる腐敗した連中によつてなされる監督がいかに放漫なものであつたかは想像に餘りある。且つ大抵は、請負人との苛酷な信用契約に縛られてゐた土侯達の墮落も亦些かも變りはなかつた。

搾取は社會の各階層を通じて行はれ、土民大衆がその犠牲者の位置を占め、請負人が利益を私した。

ジャワに於ける華僑の經濟的地位確立の要因の一つは實にこの獨占請負制に求められた。結果からすれば、請負契約を通じて國土の大部分の行政上の管理權が華僑の掌中に落ち、謂はゞ土民に對する請負政廳の位置を占めたものであつた。ある地方では村落請負制のために住民の一切の人格的自由が消滅するに至り、請負人への債務擔保のための奴隸と化したのである。

かゝる状態の結果として、チェリボンに於ては繰返し暴動が勃發し（一七七八、一七九三、一七九六及び一八〇二年）、一八〇九年土侯領の没落を招いたのみならず、會社自身の崩壞の原因の一をなした。最後に、會社統治下に於ける華僑の土地所有の問題に就て一瞥する要がある。

先づ華僑は、特許權の伴ふ私領地の所有者であつて、それは封建的特權の數々を有するものであつた。華華の私領地に居住する民衆は租税を支拂ひ、地主のために夫役に従事した。だが、華僑が大規模に土地の處分權を獲得する主要の目的は、廣大な地域（數村、時としては數郡に亘る）の請負權を手に入れることであつた。これ等の請負契約は被請負地域の全人口を包含する土酋達と行はれた。民衆はそれによつて、指定産物の一定量を引渡し、契約労働に従ひ、地租を支拂ひ若くは一定量の作物を提供することを義務づけられた。殆ど例外なく、請負人は新たな封建領主として振舞ひ、必要あるときは暴力を差向けて己れに都合の悪い人間を驅逐した。請負人は「吸血動物の如く」欲するものの全部を獲得した。

請負制が短期である場合には村落の荒廢は殊に徹底的であつた。長期の請負制に於ては住民の逃亡を防ぎ、ある程度の生産力の培養を圖るのが請負人の利益であつた。良好なる經營と軽い租税が周圍の地方からの人口の流入を招來せしめた例も二三あるにはあつた。^{註22}

しかし、かくの如き人口の移動は稀であつた。蓋し住居の移轉に對しては嚴重な禁止規定があり、農民はその土地に緊縛されてゐたからである。

市場請負の他に一切の獨占請負制（卸小賣商、沿岸貿易等）が華僑のものであつたことを敘べた後、ホーヘンドルプは結論して「支那人はジャワの所有者であつた」と言つてゐる。^{註23}

[註]22 Clive Day: The Dutch in Java. p. 136.

23 Hogendorp: Bericht. p. 55.

この際、會社支配下の華僑の社會問題に若干觸れて置かう。

先づ宗教自由の問題。一六四二年のバタビア法典は改革派基督教會の他は、如何なる宗教の實踐をも嚴禁し、殊に支那人及びムーア人の一切の宗教を撲滅すべきことがその中に規定されてゐた。一六七四年になつて、他の民族の宗教自由を制限するこれ等の規定は、それが社會上の困難な問題を惹き起さない場合に限つて適用されるべきものであることに變更された。

各種の資料を検するに、會社の創立から没落に至るまで、華僑移民は本國から妻を携行することは殆どなかつた。十七世紀に入つて後もすつと、ジャワに支那人婦人を見ることは極めて稀であつた。支那人と土民の女奴隷若くは自由な婦人との雜婚は屢々行はれた。ジャワの貴族との婚姻による結縁關係も亦存在した、バリ婦人及びスンダ婦人（殊にスマダン地方からの）は特に華僑の好むところであつたらしい。疑ひもなく、かかる結縁關係より生れ出でた子孫の多くは土民中に全く吸収せられた。而して民族としての支那人が、かかる人種の増殖のうちに全然解消をみてゐない原因は、純粹の血液をもつた華僑の絶えざる流入のうちに求むべきであらう。而して又、それと同程度に、内陸の村落に於てよりも、比較的容易にその國民性を保持し得た特殊の居住地域に華僑が離隔して生活した事實に歸すべきであらう。以上を要約すれば、

二世紀に互る會社の存続中、ジャワに於ける華僑の侵入は顯著で、外延的にも内包的にもその侵入は絶えざる増大を見、十八世紀の終りにかけて、商業の領域、及びある地方では又農工業に於て、土民に對する完全な經濟的支配の特徴を帯びるに至つた。

華僑のかかる侵入の主なる原因は、—その活動力勤勉及び商業的才能の點を除き—土民が外國人の收奪から自己を保護する資質を缺いてゐた事實、並に土民が土侯からも會社からも、總じていかなる主權によつても、かかる害惡から保護せらるることがなかつた事實の裡に求めらるるものである。

それに加へて、その領域内に意識的に實施した或は又存在するに委せた獨占請負制度と、會社の採つた華僑と土民間の紛争問題回避政策は、華僑侵入の強化を容易ならしめたのであつた。

この回避政策の他の結果は、華僑の經濟的利益のみならず、宗教的、社會的、政治的利益が侵害せらるることなく、却て尊重されることとなつたのである。

華僑の存在は確に土民の利益とはならなかつた。土民の小賣商を破滅させ、その農工業を停滯せしめた。土民の生活水準は華僑の經濟活動によつて何等向上するところなく殊に獨占請負制を通じて土民は華僑に隸屬させられてその活動の自由を奪はれ、土民自身の經濟的發展は多大の制約を受けたのである。

第三節 一八七〇年迄

東印度會社の瓦解後一八七〇年までのジャワは、オランダからフランス、イギリス、再びオランダへと主權が轉々更代した時期、強制耕作制度が全ジャワ住民に惡魔的な作用を及ぼした時期として特徴づけられる。併しジャワの社會經濟の本質は依然商業資本主義の支配から流れ出る諸要素から成立してゐた。

華僑の地位は先に見た如く、十八世紀の終りにかけて確固不動のものとなり、東印度會社と土民との間の連鎖體とし

て、土民物産の購入、會社輸入品の販賣、會社・土侯の各種租税の取立に於て有効な役割を果したのであつたが、會社の崩壊後に於ても前段に敘べた如く社會經濟の本質に何等の變革が行はれなかつたのであるから、連鎖體としての華僑も一方の環を會社といふ特殊統治機關から東印度政府といふ國家機關に繋ぎ替へたのみで、その地位に大なる變化はあり得る筈はなかつた。

多數の商品の輸入はもはや政府の營むところではなかつたが、鹽・阿片の販賣、煙草・砂糖・コーヒー・藍の買上げは從來通り政府の掌中に殘存し、從て華僑は仲介業者として留り得たのである。

更にジャワに於ける華僑の經濟的侵入を誘導した最も有力な原因の一つは、東印度會社の請負制度であることは既に述べたが、この制度は十九世紀の中葉後まで存続したのみならず、請負人に對する監督が稍々嚴格になつたのみで、制度そのものは寧ろ擴張されたのである。請負制度が華僑の地位の向上に寄與した効果は、いくら高く評價しても、過ぎるといふことはない。即ち華僑に對して居住及び旅行の自由制限があつたのにも拘らず、請負制度の存在に因つて實際には有效な適用をなし得なかつたのである。ブロックスは、一八五〇年に市場税請負の仕事のためにのみ一四、〇〇〇人に及ぶ華僑がジャワ中に擴がつたと云つてゐる。^{註24}

更に又、名目上は請負業務のためとし、事實は自己の商賣を營む者が多數に居つた、といふことも考へ得られないではない。かくして、この制度は華僑請負人及び之につながる人間達のために一種の商業獨占のための地盤を準備したものであつた。請負人中の或る者は自己の販賣區域内の他からの競争を排除するために、他人の請負權をも高價な代價を提供して自己の手に收めんと試みた。その費用は無論土民大衆に轉嫁され、經濟的弱者の保護を目的とした華僑の旅券

及び居留地制が、却て弊害を累加する惡制度たることが露呈されるに至つた。

一八五〇年頃の主な請負の種類は、市場税請負（公設市場に搬入する商品に課税する權利）を最大とし、阿片請負、酒精飲料販賣請負、質屋請負、入頭税請負、煙草請負、魚類販賣請負、漁業請負、遊興税請負、屠殺税請負、ワヤン請負、橋梁請負等であつて、これらの内のあるものはジャワの全部及び外領の一部に實施され、他は地方的に行はれた。この内の主要であり且つ從つて及ぼした禍害の最大であつたものは市場税請負制度で、プリアンガンを除くジャワの各地の全村落に實施された。請負制度の害悪は既に蔽ひ難いものとなり、次のやうな説明の下に、一八五一年先づ市場税請負から廢止されるに至つた。

「ジャワに於ける市場及び露店課税、就中この收入源の請負制は内國商業の發達を妨げ……下層社會の必需品價格を高からしむるものである。」

「國庫に入る金額は大衆に課せらるる負擔に比例しない。」

この時期以來殆ど總ての請負制は消滅し、その後に残つたものはや一時的な請負制の性質を喪ひ、公權を伴はぬ一種のコンセッションと化した。例へばある地域の燕巢採集權の如くである。

かくて請負制についての華僑の獨占的地位は消失した。併し殊に一八七〇年後に於て華僑がヨーロッパ人卸賣商と土民大衆との間に介在して商工業に飛躍する方法は、この制度の恩恵に依つて充分に學びとられてゐたのである。その故に華僑のかゝる地位は今日までジャワに於ける經濟的活動の主要分野を築き上げた温床であつたといふ意味で、その歴史

〔註〕24 Broekx : Het recht tot wonen en reizen, p. 34.

的重大性が充分認識されるべきものである。

第四節 産業資本主義確立以後

土地法の制定された一八七〇年頃より蘭印に産業資本が確立され、ヨーロッパの大資本が大規模農業、主要工業、重工業、卸賣業、大運送業、銀行業等に投下された。従来、官營事業を除けば唯一の私人的資本の所有者たる地位より華僑は失墜するに至つたが、高度に資本化した大規模經營以外の形態を好都合とする幾多の事業部門が華僑の手に残された。ヨーロッパ産業資本の流入は蘭印經濟をして高度の發展を遂げしめ、この發展に隨伴して生じた商業貿易の殷盛は、既にこのときまでに其の基礎を築き上げて終つてゐた華僑買辦資本をして著しく膨脹せしめた。華僑はすばらしい獅子の分前にあづかつた。

華僑を拘束する幾多の差別待遇は次第に廢されて行き、同時に華僑社會の前資本主義的要素は揚棄すべく要請された。しかし華僑社會はこの要請に順應することが出來ず、依然として買辦的商業資本の段階にあり、産業資本への参加の割合は極めて僅少である。

産業資本による蘭印の開發は大量の勤勉なる支那人苦力を絶對的に必要とし、年々多數の苦力が南支の各港から蘭印に渡り（第一表参照）、彼等の本國への送金及び歸國の際の携帶金は本國經濟に寄與するところ多大であつた。

第1表 1875年より1898年に至る厦門及び汕頭—
ジャワ及びスマトラ間の支那人船客數

出 發 年次	厦門		厦門		汕頭	スマトラ
	ジャワ	厦門	スマトラ	厦門	スマトラ	汕頭
1875	1,183	8
1876	974	216
1877	1,975	169
1878	1,474	215
1879	995	258
1880	722	268
1881	575	1
1882
1883
1884
1885
1886
1887
1888	416	1,222
1889	3,825	73
1890	5,066	44
1891	3,912	32
1892	2,991
1893	5,930
1894	5,882	466
1895	1,227	19	8,342	1,054
1896	7,194	629
1897	5,302	1,161
1898	6,360	827
合計	8,314	1,135	1,227	19	56,026	4,286

(Journal of the China Branch of the Royal Asiatic Society,
Vol. XXXIII [1899—1900], p. 181—182.)

附 ボルネオ西部州華僑發展史

茲にボルネオ西部州のみを特に取扱ふ所以は、この地方に於て華僑が壓倒的に大なる勢力を有し、頗る奇異なるコースを辿つたこの地方の開発に華僑が指導的な役割を果したことに由る。現在、この地域の華僑は蘭印の他の地方に於けるよりも數等大なる農業社會を形成し——一般に蘭印では華僑は農業よりも寧ろ商業及び鑛業に従事して居るが、こゝは全然反對である——、且つ古々椰子、胡椒、ゴム及びガンビル等の小規模ではあるが、獨立の栽培者として、又大都市の近郊に於ける園藝家として——栽培事業の苦力としてではなく——存在してゐる。しかし初期に於ては自發的な農業移民は問題とならず、單に華僑の商業的活動及びこの地域の北東部の採金事業の労働者として意義を有したに過ぎなかつた。商業貿易に於ける華僑の地位は獨占的であり、ダヤク族をして世界經濟に連結せしめた彼等の功績は充分に讃へられてよい。

こゝでは、主として華僑の採金業に關して述べ、商業及び農業に關しては第四章『經濟的勢力』に於て記述する。

A 華僑採金業發生前の狀態

先づ、華僑との最初の接觸の事實を併せて一七六〇年以前の西部ボルネオに於て感ぜられた外國勢力について簡述しよう。

華僑の意識的植民の實際上的出發點は、一七六〇年頃(Veth氏によれば一七七〇年)で、この際にサムバス(Sambas)

華僑が讓渡された土地に居住するダヤク人との間に紛議が起つても土侯は一切の責任を回避し、寧ろダヤク人を煽動して華僑を苦境に陥れ、到る處に流血の慘事を起さしむるに至つた。又、サンバスの土侯及びその他の土侯は華僑がダヤク人の如く柔順に採掘を行はないのを知つて彼等を嫌つてゐた。更に又、土侯と華僑との間に結ばれた幾多の契約の内には、一、土地の借入、一、汰鉢の洗滌水、一、道路の維持、一、米の供給、一、移民の制限、等に關して不明瞭で、紛議の起り易い點多く、屢々暴力を以て問題の解決が圖られ、不安は殆ど絶える間がなかつた。これ等の不安は政府が一八五五年に至つて決定的に兵力を派して問題を處理するまで繼續してゐたのであるが、土侯の治政下には何等の改善の見込がなかつた。否サンバスの土王の如きは海賊の一頭目にすぎなかつたのである。

かくして華僑達は自己の安全と事業の安全な遂行を目的として自治的な政治及び經濟の單位としての公司の形で組合の制度を發達せしむるやうになり、これは往々華僑と契約した政府及び土侯に依て確認さるゝに至つたのである。一八二二年には政府布告に依て『鑛業公司が鑛山業の目的のために彼等が實際に占有する一切の土地の使用』が確認されてゐる。³⁰

この公司は初期に於ては金坑の作業を發展せしむる鑛業家達の單なる組合であつたものが、二、三〇年を出ずして一箇の共同社會に迄發展し、その地位は經濟的、社會的、政治的に高度の獨立性を帯び、或る時には一種の聯邦國とも言ひ得られるまでに發展して行つた。この強力なる聯邦國は一八八四年政府の調査によつて始めて知られるやうになつたの

[註] 29 Veth: Borneo's Westaedeeling, Vol. I, p. 299.

30 Veth: Ibid: Vol. II, p. 136.

である。同時に亦この公司は、土侯、蘭印政府及び近隣の華僑同族に對して利害の衝突を來した場合、必要に應じては武力を以て自己の主張を貫徹せんとする勢力を示したのである。同公司は相互の鑛業上の利益を擁護したのみならず、彼等は自らの行政機關を所有して、司法、警察、貨幣、租税、學校、社寺等をも管理した。彼等は責任立憲制國家機關として行動し、その保護の下にある華僑に對して一七六〇年より一八五〇年までの約百年の永きに互つて政府及び土侯

が爲し得る以上の確乎たる治安を維持するに至つたのである。又この公司は輸送の問題に極めて大きな關心を有し、道路の開設、河川の運河化、其他の義務が公司の賦役勞働によつて遂行を見るに至つた。

一七五〇年乃至一八六〇年に於けるこの地域に居住する華僑鑛夫の数は各種の記録によつて著しく相違してゐる關係上正確には知り得ないが、最も信じ得べき統計を示せば第二表の如くである。而して一八三三年にあつては調査の結果、西部ボルネオに華僑婦人は僅かに一名であつたと云はれてゐる。又一八五五年の公司騒動の勃發中並びにその直後に於てこの地域を去つた成年華僑數は一萬人以上に達するだらうと稱せられて居る。

第2表 1770—1900年間西部ボルネオ在住支那人人口數推定

(Veth, Raffles, Muntinghe, De Groot 及び支那年代記による)

年 度	人口數	備 考
1770	10,000	成年の鑛夫
1810	32,000	同 (ラッフルズの計算)
1825	33,000	成年の支那人 (Francis に依る)
1849	49,000	(De Westerafdeeling van Borneo の著者 Uljee は支那人總數を70,000と記述してゐる)
1856	24,000	(支那人總數)
1880	28,000	(政府の算定)
1900	41,400	(同)

(Cator, op. cit., p. 149.)

鑛産額に就ても雜駁な推定以外の統計は見當らないけれども、ラッフルズ (Raffles) は一八一〇年の年産額を三七〇萬スペイン・ドルと發表し、その費途を次の如く算出してゐる。^{註31}

- 一〇〇萬ドル 阿片及び織物の購入
- 一〇〇萬ドル 鹽、油、煙草、其他食料品の購入
- 七〇萬ドル 支那への送金
- 一〇〇萬ドル 本國歸還者の携帶金

又ファン・ケルフェル (Van Kervel) 氏は土民の資料に基きて年五〇〇萬ギルダーと推定してゐるが、Veth 氏による推定額は一八四八年には一三〇萬ギルダーと發表してゐる。^{註32}

華僑の節約と本國への多額の送金は、以上の如き鑛産額があつたにも拘らず、この地方の繁榮を齎らさなかつた。華僑社會は土民社會との關係に於ては、排他的に、孤立的に、勢ひ封鎖的に發展し、土民社會は華僑の採金業の繁榮にも拘らず、寧ろその經濟的搾取に依て貧困を加ふるに至つた。いかなる種類の鑛山事業にも土民が雇傭されることは稀であつた。また彼等は華僑と交易する何等の品物も事實上所有してゐなかつた。のみならず、生産された金は、全部が船積され、更に洗滌のために廣大なる地面が荒廢に歸した。各鑛山公司は一部自己の需要に充當するため、農業及び商業組織を所有してゐた。更に、鑛業には殆ど携はらない獨特の農業公司があつた。蘭芳會 Lan Fong Fui 及び Thien

[註] 31 Raffles: The History of Java, Vol. I, note p. 237.

32 Veth: Borneo's Westerafdeeling, Vol. I, pp. 326—328.

附 ボルネオ西部州華僑發展史

茲にボルネオ西部州のみを特に取扱ふ所以は、この地方に於て華僑が壓倒的に大なる勢力を有し、頗る奇異なるコースを辿つたこの地方の開発に華僑が指導的な役割を果したことによる。現在、この地域の華僑は蘭印の他の地方に於けるよりも數等大なる農業社會を形成し——一般に蘭印では華僑は農業よりも寧ろ商業及び鑛業に従事して居るが、こゝは全然反對である——、且つ古々椰子、胡椒、ゴム及びガンビル等の小規模ではあるが、獨立の栽培者として、又大都市の近郊に於ける園藝家として——栽培事業の苦力としてではなく——存在してゐる。しかし初期に於ては自發的な農業移民は問題とならず、單に華僑の商業的活動及びこの地域の北東部の採金事業の労働者として意義を有したに過ぎなかつた。商業貿易に於ける華僑の地位は獨占的であり、ダヤク族をして世界經濟に連結せしめた彼等の功績は充分に讃へられてよい。

こゝでは、主として華僑の採金業に關して述べ、商業及び農業に關しては第四章『經濟的勢力』に於て記述する。

A 華僑採金業發生前の状態

先づ、華僑との最初の接觸の事實を併せて一七六〇年以前の西部ボルネオに於て感ぜられた外國勢力について簡述しよう。

華僑の意識的植民の實際上の出發點は、一七六〇年頃(Veth氏によれば一七七〇年)で、この際にサムバス(Sambas)の

土侯に雇傭されてゐた華僑探金夫が彼に反抗し、金山の事業を奪取してしまつた。抑々この地域には既に第十三世紀頃に Hindoe-Javanese の植民地が西部ボルネオの各地に樹立され今の Sanggau 及び Melawi の奥地深く廣がつてゐた。^{註25}

殊に上部 Bunut 河の附近にある Aeboe Alik にはダヤク族が棲んで居たが、その多くは Sutadipa なるジャワ人の姓を名乗つてゐた。而して當時に於ける彼等のジャワ人との關係については明かでない。過去のジャワ人の移住者達は、Sanggau や Landak 及び上部 Matan の附傍に存在した探金業が第十五世紀になつて衰退に瀕するまでにはすでに同鏞山に於て土民と結婚してゐた。^{註26}

西部ボルネオからはジャワへ古くから金、ダイヤモンドの輸出が行はれてゐたが、之等はマレー人、ブギス人、アラビヤ人達に依つて取扱はれてゐた。この貿易は彼等の獨占事業であつたが、一八一八年—一八五六年には同じ事業を目的に華僑公司の設立を見た。これ等の諸公司は一方に河川運輸に力を入れてゐた。

この地方と華僑との最も古い交渉として知られてゐることは支那人の記事の中に、紀元九七七年ボルネオから支那への使節は樟腦、象牙及び樟の木を携へて來訪せることを述べてゐる。^{註27}且つ北西ボルネオと支那との交通は十五世紀頃より勃興して來た。

ダヤク族は土壤が瘦薄なために普通海岸地帯に居住せず、自給自足の經濟生活を營み、土地の耕作、林産物の蒐集を

[註]25 Krom : Hindoe-Javansche geschiedenis, p. 75.

26 Krom, Ibid., p. 417

27 宋史、卷四八九。

行ひつゝ次第に内陸に向つて生活を求めて行つた。彼等は回教徒ではなく、その半ばは遊牧の民であり、その大多数はジャワ文明の影響を受け、言語はスマトラ、マラッカ、ジャワ等に於けるマレー語で、廣義のマレー種族である。而して未だに蠻風から脱しては居ない。彼等は耕地を有してゐるが、わづかにバリト地方 (Barito-g.) にのみ水田の存在を見受ける。北東地方の土民は昔から鍊鐵術に通じ、クリス (小刀) の製造を行つてゐるが、更に鋸、籠、舟、魚網、油の製造をもやつてゐる。最近にはジャワ人からバティック工業を習つてこれに従事してゐるものもある。

マレー人は通常土王国を組織し、海岸地帯や大河の下流及び中流にその主權を確立してゐた。内陸に於ける商業は殆ど完全に彼等の手中にあつたが、次第に華僑に移行せんとする徴があつた。海外貿易にあつては、マレー人、華僑及びヨーロッパ人が各々參加してゐたが、更に可なりの力を有するマヅラ人、ブギス人等の商業的活動も見受けられた。食糧品は地方的に生産されたが、充分なものではなかつた。従つてマレー人は大量の食糧品を輸入せざるを得なかつた。しかし人口の増加につれて益々米の自給自足を必須ならしめたものではあるが、土地は決して肥沃ならず、農業のためには充分利用することが出来なかつたのである。この島の内陸にあつては古くからマレー人との結婚が行はれ、ダヤク人とマレー人との混血 (ダヤク・マレー種) も可なりの數に上つてゐる。

この地方の海外移住者の内では、華僑商人が最も優勢な地位を占め、その地位は當分の内脅かされることはなかつた、といふのはこの地方の貿易の可なりの部分が彼等の手中にあつたからである。而して又、内國商業も彼等の指導的地位の下に繁榮し始めてゐた。食糧問題については華僑も亦マレー人同様、輸入に俟つところが多かつたのである。しかるに、ムンパワ (Mempawa) 及びポンテアナ (Pontianak) 土王国が東印度會社との間に、支那戎克との貿易を行はざる

ことを約し、又一方では米の獨占權を得んと試みるに至つて食糧供給の不安定は、米及び野菜類の栽培を行つて自給自足に進むことを餘儀なくするに至つた。

以上の経過は十八世紀の終り及び十九世紀の初期に、華僑の採金業が勃興するに及んでから俄然その相貌を變へるに至つた。平和な浸潤は武力的な侵略に道を譲つた。

B 華僑採金業の發達と衰退 (一七六〇—一八六〇)

1. 起源と發達

この問題について参照すべき圖書^{註28}は多數之れを挙げ得るが、その各々に依つて可なりその中に敘述されてゐる事實に相違あるを見受けられる。

この地方に於ける金の發見は多數の華僑の流入を招來した。彼等は一七五〇年と一八三〇年の間に支那本國及びサラワク (Sarawak) から來た。而して之等の移民群は州内各地に無數の華僑部落を發生・發達せしめたのである。ポンテアナ、ムンパワ及びサムバスの土王国の「華僑地域」と後日呼ばれるに至つた地域に於てのみならず、更に奥地のランダク (Landak)、スカダウ (Sekadau) 及びシンタン (Sintang) にすら、華僑の移住部落がこの時期に發生を見たのであるが、彼等は何れもゴールド・ラッシュの波に乗つたものであり、ランダクに於ては又ダイヤモンドを目的とした。州内は到る處彼等によつて探査試掘がなされたが、金の埋藏が存外に少いか、又は採集し盡された地方では適當なる

[註]28 Veit: Borneo's Westküste, list of literature 參照

地點に彼等の商業の中心地が設定された。例へばシラト (Siat)、サリムバウ (Salimbau)、メリアウ (Meliau)、及びサンガウ (Sanggau) がそれである。

マレー土侯達にあつても此等採金事業からの利益を豫想して餘り干渉を加へなかつた。而して或る場合には彼等は確かに其の希望を達し得たのである。華僑は、採金業の開始當時 (一七五〇年) 此等の土侯の支配下にある領域内へ入ることを許されたのみならず、場合によつては特に招かれたことすら屢々あつた。然し華僑に課せられた條件は自由でない場合も多々あつた。例へば、サンバスの土王は自己の獨占を確保するために、華僑は米作をする能はず、自己の必需品を輸入すべからず、火器を携帯すべからず、と一七五〇年に嚴命されてゐたので、華僑は總て、米鹽、阿片、鐵等の商品を土王の手を経て供給を受ける義務を負つた。^{註29}かくしてこの方面からする搾取と重い課税を伴つたこのやり方は、彼等が抵抗する力がない間のみは、華僑によつて履行されてはゐるものゝ、他方では初めから多量の密貿易を伴うてゐた。

遂にマレー人からの束縛が一七六〇年に至つて強力に解放された (Yeth 氏によれば一七七〇年)。この時を轉機として、爾來土王の存在は閑却された形で、税は多少とも繼續に支拂はれた模様である。

こゝに金坑に關する諸土王國間の戰爭に就いて一言すれば、マンドルとモントラドとをめぐつてサムバス及びメンパワ兩土王國が相争ひ、後にはボンテアナもこの血腥い紛争に捲き込まれた。ボンテアナ及びメンパワの土侯達が、東印度會社と條約を結んでより (前者は一七七九年、後者は一七八七年)、華僑は會社の直接的監視の下に置かるゝに至つた。多くの地方では土侯は、幾多の所有地を華僑に讓渡し、華僑は亦その代償として貢納金を支拂つてゐた。しかし、

華僑が讓渡された土地に居住するダヤク人との間に紛議が起つても土侯は一切の責任を回避し、寧ろダヤク人を煽動して華僑を苦境に陥れ、到る處に流血の慘事を起さしむるに至つた。又、サンバスの土侯及びその他の土侯は華僑がダヤク人の如く柔順に採掘を行はなぬのを知つて彼等を嫌つてゐた。更に又、土侯と華僑との間に結ばれた幾多の契約の内には、一、土地の借入、一、汰鉢の洗滌水、一、道路の維持、一、米の供給、一、移民の制限、等に關して不明瞭で、紛議の起り易い點多く、屢々暴力を以て問題の解決が圖られ、不安は殆ど絶える間がなかつた。これ等の不安は政府が一八五五年に至つて決定的に兵力を派して問題を處理するまで繼續してゐたのであるが、土侯の治政下には何等の改善の見込がなかつた。否サンバスの土王の如きは海賊の一頭目にすぎなかつたのである。

かくして華僑達は自己の安全と事業の安全な遂行を目的として自治的な政治及び經濟の單位としての公司の形で組合の制度を發達せしむるやうになり、これは往々華僑と契約した政府及び土侯に依て確認さるゝに至つたのである。一八二二年には政府布告に依て『鑛業公司が鑛山業の目的のために彼等が實際に占有する一切の土地の使用』が確認されてゐる。^{註30}

この公司は初期に於ては金坑の作業を發展せしむる鑛業家達の單なる組合であつたものが、二、三〇年を出ずして一箇の共同社會に迄發展し、その地位は經濟的、社會的、政治的に高度の獨立性を帯び、或る時には一種の聯邦國とも言ひ得られるまでに發展して行つた。この強力なる聯邦國は一八八四年政府の調査によつて始めて知られるやうになつたの

[註] 29 Veth: Borneo's Westdeeling, Vol. I, p. 299.

30 Veth: Ibid. Vol. II, p. 136.

である。同時に亦この公司は、土侯、蘭印政府及び近隣の華僑同族に對して利害の衝突を來した場合、必要に應じては武力を以て自己の主張を貫徹せんとする勢力を示したのである。同公司は相互の鑛業上の利益を擁護したのみならず、彼等は自らの行政機關を所有して、司法、警察、貨幣、租税、學校、社寺等をも管理した。彼等は責任立憲制國家機關として行動し、その保護の下にある華僑に對して一七六〇年より一八五〇年までの約百年の永きに互つて政府及び土侯

が爲し得る以上の確乎たる治安を維持するに至つたのである。又この公司は輸送の問題に極めて大きな關心を有し、道路の開設、河川の運河化、其他の義務が公司の賦役勞働によつて遂行を見るに至つた。

一七五〇年乃至一八六〇年に於けるこの地域に居住する華僑鑛夫の數は各種の記録によつて著しく相違してゐる關係上正確には知り得ないが、最も信じ得べき統計を示せば第二表の如くである。而して一八三三年にあつては調査の結果、西部ボルネオに華僑婦人は僅かに一名であつたと云はれてゐる。又一八五五年の公司騒動の勃發中並びにその直後に於てこの地域を去つた成年華僑數は一萬人以上に達するだらうと稱せられて居る。

第2表 1770—1900年間西部ボルネオ在住支那人人口數推定

(Veth, Raffles, Muntinghe, De Groot 及び支那年代記による)

年 度	人口數	備 考
1770	10,000	成年の鑛夫
1810	32,000	同 (ラッフルズの計算)
1825	33,000	成年の支那人 (Francis に依る)
1849	49,000	(De Westerafdeeling van Borneo の著者 Uljee は支那人總數を70,000と記述してゐる)
1856	24,000	(支那人總數)
1880	28,000	(政府の算定)
1900	41,400	(同)

(Cator, op. cit., p. 149.)

鑛産額に就ても雜駁な推定以外の統計は見當らないけれども、ラッフルズ (Raffles) は一八一〇年の年産額を三七〇萬スペイン・ドルと發表し、その費途を次の如く算出してゐる。^{註31}

- 一〇〇萬ドル 阿片及び織物の購入
- 一〇〇萬ドル 鹽、油、煙草、其他食料品の購入
- 七〇萬ドル 支那への送金
- 一〇〇萬ドル 本國歸還者の携帶金

又ファン・ケルフェル (Van Kerveel) 氏は土民の資料に基きて年五〇〇萬ギルダールと推定してゐるが、Veth 氏による推定額は一八四八年には一三〇萬ギルダールと發表してゐる。^{註32}

華僑の節約と本國への多額の送金は、以上の如き鑛産額があつたにも拘らず、この地方の繁榮を齎らさなかつた。華僑社會は土民社會との關係に於ては、排他的に、孤立的に、勢ひ封鎖的に發展し、土民社會は華僑の採金業の繁榮にも拘らず、寧ろその經濟的搾取に依て貧困を加ふるに至つた。いかなる種類の鑛山事業にも土民が雇傭されることは稀であつた。また彼等は華僑と交易する何等の品物も事實上所有してゐなかつた。のみならず、生産された金は、全部が船積され、更に洗滌のために廣大なる地面が荒廢に歸した。各鑛山公司は一部自己の需要に充當するため、農業及び商業組織を所有してゐた。更に、鑛業には殆ど携はらない獨特の農業公司があつた。蘭芳會 Lan Fong Fui 及び Thien

[註] 31 Raffles: The History of Java, Vol. I, note p. 237.

32 Veth: Borneo's Westerafdeeling, Vol. I, pp. 326—328.

Thi Fui は全く農業團體であつた。^{註33}

彼等は米及び豚を鑛山に提供し、水田開拓に幾多の先驅的役割を果し、それは今日に至るも存在してゐるが、元來は不毛の地であつたのである。パマンカト (Pamangkai) クホル (Koelor) パシ (Pasi) 及びシンカワン (Singkawang) の周囲の土地は現在南西ホルネオの米倉として知名であるが、これ等は總て華僑公司の發展時代に華僑農夫に依て開墾されたものであつた。

一八四〇年—一八五〇年の間に金坑地帯から “Thai Kong” 公司によつて驅逐されてから “Sam Thiau Ken” なる大きな公司は農業に専心努力した、而して當時まで無住の地帯であつたパマンカトの北方海岸地帯の開発は全くこの公司の活動に負ふものである。總ての鑛業公司にとつて食料品の輸入は死活問題であつた。オランダ政府が公司を完全に自己に隸屬させるために海岸封鎖の方法を採り、外米の輸入を妨げんとするに至つて、公司が地方の農業開發に注意を拂ふに至つたのは蓋し當然であらう。米の輸入高は莫大なもので、一八三七年頃シンカワンの “Thai Kong” 公司のみの需要を充すための年々の輸入高は一二、〇〇〇ピクルであつた。^{註34}

ロ、衰退

採金業の衰退を誘導するに至つた原因に就ては、種々に考へられる。然し、公司が絶滅する久しい以前から鑛山の埋藏量が部分的に枯渇したこと、及び一八二〇年—一八五〇年の各公司間の戦争の直接的原因をなしたものはこの鑛量の枯渇であつたことは、否定し得ない事實である。^{註35}

しかし Groot は、^{註36} 公司が破壊されても、華僑は社會的・經濟的組織の利益を奪はれるに止り、鑛山の規模を小なら

しめて繼續し得た筈であると主張し、探掘する金が枯渴したといふ自然的原因にのみ歸し、公司の破壊といふ社會的側面を否定してゐる。

茲に利用し得る資料から結論し得ることは次の如くである。金坑に於ける金の枯渴―それは以前から産出額の激減に依て次第に顯著になつて來てゐた―に依て多くの鑛夫は他に生活の資を追求することに餘儀なくされた。

かくし“Sam Thiau Ken” 公司の如きは、從來の未開拓地の開墾に着手するに至つた。しかし乍ら公司戦争後の政治的状態は、西部ボルネオの他の地方に於て大規模の組織を有する農業移民の實行を妨ぐるに至つた。更に當時蘭印政府の採つた措置は華僑が新しい産業部門に進出することを寧ろ阻止する傾向があつた。數年間繼續した公司戦争の後には一般に華僑を治安の攪亂者と見るやうになり、政府は華僑の經濟的利益の保護を顧慮しなかつたのみならず、身體財産すらも亦保護を與へることがなかつた。

ハ、採金業のこの地方に及ぼした影響

西部ボルネオに於ける華僑金坑事業の成績を検討すると、ダヤク人、マレー人、それに政府から虐げられた環境下に不屈の努力と有能な組織に依つてこの國土を、殆ど無住の閑却された世界の片隅たりし位置から、産業貿易の一中心地と

[註] 33 Schank : De Kongs's van Montrado, p. 567.

34 De Kongs's van Montrado, p. 567.

35 Schank : op. cit., p. 528.

36 De Groot : Het Kongswezen van Borneo, p. 159.

なし、農業を営み、交通手段を建設して、全州に偉大なる影響を與へた支那人については何としても、假令、それが法と秩序とを無視してゐたからと云つても否定することは出来ない。

採金業がその活動の絶頂に達した時代（一八一二年）ですらサンバスの土王は尙海賊を業としてゐた。この地の經濟風土記を書いた何れの人と雖も華僑の巨大なる經濟的貢獻を否定して居ないことは特に強調されねばならない。Dijk van Hogendorp はこれ等華僑を「測り知ることの出来ない程重要な、殆んど緊要缺くべからざる」者と記述してゐる。^{註37}

しかし又他面からして、華僑が土民を經濟の領域から全く驅逐したことをその罪科の一つに數へなければならぬ。けれども彼等は同時に無住の地域をも開拓したのである。但しランダクのみは例外である。彼等は既存のダイヤモンド及採金業を暴力を以て土民から奪取した。同時にサンバスでもダヤク人は同様の運命に逢着した。

商業方面に就て云へば、マレー土侯が商權を失つたのは、彼等の貿易獨占及び關稅賦課權を華僑に渡したのではなく、蘭印政府に讓渡したことに原因してゐる。私人貿易は華僑自らが築き上げたもので、他の種族から讓られたり、或は奪ひ取つたりしたものではなかつたことは明かである。

工業方面に就ては、土民工業も元來存在してはゐなかつたから華僑が之を奪つたと言ふは當らない。寧ろ華僑の居住する中心地の發生に依て、若干の土民工業部門に獎勵的效果を與へたものにすぎない。例へば造船業の如き好個の實例である。

最後の論争點は、「經濟的に强者たる華僑が、土民社會に發展の機會を與へなかつた」といふことであるが、しかし一九一四年以後の本州の發達狀況を見ると、この反對も根據のないものとなつて來る。殊に北西ボルネオを同様の條件

の、然し華僑の居らない南西ボルネオと比較してみれば明らかである。一九一四年以後北西ボルネオの土民社會は、土地法の庇護を受けてゐるはあるが、自分の經濟問題を自ら處理してゐるにも拘らず、南西ボルネオに於ては過去一世紀と同様の状態に止つてゐるではないか。

結論を試みれば、一七六〇年——一八六〇年の間に主としてゴールド・ラッシュの結果、北西ボルネオに華僑社會が發生し、この社會は國內及び國外商業、工業、家畜業、沿岸漁業、鑛業及び農業の凡ゆる生産流通部門を有し、雇傭者も、勞働者もその關係者は等しく華僑系のものであつた。而し華僑社會の他に、土民社會も亦存在したが、これは全く自然經濟の埒内を一世に掛つても一步だに脱し得なかつたのである。この兩者が各々獨立した存在であつたことは一八五五年後になつて明瞭にされた。即ちこの年の華僑の追放はマレー的要素の發達を全然齎さなかつたのである。而して一八九〇年に平常に復した後、華僑は従前よりもつと重要な地位を占めるに至つたのである。しかし乍ら、他の人種の利益に常に直接に働き掛けたといふ譯ではないが、この地方の開發に對しては公司によつて營まれたる有用な事業に就ては特記する價値があらう。

水田面積は著しく増大した。道路の建設、交通線の開設は華僑の功績と云へよう。華僑は州内各地で公司の爲めに勞働に服したが、之は後になつて、即ち一八五七年の州令により賦役勞働に姿を變へて存続した。一九一七年まで行はれた華僑の賦役勞働をなす義務は、殆ど土民に對すると同様に賦課されてゐたものであつた。Van Rees が算出してゐる如く、西部ボルネオの行政費は全部が華僑から徴收した收入に依て賄はれたものであるが、同收入の構成は、阿片、賭

【註】37 Van Hogendorp: Bericht, p. 54.

博、屠殺所、質屋等の營業税及び人頭税から成つてゐた。

二、政治的影響

de Groot は彼の著書に於て曰く、「何故に海賊に等しいマレー土侯の領地が蘭印政府に依て自治領として認められ、華僑の会社にまでその容認が及ばなかつたか」と。彼は、租税を徴收することにのみその活動を限定して其の他の點では國土のために大して努めてもゐない政府よりも、土侯領よりも、これ等の華僑こそボルネオの發達のために大きな貢獻をしてゐる事實を指摘してゐる。しかし de Groot はかくいふことに於て政治問題を看過してゐるのである。自治的な華僑集團地域は支那皇帝に使節を派し、たゞにオランダの統治權を無視したのみならず、公然たる叛亂を起して之を否定したといふ政治狀勢が、こゝに歸さしめたのである。Groot は亦「他日抗し難い華僑移民の洪水が滔々とボルネオに向つて押し寄せて來るであらう」と叙べてゐるが、確かにこの傾向は見られた。それ故オランダ政府は一八五四年に、獨立的な公司の勢力を武力を以て打ち破つたのはかゝる趨勢を避けるためであつた。

更にこの地方は、各種族間、各人民グループ間、諸公司相互間に擾亂と流血の慘事が絶える間もなく繰返された。公司在蘭印政府に抵抗するためにイギリス及び支那へ援助を求め、事態が悪化したので、遂に政府は何等かの處置を講ぜねばならぬ事になり、秩序の全く回復するには三六年間（一八二〇年—一八五六年）を要した。秩序の回復後西部ボルネオの經濟的開發には殆ど顧慮が拂はれなかつた。當時蘭印政府の關心はジャワの強制耕作制度に集中してゐたからである。

公司の顛覆に就て元總督 Rochussen は次の如く書してゐる、「國家の名譽は護られた。サンパス土侯及びダヤク族の

權利は尊重され、而して華僑の公司は永遠に破壊された。」^{註38}
華僑の公司制度の崩壊後この國土は全くの荒廢に歸し、住民の根絶は獨り採金地帯に止らず、他の到る處に於て見受けられた。殊にペマンカトでは一八八〇年に於ても一八五五年來、開墾を放棄された華僑の舊水田が見受けられたといふてゐる。

農業、貿易、工業等は一切衰退した。何故ならば之等は總て第二義的なものでしかなかつたからである。採金業こそ唯一の産業であつた。而して華僑社會が彼等の精力を他の職業に轉換するためには長い期間の經過を必要としたのであつた。

C 公司戰爭終焉後

一八五六年後しばらくの間金鑛の探掘は繼續されてゐたが、その規模はずつと小さいものとなつてゐた。しかし、モントラド (Montrado)、ブド (Budok)、ララ (Lara) 等の舊中心地は放棄されて終つた。これには勞働組織の消滅、貯水池、公司事務所の破壊、資本の缺乏、公司指導者の退去等の要因が、この殷賑産業を衰亡に歸せしめたのである。

マンドル (Mandor) に於てのみは (Lang Fong Kongs) は一八八四年まで稼行した。砂金の淘汰事業がしばしの間繼續されてゐたが、しかし産額の漸減は遂にこの鑛山をも廢止へ導いた。一八六〇年乃至一八九〇年に於ては多數の華僑が尙ランダクの採金 (及びダイヤモンド) 事業にその生計の途を求めてゐた。しかし、海岸地帯の農業 (古々椰子)、

[註] 38 Rochussen : Toelichting en verdediging, p. 57.

北方に於ける農業（胡椒、ガンビル）が新しい生計の途を提供するに至るや、全州内の華僑鑛業は全く崩壊した。而してこの影響を受けて輸出向農業、貿易及び工業でさへ好轉に向ふことになつた。

第3表 公司戦争終焉後の西ボルネオに於ける華僑人口増加表

	1895	1900	1905	1920	1930
土 民	330,800	359,500	400,300	535,000	714,000
支 那 人	37,700	41,500	48,000	67,000	108,000
ヨーロッパ人	300	300	370	800	1,000
其 の 他	1,900	1,700	1,330	2,200	4,000
計	370,700	403,000	450,000	605,000	827,000

第三表によれば一九〇五年と一九三〇年との間に土民人口が八〇%増加したのに對し、華僑は同期間に一二〇%の急激な増加振りを示した。二種族間の性別比率を比較すれば（第四表参照）、一九三〇年に於ける華僑のそれは 1000:741 であつたに對し、土民のそれは 1000:979 であつた。而して亦一九〇〇年と一九三三年の間に移民の結果年平均二、二一〇人宛増えてゐた。然し毎年の歸國者も多數あつた如くであるが、彼等に關しては正確なる統計はない。即ち同年間に於ける移民の總數は七一、七四一人であつた。最大入國を見たのは一九一三年の六、四一四人であつたが、一九三〇年以後急激に入國が減退した。之は恐らく入國手續料（一五〇ギルダ）の引上げに因由するところが多いと見られるであらう。入國を許可された數を挙げれば一九三一年三八五人、一九三二年一一八人、一九三三年一一七人、一九三四年二八一人である。

第4表 ボルネオ西部州華僑性別比率比較表

年 度	比 率	
	男	女
1880	1,000	583
1895	1,000	676
1900	1,000	671
1905	1,000	638
1920	1,000	722
1930	1,000	744

(Volkstelling, 1930, Vol. VII, p. 43.)

の出稼移民の急増に因るものであらう。西部ボルネオの總人口中華僑の占むる率は一九二〇年に一一・一%であつたが、一九三〇年に至つては一三・二%に上昇した。一九二〇年乃至一九三〇年には華僑は年々四・七七%宛増加して行つたのである。

一九三〇年の國勢調査の結果は第五表の如くである。あらゆる點に於てスマトラと比較することは頗る有意義である。地方的特殊事情によつて完全なる數字を求めることは不可能である。未詳の部分を推算すれば、支那人四一、二九八人、その内青年一九、一五二人、成年二二、一四六人、男：女=100:768 である。

支那本國の革命成就後、その統一工作に伴ふ排外政策はこの地方にも少なからず影響を及ぼし、商人中の或る者（殊に新客）は明瞭にアンチ・オランダの態度を示した。而して彼等は政治的煽動をなすに當つては、この地

第5表 ボルネオ西部州華僑に關する参考統計

種 別	西ボルネオ		スマトラ
	1930年國勢調査數字	計*	
福 客 潮 廣 其 の 他	2,570		119,537
建 家 州 府 他	38,313		82,223
	21,699		59,593
	2,961		70,399
	1,257		116,767
計	66,800	107,898	448,519
領 外 生 れ 同 %	16,669		257,752
性別比(男女)	25%		57%
1920~1930増加率		1,000:741	1,000:442
總人口中 } 1920		61.0%	47.0%
支那人比 } 1930		11.1%	4.8%
		13.2%	5.4%

*推算せし地域を含む (Volkstelling, Vol. VII, p. 11)

方に存在する經濟問題を捉へて來て宣傳の具に供した。遂に一九一四年になつて華僑のかゝる不穩なる行動（青年支那人達が徒黨を組み、ダヤク族と聯携して、この地を支那の領土たらしめんとする運動―第三章第一節参照）は遂に軍隊を出動して鎮壓せしめらるゝに至つた。

西部ボルネオ地方の華僑は、他の地方のものに比し、物質的發達に更に強力な武器を持つて居り、彼等の活動は、貿易、商業、産業の總ての領域に伸展されてゐる。西部ボルネオの經濟的發達の成果は、外資の流入に依つたものではなく、華僑の勞働の結晶である。勿論、土民を搾取することに依て富の蓄積が圖られた部分も少くはないであらうが、それ以上に華僑はこゝに彼等自體の社會を構成し、そこに經濟的諸活動を新しく開始した部分が少くないのである。

華僑の經濟勢力の伸展とそれに伴ふ政治問題に關して、オランダ政府はある場合には華僑の力を削減する政策を探つたが、この華僑の功績を全然没却することは不可能であつた。従つてオランダ政府は土民社會の崩壊が土地立法によつて保護され、政治秩序の維持が軍隊及び警察力に依て圖られる限り、經濟領域に於けるその活動の存続を認容せざるを得なかつた。而して、かゝるものとして、華僑の存在は「測り知ることの出来ない程重要なもの」、「緊要缺くべからざるもの」と考へられた。かくてボルネオの華僑は殆ど土著化し、基本社會の一員を構成するに至り、蘭印に於ける特殊の華僑地域となるに至つたのである。

第二章 華僑人口に關する統計的考察

第一節 概 説

蘭領印度統治法には「支那人」の名稱は使用されず、華僑は「東洋外國人」(Vreemde Oosterlingen)の一般的名稱の下に、アラビア人、前印度人(Voor Indies)、マレー半島のマレー人及び其の子孫と共に總括されて居る。併しながら蘭領印度に於ける華僑の社會的、經濟的、政治的地位は華僑を別個に取扱ふ事に充分意義を與へて居り、蘭印政府が十年毎に施行する國勢調査に於ては「支那人」と「其他の東洋外國人」とは別個に取扱はれてゐる。

一九三〇年に施行せられた國勢調査は最も新しいものである。本調査に於ける「支那人」とは支那出身の者及びその子孫全部を謂ふ。ヨーロッパ人と同待遇に置かれる支那人(第三章第一節參照)も本調査に於てはヨーロッパ人に屬せしめず、依然支那人として集計されて居る。又非支那婦人であつて支那人と婚姻せるものは支那人として計上されており、逆に支那婦人であつて他の人民區分(Bevolkingsgroep)に屬する者(ヨーロッパ人、土人、又は支那以外の東洋外國人)と婚姻せる者は支那人から除外されて居る。

本章に於ては、一九三〇年度の國勢調査より得られた數字を基礎として蘭印華僑人口の統計的考察を試みる。

蘭領印度に於ける人口を構成する土民、ヨーロッパ人、支那人、其他の東洋外國人の四グループの人種的構成の強弱

土民の農村集中の現象と歐洲人の大都市集中現象との中間現象を示して居ると云ひ得るであらう。

蘭印人口増加の趨勢と、華僑人口との關係についてみると(第八表)、總人口は一九二〇年以來増加し、一九三〇年には土民を合せて、六〇、七二七、二三三人となつて居る。(第六表参照)非土民グループに就いてみると、何れも土民グループより急激に増加して居る。その増加に就いて、一八六〇年以來の平均増加の割合

第二章 華僑人口に關する統計的考察

第8表 蘭印人種別人口増加統計

年度	人種	歐洲人	支那人	アラビア人	東洋外國人 其の他
1860		43,876	221,438	8,909	×
1900		91,142	537,316	27,399	×
1920		186,114	809,039	44,902	21,327
1930		240,417	1,233,214	71,335	44,200

第9表 蘭印人種別人口増加割合

年度	人種	歐洲人	支那人	アラビア人
1860—1880		1.6%	2.2%	3.0%
1880—1900		2.1%	2.3%	2.7%
1900—1920		3.1%	2.1%	2.5%
1920—1930		3.6%	4.3%	4.7%

(Volkstelling 1930, VIII, p. 8.)

第10表 蘭印在住東洋外國人人口中に占める支那人人口の割合 (1930)

地域	人種	ジャワ及マヅラ	外	領	
支那人		582,431	91.0%	607,583	90.0%
アラビア人		41,730	6.5%	29,605	4.4%
前印度人		5,536	0.8%	24,482	3.6%
其他		4,355	0.6%	7,706	1.1%
不明		642	1.1%	575	0.9%
計		634,694	100%	669,951	100%

(Indisch Verslag 1938. 所載 1930 Volkstelling に依る)

五一

第6表 蘭印人種別人口構成

地域	人種	土民	歐洲人	支那人	其他東洋外國人
蘭領印度及ジャワマ外		59,138,067	240,417	1,233,214	115,535
		40,891,093	192,571	582,431	52,269
		18,246,974	47,846	650,783	63,266
蘭領印度及ジャワマ外		97.4%	0.4%	2.0%	0.2%
		98. %	0.5%	1.4%	0.1%
		96. %	0.3%	3.4%	0.3%

(Volkstelling 1930, Deel VIII.)

この關係を都市と農村に就いてみると、一般に非土民グループは都市に集中して居るところがジャワ及びマヅラに就いて云ふことが出来る。然し外領に於いてはそれ程に顯著ではない。而して華僑人口は第七表に見る如く、

第7表 蘭印人種別大都市、中小都市、農村分布狀況 (1930)

	大都市	中小都市	農村
ジャワ及マヅラ			
土民	3.1	4.3	92.6
歐洲人	54.0	25.8	20.2
支那人	31.2	27.5	41.3
其他東洋外國人	33.4	42.9	23.7
外領			
土民	0.5	3.6	95.9
歐洲人	4.0	54.2	41.8
支那人	2.4	28.6	69.0
其他東洋外國人	6.1	35.3	58.6

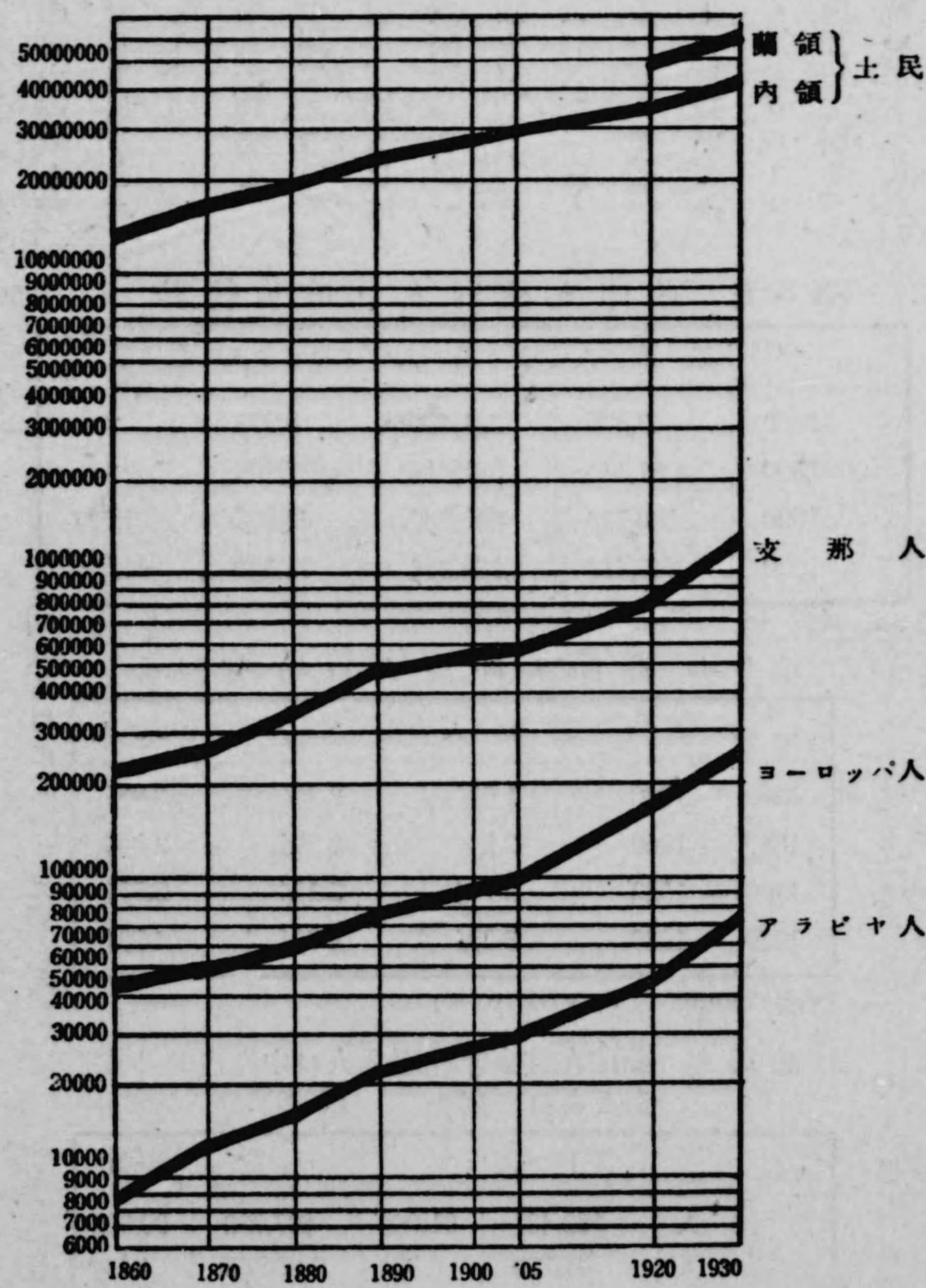
(同上)

は第六表の如くである。最大グループは勿論、蘭領印度總人口の九七パーセント強を占むる土民であるが、之に次ぐものは全人口の二パーセントを占むる支那人である。これを地域別に見るとジャワ及びマヅラに於いては一・四%、外領に於いては三・四%を占めてゐる。就中スマトラ東海岸、リオウ理事州、バンカ、ピリトン及び西部ボルネオの諸地方に於いてはその人口の三分の一を占め、バンカに於いては殆んど四五%を占めて居る。

蘭領印度に於ける華僑

五〇

人種別人口増加表



蘭領印度に於ける華僑

(Volkstelling 1930, Deel VIII p. 7.)

第11表 蘭印有職者人口中に占める華僑の地位

種別	全有職者人口	華僑有職者人口	%
1 原料生産	14,363,846	144,888	1.0%
2 工業	2,208,851	93,988	4.0%
3 運輸業	316,191	12,754	4.0%
4 商業	1,293,316	171,979	13.0%
5 自由職業	169,520	7,161	4.0%
6 公務	516,176	3,039	0.5%
7 其他	2,003,150	36,126	1.0%
計	20,871,050	469,935	2.0%

度の官廳統計に於ては出生地を規準とする三箇の類別を行ひ、それに依つて華僑社會に内在する各種の特徴を引出す手掛りを與へようと試みてゐる。即ち定著度の強弱に従つて、

(イ) 永住的華僑社會の基本層 (ロ) 移民の子女(蘭印出生) (ハ) 新來移民
とし、(イ)の全部、(ロ)と(ハ)の一部で以て華僑の全永住社會を形成するものとなしてゐる。俗に「プラナカン」又は「峇々」と稱するは前二者を包括し、「新客」は最後のものを指すものゝ如くである。こゝではこの俗稱の使用は避ける。

第二節 出生地別

序説に述べた如く華僑の蘭印在住の型は總て各地方毎に異同があり、時と場所とに拘らない普遍的な分類標準を示し得るものではないが、蘭領印各項目別にみれば、その主力をなす商業部門に於て一三%、工業、運輸業、自由職業に於て各四%を占め、原料生産、公務、其の他の職業に従事する華僑は極めて少ない。

第一一表に見る如く、全有職者人口中、華僑有職者人口は二%を占める。東洋外國人人口に於いて支那人人口の占むる地位は第一〇表にみる如く、殆ど九一%の絶對多數を占めて居り、其他の東洋外國人の數は極めて少數である。

右に掲げた基本的な三つの類別の統計的考察に移る前に、豫めこれらの大體の特色の素描をなして置かう。

(イ) 永住的華僑社會の基本層——蘭領生れの父を持つ蘭領生れの者

この分類に入つて来る華僑の殆ど全部は永住者である。彼等はその土地に全然同化し、多くの者は土地の方言に依つてしか自己の意志を表現し得ない。且つ、東印度に於けるその生活手段を棄て、支那へ歸することは殆どない。支那では彼等は外國人と見られるのである。東印度に於て彼等は、土人に對してのみならず、移住して来たばかりの同國人に對しても、はつきり別種のグループを形作つてゐる。東印度の社會生活に於て古くから占める地位——土民大衆と世界交通との最終最大の連鎖體——に因つてその存在は蘭領印度にとつて固有のものとなつて居り、殆ど外來人とは云ひ得られないのである。而して土民との境目も明瞭でなく、ある地方では皮相な觀察を以てしては支那人たることを認め難い程同化の度が進んでゐるものもあるが、併し斯の如き支那人は全體としては少數であり、永住華僑の一般的外貌を著しく變化させるものではない。

(ロ) 移民の子女——蘭印外で生れた父を持つ蘭印生れの者

この分類に屬する者の内、スマトラ在住者については蘭印永住者となる確率は大でない、特に妻が支那生れである家族に於てさうである。婦人は一般に歸國慾が強いと見える。併し東印度生れの子女の一部、殊に青年層は一時的にか、永久的にか再び東印度に歸還して来る。かういふ性質の歸還者が幾人あるかに就いては數字を以て表示し得ることは出來ない。同様に蘭印外生れの者の子女が他日その両親と共に支那へ歸國する數も正確には算出し得ない。併しともかく蘭印で生れた華僑の大多數は、特に蘭印で成長した者にあつては、永住者と云へるであらう。

(ハ) 新來移民——蘭印外生れの者

(イ) 及び(ロ)の永住者と、支那——一部はシンガポール——で生れた移動者(早晚郷國へ歸る意志を有する者)とは著しく相異なる。この類の移動者は過半数が、手工業者及びスマトラの農鑛業苦力並に同郷人の職業の被傭人から成つてゐる。他の地方でも手工業者又は行商人になつてゐる。彼等の多くは貯金を携へて支那へ歸る。デリーでは色々の理由から却つてそれが奨励されてゐるのである。

しかしかゝる「新客」中のかなりの部分が永久に在住するに至つてゐる。彼等は東印度に良い生活方法を見出し、歸國の意志を放棄すると、配偶者を得、又は妻子を支那から呼寄せ、蘭印外生れの永住者中、晩年には餘生を故國に養ふべく歸國する者もある、併しその子は蘭印に永住する。

正式調査を受けた華僑一、一九〇、〇一四人中、七五六、一七二人、即ち全體の六三・五%が蘭印に於て出生したものである。スマトラ及び附近島嶼ではこの比率は最小で、ジャワ及びマヅラは最大である。而してこれら以外の地域では蘭印出生者の比率は、ジャワ及びマヅラに較べて劣るが、なほ六五%を超えてゐる。絶對數に於ては外領の華僑數はジャワ及びマヅラよりも大であるが、蘭印出生者の絶對數並に比率では、ジャワ及びマヅラが著しく大である(第一二表)。男女別に蘭印出生者の比率を求むれば、男は女に較べて非常に低い(第一三表)。これは女の移民が漸く最近に至

第12表 蘭印華僑の出生者數比率

地 域	華僑總數	蘭印出生者數	%
ジャワ及びマヅラ	582,431	462,226	79.4
スマトラ	448,519	189,089	42.2
ボルネオ西部州	66,700	49,969	74.9
其の他の地方	92,364	54,888	59.4
蘭 印 計	1,190,014	756,172	63.5

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 22)

第14表 蘭印華僑の出生者年齢別構成(%)

地域別 年齢別	ジャワ及 マヅラ	スマトラ	ボルネオ 西部州	其の他
0—9歳	96.0	91.2	96.5	93.1
10歳—19歳	86.5	72.1	89.3	70.6
20歳—49歳	66.4	21.0	58.9	36.0
50歳以上	81.0	19.3	62.9	48.8
計	79.4	42.2	74.9	59.4

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 29)

第15表 蘭印華僑の出生者中蘭印生れの父を持つ者の数及び比率

地域別	蘭印出生者總數	蘭印生れの父を持つ 蘭印出生者數	%
ジャワ及マヅラ	462,226	369,627	80.0
スマトラ	189,089	78,301	41.4
ボルネオ西部州	49,969	36,226	72.5
其の他	54,888	29,460	53.7
蘭印計	756,172	513,614	67.9

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 23)

第16表 蘭印華僑の出生者中、蘭印外生れの父を持つ者の各年齢階梯別比率

地域別 年齢別	ジャワ及 マヅラ	スマトラ	ボルネオ 西部州	其の他
0歳—9歳	27.1	67.4	31.0	59.2
10歳—19歳	16.7	60.5	24.3	44.0
20歳—49歳	15.8	46.4	23.6	31.1
50歳以上	13.2	41.5	36.0	33.0

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 23)

凡そ三分ノ二が、蘭領印度外で生れて、新に移住し來つたものであることが明瞭となる。更に之を地域別に見ると、ジャワ及びマヅラでは青壯年中に於ける蘭印外生れの者の意義はかなり低い、スマトラでは壓倒的である(第一四表)。

第13表 蘭印華僑の出生者男女別比率

地域	華僑總數	蘭印出生者數	%
男			
ジャワ及マヅラ	319,931	227,714	71.2
スマトラ	310,467	93,902	30.3
ボルネオ西部州	38,571	25,011	64.8
其の他の地方	55,530	26,257	47.3
蘭印計	724,499	372,884	51.5
女			
ジャワ及マヅラ	262,500	234,512	89.3
スマトラ	138,052	95,187	69.0
ボルネオ西部州	28,129	24,958	88.7
其の他の地方	36,834	28,631	77.7
蘭印計	465,515	383,288	82.3

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 22)

二〇歳——四九歳に至ると、ジャワ及びマヅラでは三分ノ一、スマトラでは五分ノ四が蘭印外生れとなる。東印度群島の他の地方ではこの数は約半ばである。かゝる年齢別構成からして、蘭領印度の經濟界に参加する男子の二〇歳——四九歳の最も重要な年齢階梯にある者の

つて多くなつた事實を示すものである。華僑の婦人中二〇%以下が移民し來つた者であるに過ぎない。これに反して男子中、蘭印外生れのもの割合は可なり多く、華僑男子中の殆ど半分を占めてゐる。ジャワ及びマヅラでは蘭印外出生者中、男と女の比率は外領に於けるが如く大なる隔りはない。例へばスマトラを見ると、蘭印外出生者は男は七〇%であるに對して、女は僅に三〇%である(第一三表)。

蘭領印度に於ける華僑社會にとつて蘭印外出生者の持つ意義は、彼等の年齢別構成の數字中に鋭く現はれてゐる。重要な社會的役割を演ずることの無い十歳未満の兒童にあつては、他地で生れて蘭印にやつて來た者は殆ど無く、且つこの年齢階梯の下にあつては地方的に大なる軒輕はない。たゞスマトラのみは約九%が蘭印外出生者である。

一〇歳——一九歳では既に蘭印外出生者は相當の數を示し、

華僑の移住が他の領域に較べて古い時代から大量に行はれたジャワ及びマヅラでは、基本的永住者層、換言すれば蘭印生れの父を持つ蘭印出生者の比率は、外領に比し著しく大きい。スマトラのこの比率は最小で、苦力の輸入の行はれることが少い他の地方はジャワとスマトラの中位にある(第一五表)。

蘭印出生者中の若年者層にあつて蘭印外出生の父を持つ者の数は、壯老年者層に比して相對的に大である。この理由は、最近に至つて蘭領印度に永住的に定住し、家族を形成しつゝある華僑移民が増加しつゝあるによるであらう。そのために移民の子(第二世)の出生数が相對的に、蘭印出生者の子の出生数よりも大となつてゐるのである(第一六表)。

第三節 地域的分布

第一七表によれば、蘭印の華僑總數一、二二三、二一四人の内、半分以上より少く多い、即ち六五〇、七八三人が外領に居住し、更にその内の三分ノ二、蘭印全華僑總數の三分ノ一以上、即ち四四八、五五二人がスマトラに居る。ボルネオには一三四、二八七人、その他の外領の部分には六七、九四四人を算へる。

スマトラの十分ノ一の面積しかない西部ジャワは、ジャワ及びマヅラ居住の全華僑の殆ど半分を有し(二五九、七一八人)、これに對して東部ジャワは一五八、四八九人、中部ジャワは一三〇、三六〇人である。

東印度群島及び各地方人口に對する比率ではボルネオ及びスマトラが夫々六・二%及び五・四%を示して最高であり、その他の地方ではずつと低下し、西部ジャワ二・三%、その他は畧々一%である(第一七表)。

ジャワ及びマヅラの華僑人口の大部分は大小の都市に分布し、都市外では主に人口の稠密な地方の幹線道路の沿傍に

第17表 蘭印華僑の地域別人口分布状況

地域	總數	全人口百に對する華僑の比率	1920年を100とする増加率
西部ジャワ	259,718	2.3	155
中部ジャワ	130,360	1.2	136
土侯領	33,864	0.8	161
東部ジャワ	158,489	1.1	160
ジャワ及マヅラ計	582,431	1.4	152
スマトラ	448,552	5.4	148
ボルネオ	134,287	6.2	162
セレベス	41,402	1	178
其他	26,542	0.6	176
外領計	650,783	3.4	153
蘭領印度計	1,233,214	2.0	152

(Volkstelling 1930, Deel, VII p. 10)

ア市に多數の支那人が住む他、田舎に於てもバタビア土民理事州がジャワ及びマヅラの他の土民理事州に比して多數の華僑を有してゐるのは以上の理由による。(第一八表)

プリアンガンでは東部に較べて西部が多い。東部プリアンガンでは主にガル(一、六八三人)、タシクマラヤ(二、二

第18表 西部ジャワ土民理事州に於ける華僑數

州名	人口數
セレンディブ	4,152
メーステル・コルネリス	112,113
クワラ・ラヤン	24,716
バイテンゾルフ	12,396
スカブミ	23,808
チャンドール	9,380
バシンド	4,389
タシクマラヤ	23,048
インドラマニ	4,617
クニガ	6,544
其他の土民理事州	4,801
其他の土民理事州	12,769

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 10)

居る。但し西部ジャワではバタビアをめぐる私領地内の田舎にも多數在住する。バンタム州境からチェリボン分州のインドラマユ境附近までの沿岸の廣大な地域並にバタビア南方のバイテンゾルフ附近まで、都市外に約八五、〇〇〇人の華僑が居住し、その内約四〇、〇〇〇人が首都の西方に居る。バタビ

五五)の如き中心地に居る。一六、六五七人の華僑を見るバンドン市の西方で多数居住するのはスカブミ(四、五八七人)、チャンデュール(一、九〇二人)、ティマヒ(一、二二二人)の如き都市であるが、これらの都市外に於てもバイテンゾルフとバンドン間の幹線道路に沿うて多数の華僑が在住してゐる。

支那人町といはれるチェリボン市(華僑數八、一九一人、總人口の一五%)の附近では、インドラマユの如き町のみならず、都市外にも多い。チェリボン州全體では三二、〇九〇人である。

チェリボンからバタンに至る沿岸地帯、スマラン市、ジャバラ附近の海岸、スマラン—クデッス—パティ—ヨ

第19表 中部ジャワ土民理事州に於ける華僑數

州名	人口數
チラチヤツブ	4,325
ブルウオケルト	4,020
ブレベス	4,348
テガルス	7,919
ベカロンガン	8,127
マゲラン	8,321
テマングーン	4,352
スマラ	31,652
フロボーガン	4,671
プロラ	5,468
クデウス	4,881
パテイ	5,576
レンバ	6,851
其の他の土民理事州	29,849

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 10)

第20表 土侯領在住の華僑數

州名	人口數
ジョクジャカルタ	9,957
スラカルタ	10,744
クラーテン	3,580
コタ・マンクネガラン	2,593
其の他の土民理事州	6,990

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 10)

アナ道路の沿線からラセム町に至る沿岸地帯、フロボーガン及びプロラ町の附近は、中部ジャワに於ける華僑の多い地方である。中部ジャワの南方地帯ではすつと少くなり、しかも主に都市に集中してゐる(第一九表)。

土侯領の華僑數三三、八六四人中、二〇、一九九人は兩首都、即ちジョクジャカルタ及びスラカルタに居る。他は主に

ジョクジャカルタ市附近、バンドゥル土民理事州、クラーテン、ボヨラリ及びスラーヘン市、スラカルタ市附近、クラーテンとスラカルタの中間地帯に居住してゐる(第二〇表)。

中部ジャワでさうであつたやうに、東部ジャワの西方に於ては中心都市外の華僑は幹線道路に沿うて多数居住する、即ちブランタス河に沿うてケディリからンガンジョク—デムバン—モジョケルトを経てスラバヤ及びシンドアルジ

第21表 東部ジャワ土民理事州に於ける華僑數

州名	人口數
トウバン	5,857
ボジョネゴロ	4,287
マデイウン	4,202
トロナゴン	4,865
ブリタル	5,943
ンガンジョク	4,488
ケディリ	9,079
ジョムバン	5,869
モジョケルト	4,518
スラバヤ	39,276
シドアルジョ	4,012
パスルアン	4,108
マラン	14,281
プロボリンゴ	4,099
デエンベル	9,452
バンユワンギ	6,327
其の他の土民理事州	27,826

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 11)

に至る地帯、又、その數は稍減るが、ケディリからトロナゴン—ブリタル—マラン—バンギル及びパスルアンに至る道路、並にプロラからボジョネゴロを経てグリセーに至る線及びボジョネゴロからトゥバンに至る線の北方である。

(第二一表)

ジャワの東隅地方では明瞭に二地區に分つて考へられる。その一つは、プロボリンゴ、クラカサアン、ポンドウオソ及びパナルカンの各土民理事州で、多数の支那人が沿岸地に集中(一〇、七三〇人中六、七〇三人)してゐるところの北方地區であり、その二は、大部分が都市外に住む南方の諸土民理事州であつて、ルマダン、デンベル及びバンユワンギの華僑數一九、三八九人中僅かに四、六三八人が都市に住むに過ぎない。かくてこの南方地區、殊にデエンベル土民理事州では田舎に多数の華僑の占據せるを見るのである。

以上を要括して次の如く言ひ得るであらう。ジャワ及びマヅラの華僑の過半数は都市に住む。しかし又かなり多くの者が主として幹線道路の沿線の田舎にも居る。その外に彼等は、バタビア近傍、チェリボン及びチェンベル土民理事州

の眞の田舎にも多数住んでゐる。

第22表 ジャワに於ける華僑の都市・田舎別人口比率(%)

地域	大都市	其の他の都市	田舎
西部ジャワ	36.8	15.5	47.7
中部ジャワ	21.0	44.5	34.5
ジョクジャカルタ	70.5	2.7	26.8
スラカルタ	53.2	13.9	32.9
東部ジャワ	24.5	36.9	38.5
ジャワ及マヅラ計	31.2	27.5	41.3

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 11)

第23表 ジャワ島内都市別華僑数

都市	人口数
バタビア	71,688
スラバヤ	38,871
スマラン	27,423
バンドン	16,657
スラカルタ	11,286
ジョクジャカルタ	8,913
メーステル・コルネリス	7,127

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 10)

大都市(十萬以上の人口を有する都市、以下同じ)の華僑總數は一八一、九六五人、その他の都市一六〇、一四〇、都市外二四〇、三二六人である。中部及び東部ジャワには地方の小都市に在住する數が極めて多いのが特徴的である(第二二表)。

十萬以上の人口を有するジャワの大都市中、華僑の最も多いのは、バタビアであつて、總人口四十五萬中七萬以上が支那人である。他の二大港市たるスラバヤ及びスマランの華僑數も上表の如く特に多い。

(第二三表)

小都市の中では、チェリボン、マラン、バイテンゾルフ及びベカロンガンが何れも五千以上を有してゐる。

外領に於ては、スマトラ島の沿岸地帯及びボルネオ西部州では、メダン、パレンバン及びボンティアナツクの如き大都市の他、バガン・シ・アビ・アビ、タンジョンパンダン(ピリトン島)及びパンカルピナン(パンカ島)のやうな町に比較的華僑が多いが、ジャワ及びマヅラに於けるが如き典型的な都市集中には達してゐない。外領の他の地方では「都市」と名付けられるものはないが、集中の傾向はジャワに似てゐる(第二四表)。

若干の大都市——メダン、

第24表 外領に於ける都市別華僑數

都市	華僑數
メダン	27,287
パレンバン	15,492
マカッサル	15,363
ボンティアナツク	15,275
バガン・シ・アビ・アビ	11,998
タンジョンパンダン	10,771
バダナン	7,263
パンカルピナン	7,233
メナド	5,519
ヂャンピ	5,159
バンジェルマシン	5,014

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 11)

第25表 外領に於ける華僑の都市・田舎別人口比率(%)

地域	大都市	其の他の都市	田舎
スマトラ	11.2	18.2	70.6
ボルネオ西部州	14.1	7.1	78.8
剰餘の外領	27.5	22.1	50.4
外領計	14.0	17.0	69.0

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 11)

は八五、〇六九人であつて、これらの地方の華僑總數の夫々七一%及び七九%を構成する。ボルネオ南東部州を含む剰餘の外領に於てはこの比率は五〇%に過ぎないが、ジャワ及びマヅラに較べては大である(第二五表)。

田舎に四四九、一六五人を算へる。最後の田舎に住む華僑數中、スマトラには三一六、六二七人、ボルネオ西部州に

第二六表に見るが如く、華僑はサバンからパレンバンに至るスマトラ島の東海岸、リオウ群島及びバンカ、ピリトン島に多數ある。最大居住地域はスマトラ東海岸州の栽培地帯であつて、ベンカリス分州を除き、一五八、六三〇人、その大部分が大農園の苦力である。

アチエーの東海岸及び北海岸に沿ふ各副分州には總數一八、八二〇人居るが、栽培地帯の南方のバガン・シ・アビ・アビ及びベンカリス各副分州内の沿岸及び河川の下流には三二、八〇三人を算へ、その大部分は漁村(バガン・シ・アビ・アビは最大で一、九九八人)及びパンロン地域に住む。

第26表 スマトラに於ける華僑數

分 州	人 口 數
東 部	7,777
ラ ン	30,292
デ リ 及 セ ル	88,740
シメルンガン及カラド	15,623
ア サ ハ	23,975
ベ ン カ リ	34,192
バ ン	8,563
タ ン ジ ヨ ン	34,248
ジ ヤ ン	8,843
パ レ ン	18,946
テ ロ ク	8,838
バ ン	96,098
ビ リ	28,614
剩 餘	43,803

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 12)

リオウ群島の華僑數は三四、二四八八人、バンカ、ピリトンの兩錫島のそれは二二、四七一一人である。パレンバン市は一五、四九二人を算へ優勢であるが、それよりも小さいメダン市は二七、二八七人を有し、遙に前者を凌いでゐる。スマトラの西海岸に沿うては東海岸程多くない。即ちアチエーの西海岸、タバヌリ、スマトラ西海岸及びベシレンの各州では總計僅に二九、八九七人、その内の三分の一はパダン市及びシボルガ市に住んでゐる。ベシレン州のレボン及びレジャンの各分州内の

華僑(二、七〇八人)は上パレンバンの華僑と合せて農墾業地域の住民と見た方が纏りが良く、その合計は八、二〇五人である。

ランボン州の西方の各副分州には比較的華僑の稠密せるを知るが、メンガラ及びスカダナ兩副分州を除く同州の華僑數は七、八五七人で、その約半數がテロクベトン町に住んでゐる。

蘭領ボルネオの華僑總數は一三四、二八七人であつて、その内一〇七、九九八人がボルネオ西部州に生活して居る。同州の北海岸に沿ふ三つの副分州、即ちシンカワン、ムンパワ及びポンティアナックに八三、〇七五人が群居してゐる。

もつと奥地でその東方にある各副分州、即ちサンバス、ベンカヤン、ランダック及びサンガウには一六、六八〇人、即ち殘餘の華僑の三分ノ二を占めてゐる。ポンティアナック市の華僑數は一五、二七五人である。

ボルネオ西部州の外に、南東部州には多くの華僑の農民部落がある。こゝでは大部分の華僑が沿岸地方及び油港市を中心に居住してゐるがその數は同州在住の華僑總數二六、二八九人中一五、八二五人を占めてゐる。同州の奥地に住む華僑は稀薄で

第27表 ボルネオに於ける華僑數

分 州	人 口 數
シ ン カ ワ ン	67,351
シ ン カ ワ ン 副 分 州	38,072
ム ン パ ワ 副 分 州	18,940
ベ ン カ ヤ ン 副 分 州	6,076
サ ン バ ス	4,263
ポ ン テ イ ア ナ ッ ク	34,196
シ ン ダ ン	4,258
バ ン ジ エ ル マ シ ン	5,751
サ マ リ ン ダ	11,519
プ ー ル ー ン ガ ン	3,691
剩 餘 の 分 州	7,521

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 12)

ある。東海岸に接續するバンジェルマシ、プライハリ、プルーラウトの各副分州には僅かに三、四三二人が住むに過ぎず、人口の比較的稠密せるウールースンゲイ副分州ですら華僑は七三七人である。

大東地方（蘭印のセレベス以東の總稱名）には西部地方の如く集團的勢力を示してゐる地方は無い代りに華僑の入り込んでゐない地方もまた無い。

セレベス州とその附屬島嶼の華僑數二一、三八〇人中、商業都市マカッサルには一五、三六三人が居住し、其他は同州の

第28表 セレベスに於ける華僑數

分 州	人 口 數
マカッサル	16,687
ボンガラ	2,783
メナド	2,172
サンギ及びタラウド島	10,715
其の他の分州	2,814
	6,231

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 12)

第29表 剩餘の島嶼に於ける華僑數

分 州	人 口 數
シンガラジャ	2,552
南バカリ	5,077
ロンボック	3,320
テモル	3,654
テルナテ	3,898
アンボイナ	4,828
剩餘の分州	3,213

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 12)

分州内に略々同數を以て分布してゐる。本島の北方、特にミナハサ地方（九、八五六人、内五、五一九人はメナド市）及び海岸地帯には南方よりも多い。メナド全州では二〇、〇二二人である。

バリ島の華僑七、六二九人中、殆ど三分ノ一はシンガラジャ及びデン・

パッサルの町に住む。ロンボック島の華僑數三、三二〇人、内二、二九五人は西ロンボック副分州に住む。

小スンダ列島では蘭領ティモール三、四五七人（内九三〇人がクバン）、スンバワ一、三二〇人、フロレス一、三三三人で、華僑の數は可なり多い。ティモールの北部及び北東部には少く、「南西諸島」及び「南東諸島」を合した華僑の總數は八六七人に過ぎない。モルッケン群島の中央地域のスーラブルーアンボン——セラン及びこれ等附近の小島には二、九九五人の居住を見るが、内一、二二六人はアンボイナ町に住んでゐる。ハルマヘイラ及び附近島嶼には二、五二

四人が住み、内九五四人はテルナテ町に見る。又ニュー・ギネアの南西地方とアルー諸島の居住華僑の總數は一、六三四人に達してゐるが、北部ニュー・ギネア及びその附近島嶼には僅かに七〇六人の華僑を見るに過ぎない。

前述せる如く、華僑は土人に對抗して至るところの都市に稠密してゐる關係上、都市又は大都市を持つ行政區劃の華僑の比率は、農村又は田舎に較ぶれば遙かに高い、しかしこれには例外がないでもない。

ジャワ及びマヅラではバタビア附近の農村がその最大の例外をなしてゐる。特にバタビア西方の私領地には多數の居住を見るために、他の地方行政區劃の平均比率を遙かに超越してゐる。即ち一般には一%以下であるのに比して、マウク及びタンゲランでは住民一〇〇に對して華僑は一〇、ブカシ及びティカランでは四であり、バイテンゾルフ土民理事州の北方の諸郡では一・五乃至四である。又クラワン、チェリボン及びクニンガンでも比率は可なり高く一乃至二・五を示してゐる。

ジャワ及びマヅラの他の地方では、かやうな高い數字はテハルの附近、スマラン東方のムンティラン郡（一・七%）、パラカン郡（二・四五%）、バンユワンギ及びヂェンベルに見られるのみである。併し二%を越ゆる地方は少い。中部ジャワのスマラン東方の處々の小さい町には比較的多く、殊にラセムでは全住民の四分ノ一以上を華僑が占めてゐる。スマトラでは東海岸に沿ふ地方はジャワ及びマヅラに較べてすつと多い。高い比率を示してゐるのはバンカ（平均三四・五%、本島の北部では七〇%）、ピリトン（三九・一%）、タンヂンピナン分州（平均二五・四%）、タンヂンピナン副分州及びカリムンでは夫々三五・三%及び三三・七%）、ベンカリス分州（平均一七・六%）、ベンカリス市五九・一%）、バガン・シ・アピ・アピ（七八・三%）、デリー及びセルダン（一六・九%）及びランカット（二二・二%）である。

スマトラの右以外の地方で割に多い地方を挙げてみると、東アチェー(五・七%)、フロート・アチェー(四・四%)、特にサバン及びクタラジャ(町)、インドラギリ(三・〇%)、ランボン(二・四%)等である。併しそれ以外の地方ではジャワの平均以下であり、例へばタバヌリは平均〇・六%、スマトラ西海岸は〇・八%に過ぎない。

ボルネオ西部州では住民一〇〇に付き一三乃至一四人を算へるが、特にシンカワン分州及びボンティアナ副分州ではこの比率は二六・九%及び二〇・五%で著しい高率を示してゐる。ボルネオ南東部州になると僅かに一・九%となり、東海岸に沿うては目立つてゐる(サマリンド五・四%、ブールンガン四・九%)。

外領の他の地域に於ては、メナド州が注意を惹くのみである。

ジャワ及びマヅラでは華僑の比重は、大都市——その他の都市——田舎の順序で示される。殊に農村在住の華僑は、大都市に比して決定的に少い。西部ジャワでは田舎の人口比率が稍々高いのは、バタビア附近の私領地に住む華僑が多いからでこれについては前に述べた通りである。土侯領の二地即ちジョクジャカルタ及びスラカルタの比率が目立つて小さいことは注意に値ししよう(第三〇表)。

外領では總じて總人口に對する華僑の比率はジャワ及びマヅラに較べて多い。而して外領の東方領域は、大都市(メダン、パレンバン、パダン、ボンティアナック、バンジェルマシ、マカッサル、メナド)に於て高比率、小都市

第30表 ジャワの總人口に對する華僑の都市・田舎別比率(%)

地域	大都市	その他の都市	田舎
西部ジャワ	13.6	8.7	1.2
中部ジャワ	12.6	8.2	0.4
ジョクジャカルタ	6.5	1.9	0.2
スラカルタ	6.8	9.7	0.3
東部ジャワ	11.4	7.7	0.4
ジャワ及マヅラ計	11.7	8.1	0.6

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 13)

に於て稍々低率、田舎に於ては大低率といふ點でジャワ及びマヅラの分布状態に似通つてゐる(第三一表)。通常の人口状態に於ては男性と女性との數が略々均等であるが、蘭印に於ける華僑はその移民的性質を如實に寫して著しい男性過剰・女性不足を示してゐる。特に蘭印外で生れて移住し來つたところの所謂新客の多い地方では、通常男

第31表 外領の總人口に對する華僑の都市・田舎別比率(%)

地域	大都市	その他の都市	田舎
スマトラ	21.1	27.9	4.1
ボルネオ西部州	33.8	37.8	11.5
剰餘の外領	14.5	9.9	0.5
外領	19.8	21.1	2.5

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 13)

第32表 蘭印華僑の體性別比率(男1,000:女?)

地域	大都市	その他の都市	田舎
西部ジャワ	747.3	841.8	876.4
中部ジャワ	849.4	923.6	931.2
ジョクジャカルタ	834.3	937.5	741.1
スラカルタ	908.7	842.7	847.0
東部ジャワ	608.0	809.2	780.7
ジャワ及マヅラ	742.7	858.4	858.0
スマトラ	628.3	526.8	400.2
ボルネオ西部州	630.6	760.8	764.5
剰餘の外領	732.6	592.9	659.6
外領	657.0	553.3	482.7

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 14)

では男女の數的關係は正常に近く、蘭印外生れの多い外領では異常である(第三二表)。

一、〇〇〇に對して女は二〇〇乃至三〇〇で、甚しい女饑饉を呈してゐる。之に對して蘭領印度生れの者、所謂プラナカンに於てはこの關係は一定して居らず、ある地方には女性數が超過してゐるところもある。併し總體的には蘭印生れの多いジャワ及びマヅラ

第四節 出身地別

蘭領印度に於ては福建人が最も多い。華僑人口の約半数は福建人である。ジャワ及びマヅラでは絶対多数(六五%)を占めて居り、外領でも亦他の出身地の者よりは優勢である。

次に優勢なのは客家であつて、特に外領では華僑人口中の重要部分(二二%)を占めてゐる。第三三表の客家の数字は、精密な調査が不能であつたために除外されたボルネオ西部州奥地の華僑を考慮に入れると數萬人の増加を見る筈である。何故なら同地方華僑四萬三千人の大部分は客家と見られるからである。

廣東人と潮州人(福老)は客家に次ぐ。前者はジャワ及びマヅラに於ても、外領に於ても多数存在するが、後者は外領に於て重要であるに過ぎない。

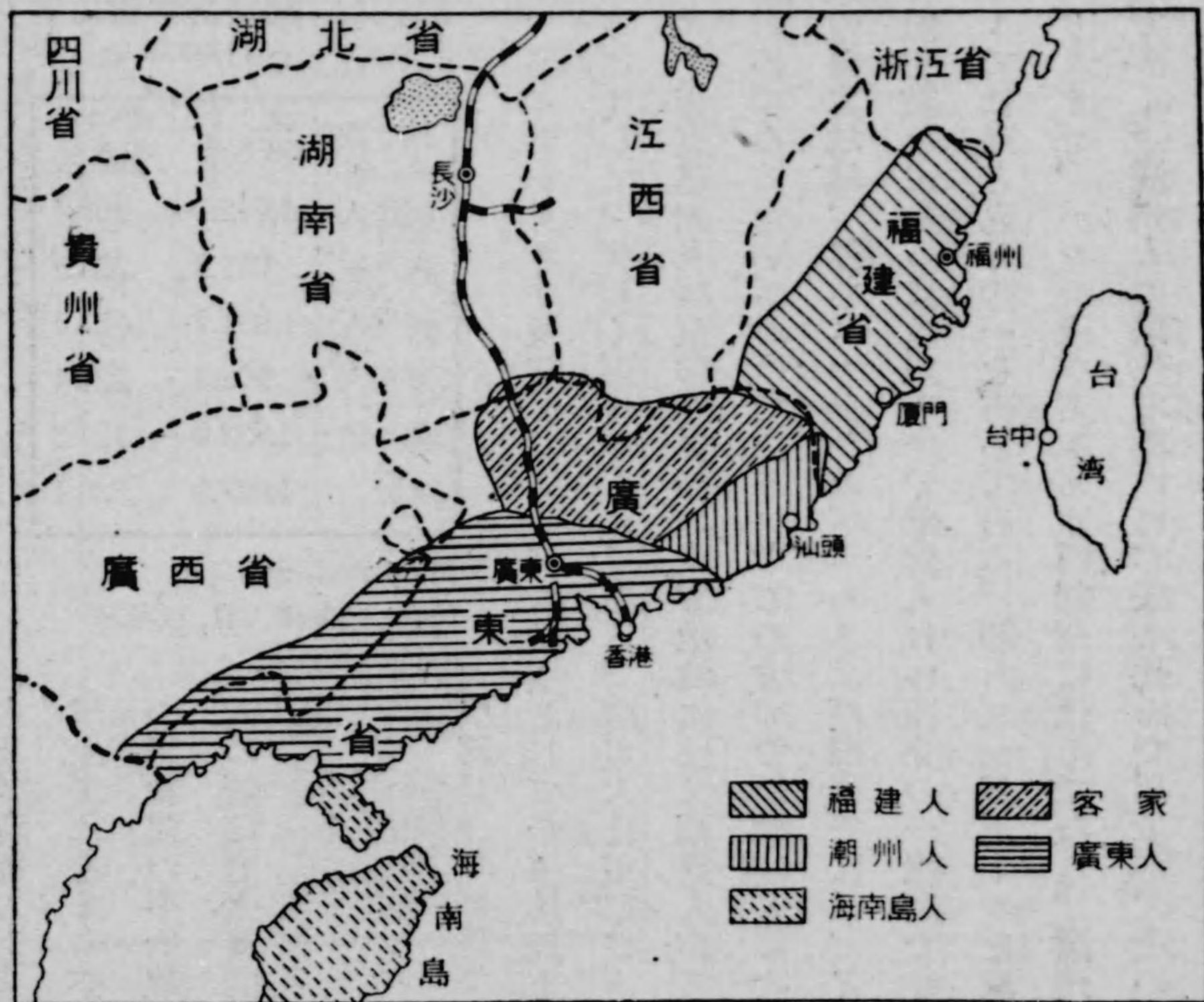
一般には女に比して男が多いのであるが、各種族に依つて體性別比率は同一でない。福建及び客家では相對的に女子數が多いが、潮州人、廣東人その他で蘭印出生者——その大部分は永住者である——が大多数を示してゐるに對して、後の二者では蘭印外出生者が主體となつてゐる。蘭印生れの者には人口學上の一般現象として知られる男女出生數の平均現象が見られるからである。併し新入移民、換言せば蘭印外生れの者では當然男子が壓倒的に多く、従て多數の蘭印外生れの移民を持つ種族、潮州人は女の數は非常に少い(第三四表)。この現象は四種族の出生別編成と關聯を有するものである。即ち最初の二種族では

第33表 蘭印華僑の出身地別統計

種族	男	女
福建人	309,253	245,728
客家	124,905	75,831
潮州人	63,423	24,389
廣東人の他	97,740	38,390
共計*	724,499	465,515

* 土民及び出身地不明者を含む
(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 88)

華僑出身地別概圖



(Volkstelling 1930, Deel VII. p. 87)

第34表 蘭印に於ける出身地別華僑中蘭印出生者比率と男女比率

種族	蘭印出生者比率	男子1,000人に對する女子數
福建人	77.1	794.6
客家	60.6	607.1
潮州人	37.4	384.5
廣東人の他	33.5	392.8
共計	58.4	520.2
	63.5	642.5

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 89)

及び廣東人では著しい男子の過剰を發生するところになるのである。

蘭印外出生者の男子過剰に就ては各種族相互間に可なり大きな相違が見られる。即ち蘭印外出生の女の數は福建人及び客家にあつては潮州

第35表 蘭印華僑の出身地別男女數比率 (男1,000:女?)

種族	蘭印出生者	蘭印外出生者
福建人	1,012.9	309.4
客家	961.9	254.9
潮州人	931.2	183.7
廣東人	902.8	226.4
其他	1,023.0	123.2
計	1,027.9	229.1

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 89)

タビア、バイテンヅルフ及びプレアンガンの主として新來移民より成る多數の客家の存在に依て、ジャワ及びマヅラの他の地方に比して、著しく引下げられてゐる。廣東人は東部ジャワに多い。

ボルネオ南東部州及び東印度群島の東方地域には又福建人が多い、併しジャワ及びマヅラの如き華僑人口中の壓倒的部分を占めてゐるといふわけではない。この方面では福建人に次いで廣東人が多い。

外領の西方地域、即ちスマトラ及びボルネオ西部州では又、どの他の種族よりも福建人が多いが、ジャワ及びマヅラの如く過半数を占むるには至らず、華僑人口の四分の一程度である。東印度群島の他の地方では稀にしか見ない潮州人は、こゝでは殆ど五分の一を占めてゐる。即ちシンガポールを取巻く廣大な地域、即ちスマトラ東海岸、リオ、ジャバ、ピリトン、バンカ及びボルネオ西部州に住んでゐる。潮州人よりも多いのは客家である。客家の分布範圍は可なり廣大である。潮州人の居住地域には客家も住んで居るが、その他に少からざる數がアチエー及びランボン地方に住ん

でゐる。スマトラの他の地方、即ち西海岸及び南部(タパヌリ州、スマトラ西海岸州、ベンクレーン州及びパレンバン州)には福建人及び廣東人が優勢である。

以上見た如く、蘭印華僑の發展態様は各種族毎に著しい地域的偏向を一つの内容としてゐる。併しこの問題の解明は、種族相互間の職業關係を明らかにした後に、改めて取上げる方が便利である。

1. 福建人

華僑人口の正式調査數一、一九〇、〇一四人中、五五四、九八一人は福建人であつた。この内の約四分の一は西部ジャワに、五分の二がジャワ及びマヅラのその他の地域に住んでゐる。外領ではスマトラが一番多い。併しスマトラの福建人は同地の華僑總數の二七%を占めるに過ぎない。ボルネオに於ても僅に一六%であるが、他の地方ではより優勢を示してゐる。

各種族に共通して蘭印出生者の比率は、男子が女子より低い(第三六表)。

各種族に於ける蘭印生れと蘭印外生れとの數的關係に一瞥を投じよう。

蘭印出生者の比率は各種族によつて大きな相違が見られる。

第36表 蘭印華僑の各種族別蘭印出生者比率(%)

種族	其他の領外		
	スマトラ	ジャワ及びマヅラ	其他の領外
男			
福建人	43.9	79.2	59.0
客家	35.2	53.7	76.9
潮州人	20.5	37.8	43.1
廣東人	22.1	27.8	26.6
其他	25.0	84.5	54.9
計	30.3	71.2	54.5
女			
福建人	66.8	93.9	82.2
客家	75.8	72.9	91.3
潮州人	56.7	74.0	78.0
廣東人	58.1	52.3	59.1
其他	75.5	94.8	85.1
計	69.0	89.3	82.5

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 90)

福建人にあつては新來移民が最も少い。ジャワ及びマヅラではこの點で他の種族と全く様相を異にしてゐる、即ち福建人の男子では殆ど八〇%が、女子では九〇%以上が蘭印生れであるが、他の種族にあつては男子が三〇%—五〇%、女子が五〇%—七〇%が、それである。

ジャワ及びマヅラの福建人は他の種族の者に比較して都市人口は田舎の人口より少い(第三七表)。バタビア市及びス

ラバヤ市の兩大都市の福建人の比率は可なり低いのである。

福建人の比率は中部ジャワに於て最高、西部ジャワに於て最低である。西部ジャワでは客家の数が多くことと、バタビア及びチェリボン兩州の附近に自己がどの種族に屬すべきかを知らざる多數の華僑の存在することに依て、福建人の比率は引下げられてゐるのである。

外領では華僑總數中に占める福建人の比率は地方に依て甚だしく異つてゐるが、外領の東部地域では一般に多く、六〇%前後を示してゐる。

第37表 ジャワ及マヅラに於ける福建人

地 域	數	華僑總數に對する比率
西部ジャワ		%
バタビア市	29,992	41.8
其の他の都市	28,435	65.0
田舎	89,594	62.1
中部ジャワ		
スマラン市	19,599	71.5
其の他の都市	11,964	79.0
田舎	71,835	81.8
土侯領		
ジョクジャ及ソロー市	12,824	63.4
田舎	9,276	67.8
東部ジャワ		
スラバヤ市	19,747	50.8
其の他の都市	18,734	70.8
マラン及ブスキ州の田舎	24,015	64.0
其の他の東部ジャワの田舎	43,596	78.3

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 91)

スマトラで比較的多い地方は、パレンバン、スマトラ西海岸、タバヌリ及び特にベンカリスであつて、この最後の地方

第38表 外領に於ける福建人

地 域	數	華僑總數に對する比率
アチエ州	3,706	17.0%
タバヌリ及スマトラ西海岸州	14,413	69.9
スマトラ東海岸州(ベンカリスを除く)	38,589	24.3
ベンカリス	28,054	82.0
リオー諸島	7,384	21.6
ジャンビ及インドラギリ	4,642	33.9
ベンクーレン及ランボン地方	5,048	34.7
ボルネオ西部州	2,570	3.9
ボルネオ南東部州	12,114	49.2
セレベス	24,956	60.3
其の他の諸島	16,193	61.5

(Volkstelling 1930, Deel VII p. 92)

では漁村集中化が見られる。ボルネオ西部州には殆ど認められず(僅に四%)、ボルネオ南東部州に於ても他の種族に壓倒されてゐる(第三八表)。

外領ではジャワ及びマヅラと對照的に、若干の例外を除いて、都市に多い。この最も良い例はバンジェルマンであつて、華僑の八四%は福建人である。然るに同州の他の地方では彼等の比率は四〇%を示して居り、これは主として北方の諸分州サマリダ及びブロンガンには廣東系の華僑が多數居住してゐる關係からである。

2. 客 家 (第三九表)

總數約二十萬人(ボルネオ西部州奥地の客家を除く)で、大部分外領に居住し(六三%)、特にスマトラ及びボルネオに住む。ジャワ及びマヅラの客家(七五、〇〇〇)は主に西部ジャワにあつてはバタビア市、その他の都市並に西部方面に居住する。ジャワ及びマヅラ以外の地方では、マラン及びベスキの兩州の他は、華僑人口中の極く一部を占めてゐるに過ぎない。

スマトラで客家の多い地方はアチエー、南スマトラ、バンカ及び特にピリトンであるが、これ以外の地域にもその數

第39表 蘭領印度に於ける客家

地域	數	華僑總數に對する比率 %
西部 ジャワ		
バタビア市	28,683	40.0
其の他の都市	8,312	19.0
田舎	28,329	19.6
中部 ジャワ	3,372	2.6
土 侯 領	577	1.7
東部 ジャワ		
スラバヤ市	1,391	3.6
其の他の都市	805	3.0
マラン及ベスキ州の田舎地方	2,667	7.1
其他の東部ジャワの田舎地方	1,052	1.9
外 領		
アチエー	3,887	40.8
タバヌリ及スマトラ	1,016	4.9
西海岸	13,774	8.7
スマトラ東海岸 (ベンカリスを除く)		
ベネカリス	1,325	3.9
リオー諸島	3,677	10.7
ジャンビ及インドラギリ	1,371	10.0
パレンバン	1,934	7.4
ベンクレーン及ランボン地方	5,040	34.6
ベンカ及ピリトン	45,199	36.3
ボルネオ西部州	38,213	57.3
ボルネオ南東部州	912	3.7
セレベス	1,866	4.5
其の他の諸島	2,334	8.9

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 92)

は割に多い。併しながらこの種族の最重要の居住地域は何と云つてもボルネオ西部州に指を屈せねばならない。度々述べたやうにこの地域の奥地に四萬三千人の華僑が居ることが判明して居り、彼等は大部分客家と稱せられてゐるが、正式調査が實施されてゐないのでこゝではこの數を除くとしても、尙三萬八千人の勢力を示し、この地方の華僑總數の半數以上を占めてゐる。

蘭印の東部方面ではティモール分州(一、二九八八、華僑總數の三七%)を除き客家の數は尠い(第三九表)。

3. 潮 州 人 (第四〇表)

彼等が目立つて多い地方は、スマトラ東海岸州の栽培區域、リオー諸島、ボルネオ西部州である。ジャンビ及びインドラギリにも可なり住んで居るが、その他の地方では一體に稀で、ジャワ及びマヅラでは一%にも達せず、その他の地域では三%前後である。ボルネオ西部州の先に述べた「簡易調査區域」には相當の潮州人がゐるものと見られてゐる。

4. 廣 東 人 (第四一表)

彼等は群島の全地域に亘つて相當數の分布をなしてゐる。ジャワ及びマヅラでは主に大都市に居住してゐる。ただマラン及びベスキの兩州では比較的多數を都市外に見る。

西部及び南部スマトラでは華僑總數の約五分の一を占めるが、東部スマトラでは僅にスマトラ東海岸州(特にメダン市)とバンカが重要であるに過ぎない。ボルネオ西部州には殆ど住んでゐないが、外領の東部方面に於ては二二、八九

第40表 蘭印に於ける潮州人

地 域	數	華僑總數に對する比率
西部 ジャワ	1,441	0.6
中部 ジャワ	945	0.7
土 侯 領	478	1.4
東部 ジャワ	2,399	1.5
アチエー	983	4.5
スマトラ東海岸 (ベンカリスを除く)	34,650	21.8
ベネカリス	1,713	5.0
リオー諸島	13,678	39.9
ジャンビ及インドラギリ	5,335	39.0
其の他のスマトラ	3,234	1.7
ボルネオ西部州	21,699	32.5
ボルネオ南東部州	783	3.2
其の他の外領	474	0.7

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 92)

第41表 蘭印に於ける廣東人

地域	数	華僑總數に對する比率
西部ジャワ		
バタビヤ市	8,039	11.2
其の他の都市	3,700	8.5
田舎地方	4,030	2.8
中部ジャワ		
スマラン市	1,982	7.2
其の他の都市	806	5.3
田舎地方	3,374	3.8
土侯領		
ジョクジャ及ソロー市	1,684	8.3
田舎地方	631	4.6
東部ジャワ		
スラバヤ市	5,622	14.5
其の他の都市	2,645	10.0
マラン及ベスキ州の田舎地方	4,668	12.4
其の他の東部ジャワの田舎地方	3,243	4.9
外領		
アチエー	6,045	27.7
タバヌリ及スマトラ	4,060	19.7
西海岸州		
スマトラ東海岸州	33,536	21.1
(ベンカリスを除く)		
ベンカリス	1,553	4.5
リオー及ジャンピ	801	1.7
南スマトラ	8,731	21.5
バンカ分州	14,423	15.0
ピリトン	1,232	4.3
ボルネオ西部州	2,961	4.4
ボルネオ東部州	8,063	32.7
セレベス	10,702	25.9
其の他の諸島	4,127	15.7

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 93)

5. 華僑の妻となれる土民婦人

二人を算し、華僑總人口の約四分の一を占める。特にボルネオ南東部州に於ける廣東人の比率は可なり高いものである。婚姻に依て支那人となつた土民婦人數は總體で一〇、七九一人であるが、實際には遙かにこれ以上と想像される。土民婦人の中ではジャワ人婦人が最も多い。

【備考】スマトラ東海岸州に移住せる華僑は大體次の三州内の各縣から來たものである。

A. G. de Bruin: De Chineezen ter Oostkust van Sumatra, 1918, pp. 125—126.

潮州	惠州
海陽縣 Hai yang	海豐縣 Hai foeng
豐順縣 Foeng shoen	永安縣 Yoeng ngan
潮陽縣 Ch'ao yang	長甯縣 Chang ning
揭陽縣 Kieh yang	揭陽縣 Poh lo
饒平縣 Jao p'ing	普甯縣 Poe ning
饒來縣 Hwei lai	澄海縣 Cheng hai
大埔縣 Ta poe	普甯縣 Poe ning
潮陽縣 Ch'ao yang	普甯縣 Poe ning
豐順縣 Foeng shoen	普甯縣 Poe ning
海陽縣 Hai yang	普甯縣 Poe ning
歸善縣 Kwei shan	普甯縣 Poe ning
普甯縣 Poe ning	普甯縣 Poe ning

大埔縣の住民を除く「福佬」は全部が客家語を使用し、豐順縣の住民の一部は同様な客家語を用ひてゐる。「福佬」とは「學佬」とも云ひ、福建より來る移民の意である。

上記各地方に於ては「福佬」に酷似する所謂「半山福佬」(pan san Hoklo's)「半福

陸 豐 縣	Loeh foeng
龍 川 縣	Loeng chw'an
連 平 縣	Lien ping
河 源 縣	Ho yuen
和 平 縣	Hwo ping
嘉 應 州	Kia ying
長 樂 縣	Chang loh
興 甯 縣	Hsing ning
平 遠 縣	P'ing yien
鎮 平	Chen ping

「佬」を見るが、彼等住民間では客家語を使用し、福佬語も亦知られてゐる。

客家語を使用してゐる。

以上の諸州縣は手工業的織物業についで最も有名なる地方である。更にデリ州に於ては尙苦力として華僑は高州 (Kao chow)、雷州 (Lai chow) 及び廣州 (Kwang chow) から來てゐる。一般的には文書は支那官話が用ひられてゐる。潮州から蘭印に移住して來た者は潮州客人と稱せられ、海陽、潮陽及び揭陽の三縣から移住し來る華僑は夫々海陽人、潮陽人、揭陽人と呼ばれてゐる。普甯縣出身の華僑は普甯人と言ふ。

「福佬」は一般に潮州江(韓江)の下流地帯に居住してゐるものを云ひ、客家は同江の中部及び上部流域地帯に住んでゐるものと呼ぶ名稱である。

第五節 職業別

正式調査を受けた華僑總數一、一九〇、〇一四人中、四六九、九三五人が有職者である。従つて華僑一〇〇人に付き三

九人乃至四〇人が職業を有してゐる譯である。

華僑總人口の三分の一強が蘭印外出生者であるのに、之を有職者人口に對比すると三分の二以上が蘭印外出生者(新客)である。

更にこの兩グループの華僑總數に對する有職者人口の比を求めると、蘭印外出生者中の比率(七三・三%)は蘭印出生者中の比率(二〇・五%)を遙かに超えてゐる。蓋し後者には多數の兒童人口を含むからである。又外領とジャワとの有職者人口比例は、四七%及び三一%である。全有職者人口の平均六・二%が女子である(第四二表)。

スマトラを除くと、大部分の支那人は商業に従事して居り、又可なりの數が工業を營んでゐるが、その他の總ての職業、例へば公務、自由業、交通の各種部門及びボルネオ西部州と西部ジャワの農業を除く原始生産業は相對的に少數の華僑に生活の手段を與へて居るに過ぎない(第四三表)。

第42表 蘭印華僑有職者數

性別並に地域別	蘭印出生者	蘭印外出生者	計
男	131,889	307,468	440,716
女	22,856	6,164	29,219
計	154,745	313,632	469,935
ジャワ及マヅラ	106,069	76,050	182,884
スマトラ	30,608	199,962	231,159
其の他の外領	18,068	37,620	55,892

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 129)

スマトラでは多數の華僑が、スマトラ東海岸の大農企業、土民型農業及び鑛山に働いてゐる結果、華僑の社會關係が

爾餘の地方とは可なりに趣を異にしてゐる。スマトラの有職者人口の殆ど五〇%が原始産業部門に組入れられてゐる。

が、この比率はジャワ及びマヅラでは九%、その他の地方では二三%である。かやうな原始産業部門への強烈な集中は、スマトラでは主に商業部門従業者の少いたためであつて、爾餘の職業部門は比率的には決してジャワ及マ

ヅラに比して甚だしく劣つてはゐないのである。スマトラでは五分の一足らず、其他の地方では之に反して約半ばが専門に商業を営んでゐる。

以上の数字は華僑人口の職業分類に就いての大雑把な描寫であつて、なほ一層具體的には出生地別、男女別、種族別の分析を必要とする。

第四四表に見るが如く、蘭印生れの有職者は大部分が商業に吸収

第43表 蘭印華僑の職業別比率 (有職者100人に付)

職業	ジャワ及マヅラ	スマトラ	其の他の外領	計
I 原始生産業	9.1	49.8	23.3	30.8
II 工業	20.8	18.9	22.0	20.0
III 交通業	2.8	2.7	2.3	2.7
IV 商業	57.7	18.2	43.7	36.6
V 自由業	2.1	1.0	1.9	1.5
VI 公務	0.6	0.8	0.5	0.7
VII 其の他の職業	6.9	8.6	6.3	7.7
有職者總數	182,884	231,159	55,892	469,935

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 129)

第44表 蘭印華僑の職業・出生地別有職者人口の分析(%)

職業別	蘭印出生者		蘭印外出生者	
	男	女	男	女
I 原始生産業	21.7	13.2	36.2	23.7
II 工業	14.8	20.5	22.2	19.2
III 交通業	5.7	0.5	1.6	0.8
IV 商業	44.1	54.2	32.1	37.5
其の他の職業	13.7	11.6	7.9	18.8
計	100.0	100.0	100.0	100.0

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 129)

されてゐる。蘭印出生者にとつて次に重要なのは、原始生産業と工業である。原始生産業部門が蘭印出生者にとつて可なりの意義を有つてゐるのは、ボルネオ西部州にあつて農業に従事する多數の客家の存在に因つても明かである。

蘭印外出生有職者にあつては、原始生産業が最大である(約三分の一)。外領に於ける多數の農墾苦力が之を荷つてゐる。次に商業が三分の一弱、工業が約五分の一の新客を吸収してゐる。ジャワ及びマヅラでは特に福建人の蘭印外出生者にとつては、外領に比して商業が重要である。

女子有職者は絶対數から云へば無論男子に較べてすつと少い。併し彼女等の多くは商業に關係して居り、相對的には男子よりも多い。相對的に多數の蘭印外出生女子が農業園藝に従事してゐるために、蘭印外出生女子に於ける商業従事者の比率は、蘭印出生女子の如く大でない(第四四表)。

蘭印生れの男子にとつて商業部門の主要職業は、雜貨小賣と食料嗜好品販賣業である。ジャワ及びマヅラでは彼等には又、織物類販賣業が重要であるが、外領特にスマトラでは、全くこの職業のみならず、他の種類の商業も亦た影が薄い。原始生産業にはスマトラその他の外領が、比較的によつて多數の蘭印生れ有職者を持つてゐる。スマトラでは鑛業及び漁業に従事する率は可なり高いが、その他の外領ではボルネオ西部州に多數の農民がゐて、ジャワ及びマヅラとの差異の原因を作つてゐる。陸上交通業は蘭印生れの男子には、蘭印外生れの男子にとつてよりも、重要な職業となつてゐる。

(第四五表)

ジャワ及びマヅラの蘭印外出生男子にあつては商業が壓倒的重要職業部門である。就中雜貨小賣、次で織物及び食料嗜好品販賣業を最たるものとし、合せて蘭印外出生有職業者の約半分を形成してゐる。この職業部門にはなほ金融業

華僑の各種族が廣汎な職業部門の間に顯然たる専門化を行つてゐるといふことは一般に確認されてゐる。かくて福建人にとつては商業が、他のどの種族にとつてよりも、重大な意義を持つてゐる。即ち彼等の約半數は商業關係者であ

第46表 蘭印外出生華僑男子の職業別比率
(有職者100人に付)

職業別	ジャワ及 マヅラ	スマトラ	其の他 の外領
I 原始生産業			
土民型農業	0.2	7.0	6.3
園藝	0.1	5.7	2.6
其の他の栽培業	0.5	15.6	0.1
石油採掘業	—	2.3	6.4
其の他の鑛業 (製鹽を除く)	0.1	17.6	1.0
其の他の原始生産業	0.3	4.7	1.2
II 工業			
食料嗜好品製造	5.4	4.7	5.6
金屬加工業	2.7	2.1	3.5
木竹加工業	12.1	6.5	9.6
衣服製造	4.5	3.0	5.2
其の他の工業	2.6	3.1	3.1
III 交通業	1.0	1.9	1.2
IV 商業			
食料嗜好品販賣	11.4	4.5	5.5
織物販賣	15.4	0.7	2.8
雜貨小賣	28.0	10.4	33.8
金融業	5.9	—	—
其の他の商業	4.3	1.5	3.8
V 自由業	2.2	0.8	1.9
VI, VII 其の他の職業	3.3	7.9	6.4
計	100.0	100.0	100.0
總數	73,686	196,806	36,976

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 131)

ては蘭印出生男子よりも工業部門がかなりの意義を持つ。特に木竹加工業は一二、八〇三人(六・五%)の有職者を有してゐる(第四六表)。

第45表 蘭印内出生華僑男子の職業別比率
(有職者100人に付)

職業別	ジャワ及 マヅラ	スマトラ	其の他 の外領
I 原始生産業			
土民型農業	10.5	10.7	32.0
園藝	0.3	6.2	0.8
大農企業	3.8	1.8	0.3
漁業	0.3	5.1	1.4
鑛業 (製鹽、石油採掘を除く)	0.1	8.2	0.2
其の他の原始生産業	1.1	2.4	1.0
II 工業			
食料嗜好品製造	7.0	4.2	3.1
金屬加工	1.3	2.0	2.4
其の他の工業	6.9	9.4	5.8
III 交通業	5.0	8.5	4.9
IV 商業			
食料嗜好品販賣	13.8	5.1	5.0
織物類販賣	4.6	0.7	1.7
雜貨小賣	24.9	16.3	25.3
其の他の商業	7.7	3.5	7.0
V 自由業	2.1	1.9	1.6
VI 公務	1.0	1.7	1.2
VII 其の他の職業	9.6	15.9	6.3
計	100.0	100.0	100.0
總數	86,664	28,619	16,606

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 130)

が屢し、四、三一五人が従事する。外領ではスマトラ以外は、雜貨小賣が蘭印外出生者の主要職業である、スマトラでもこの職業は重要でないことはないが、總數の十分の一が従事してゐるに過ぎない。寧ろスマトラでは原始生産業に従事するものが、他のどこよりも多い。大農企業(砂糖を除く)、鑛業(主に錫山)のみで蘭印外出生者の約三分の一、即ち六五、三九五人に生計の途を與へてゐるのである。次で土民型の農業及び園藝が重要である。蘭印外出生男子にあつ

る。客家及び潮州人にも商業従事者は多い、併し彼等にあつては原始生産業の持つ意味の方がもつと大きい。廣東人に

あつてはその約五分の二が工業に働いてゐる（第四七表）。

蘭印華僑の發展態様は、各種族毎の強度の地域的偏向を一の内容とすると共に、他方に於て顯著な職業的偏向乃至は集中をば、別の内容としてゐる。かくの如き一定種族の地域的・職業的集中を招來した契機に就ては、我々は之を通説に従ひ、各種族の資質と、華僑獨特の郷黨觀念に歸する。

最初に大量の移民として蘭印を訪れたのは大部分福建種族であつた。福建人は次第に蘭印の全領域に擴がり、至る處で自己の職業（主に小賣及び仲介業）に適當な經濟關係を作り上げた。前世紀末、今世紀初め以來外領に於けるヨーロッパ人企業の開始と共に、蘭領印度の他の地方への華僑移民が促進されるに至つた。然し之に對しては舊の如く福建人の參加は華々しくは行はれず、鑛山及び農園の苦痛多き肉體勞働に適格を持つことから好評を得てゐた他の種族、即ち客家、廣東人、潮州人及び一部の海南島人が續々吸引されることになつた。農園及び鑛山地域に於けるこれらの種族成員の集中・堆積は、かくの如く彼等に要求せられ

第47表 蘭印華僑の種族別職業比率

職業別	福建人	客家	潮州人	廣東人	其の他	計
I 始業 生産業	13.9	35.8	48.2	26.6	54.3	30.8
II 工業	15.4	20.4	12.8	42.7	13.6	20.0
III 交通業	3.7	2.2	1.5	1.8	2.5	2.7
IV 商業	57.7	30.7	29.6	20.5	17.5	36.6
V 自由業	1.6	1.5	0.7	1.8	1.7	1.5
VI 公務 其他職業	0.7	0.7	0.6	0.8	0.5	0.7
VII 其の 計	7.0	8.7	6.6	5.8	9.9	7.7
總數	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	175,241	80,466	47,612	74,151	88,887	469,935

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 131)

た勞働への適性に先づ歸因する。

次いでかやうに他の種族に依て固められた地盤へ、從來は散在的にしか見なかつた福建人の侵入が行はれるに至つた。併しこの侵入は他の地方に於けるが如くその土地の華僑の職業關係に變革を與へるやうな性質のものではなかつた。

かくて一應各種族の分野が決定されると、老客に依る苦力募集の如く積極的に華僑の郷黨心が利用されることに依り、また新來移民が家族、同村人、同種族のもの等の血縁地縁の緣故を辿つて入國し、就職することに依つて、可なりに明瞭な地域的分布と職業的分立が出來上ることになつたのである。

併し右の規定は單なる一般論であつて、華僑の發展の過程に於て偶發的か又は意識的な要因からして、一般的な立論の基礎の線に副はないところの、分布上の交錯をも生み出すことになつてゐる。例を客家に採つて見よう。

ボルネオの客家は、原始生産業——主に農業——が主たる生活手段である。西部ジャワの客家に眼を轉すると、工業に於ける小營業が重要地位を占めるに至る。彼等にとつては工業が、他の種族に於ける商業の如き關係にある。進んでスマトラでは農園及び錫山の勞働力は主に客家に依て提供される。かくて潮州人と共に原始生産業の關係者が多いのである。かくの如く客家の職業分布は一見雜然としてそこに一定の標準がない如くであるが、以上の職業部内に對する客家の適當な才能が物を云つてゐることは云ふまでも無いこととして、ボルネオ及びジャワに於ける専門化は偶發的に發生したものに上り血縁地縁關係に基く聚合作用が行はれ、スマトラに於ては客家の有する勞働の質量を基礎とし、ヨーロッパ人の募集方法を通じて意識的吸収が強行され、かくて我々がいま見る如き狀勢が現出されたものである。

更に華僑の職業分布に關する一般的傾向を混亂に導いてゐる他の有力な原因も見逃し得ないであらう。それは蘭印生

れ(プラナカン)と蘭印外生れ(新客)との間に於ける職業選擇傾向の相違である。例へばジャワ及びマヅラでは福建人及び客家のプラナカンに於ける商人の比率は、新客よりも低いのである。又同地方の廣東人新客の間には、プラナカンに於けるよりも工業従事者が多い。華僑の原始生産業労働者の極めて優勢なスマトラに於て、福建人、客家その他の種族の二世、即ち蘭印生れは商人となる機会が可なり多いやうである。かくの如く各種族の蘭印外生れの職業分類は一概にその子の職業分化に適用できないのである。

以上の前提の下に各種族の簡別に就て職業分布を觀察しよう。

福建人——蘭印出生者にあつても、將又蘭印外出生者にあつても、蘭印の全地域に互つて商人の比率が最大であり、且つその點で他の種族の追隨を許さない。併しスマトラ以外では、蘭印外出生の商人の比率は、蘭印内出生者のそれに較べて著しく高い。スマトラでは福建人新客の間に多數の漁夫及び農民の存在することに依て商業従事者の率は稍々低い。蘭印の他の地方では蘭印外出生の福建人にとつて原始生産業は大した意義を持たないのである(第四八表)。

客家——ジャワ及びマヅラでは依然商業が彼等の重要生活手段である。殊に蘭印外出生者に就てさうである。プラナカンにあつては原始生産業従事者が目立つてゐるのは注目に値ひしよう。外領に於ては原始生産業が、ジャワ及びマヅラに於てよりも遙かに重大な意味を持つ。特にスマトラでは新客に對して(鏹山苦力及び農園苦力として)、ボルネオ西部州ではプラナカンに對して(シンカワン及びその接續區域の定住農民として)有する重要性は甚大である。この際特別の注意を拂ふべきは、略式調査をしか爲さなかつたボルネオ奥地の客家である(第四九表)。

潮州人——ジャワ及びマヅラの一部の潮州人特に蘭印外出生者にとつては商業が重要であるが、外領では原始生産業

第48表 福建人の職業別比率(有職者100に付)

職業別	ジャワ マ	及 マ	スマトラ	其他 地方
蘭印出生者				
原始生産業	13.3		19.5	7.3
工業	15.2		17.4	9.9
商業	55.1		43.0	68.8
有職者總數	76,705		10,007	6,202
蘭印外出生者				
原始生産業	0.7		30.5	5.4
工業	13.0		19.9	11.0
商業	81.0		36.6	76.4
有職者總數	35,181		35,444	11,248

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 132)

第49表 客家の職業別比率(有職者100人に付)

職業別	ジャワ マ	及 マ	スマトラ	其他 地方
蘭印出生者				
原始生産業	24.1		34.2	60.8
工業	19.0		13.0	12.7
商業	41.5		18.8	14.8
有職者總數	9,659		7,396	7,402
蘭印外出生者				
原始生産業	1.0		51.8	30.5
工業	28.0		19.9	24.3
商業	63.9		17.0	34.1
有職者總數	16,718		34,386	4,730

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 132)

が重要である。スマトラの潮州人新客の半数以上がヨーロッパ人農園、土人型の農業、園藝その他同種の職業に生活の糧を求めてゐる。スマトラに於ては少數な潮州人プラナカンは原始生産業への強度な偏向を示してゐないが、他種族のプラナカンに比してはこの方面に向ふ率が大きい。その他の地方——彼等は主にボルネオ西部州に住む——では同様

に、原始生産業が重要であるが、同地方の客家とは比較にならない（第五〇表）。
 廣東人——廣東人にとっては工業を先づ挙げねばならない。他の種族では若干の地方で有職者の二〇%強がこの職業

第50表 潮州人の職業別比率（有職者100人に付）

職業別	ジャワ及マヅラ	スマトラ	其他の地方
蘭印出生者			
原始生産業	14.2	44.2	37.9
工業	18.6	15.2	8.6
商業	54.8	27.0	33.6
有職者總數	527	2,415	2,241
蘭印外出生者			
原始生産業	1.4	59.0	20.0
工業	16.3	11.9	15.6
商業	77.4	22.2	47.5
有職者總數	1,940	32,879	7,504

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 132)

第51表 廣東人の職業別比率（有職者100人に付）

職業別	ジャワ及マヅラ	スマトラ	其他の地方
蘭印出生者			
原始生産業	3.2	27.1	27.9
工業	35.1	28.7	25.5
商業	50.8	17.4	35.8
有職者總數	1,920	3,302	996
蘭印外出生者			
原始生産業	2.0	40.1	23.2
工業	56.8	36.5	48.3
商業	33.9	12.0	22.8
有職者總數	17,168	38,063	12,452

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 132)

を營んでゐるに過ぎないのに、廣東人ではプラナカンの二五%、新客の四〇%以上が工業に携はつてゐる。右表からし

て新客の可なり激しい職業分化がプラナカンに於ては相當に緩和されてゐる事實が窺はれよう（第五一表）。

第六節 人口増加の趨勢とその原因

華僑發展の歴史を敍べた折に一寸觸れて置いたやうに、彼等は既に數世紀前移住し來つたものである。十九世紀の初め、ジャワ及びマヅラには約十萬の華僑がゐた。併し彼等はこの時期には餘り顯著な成長は遂げなかつたものの如く、

一八六〇年頃に約十五萬を算するにすぎない。尙當時外領には七萬二千人の華僑が居た。

これに續く數十年間に可なりの増加を見、一九〇〇年にジャワ及びマヅラでは二七七、二六五人、外領では二六〇、〇五一人に達してゐた。爾來躍進して遂に一九三

第52表 蘭印華僑人口の増加
 （第一節「概説」掲載「人種別人口増加表」参照）

年度	華僑人口總數
1860	221,438
1880	343,793
1885	381,752
1890	461,089
1895	469,524
1900	537,316
1905	563,449
1920	809,039
1930	1,233,214

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 39)

〇年には蘭印全體の華僑人口は百萬を突破し、ジャワ及びマヅラは五八二、四三一人、外領は六五〇、七八三を示した（第五二表）。

勿論第五二表中の十九世紀に於ける人口數には餘り信頼が置けないのであるが、最近の數十年、特に一九二〇——一九三〇年の間に急激な増加を遂げたことに疑問の餘地は無い。この期間に五二%、年平均四・三%づゝ増えた勘定である。増加の原因は、ジャワでは高い出生率に之を求めうるが、外領では移入民が支配的影響を及ぼしてゐるのである。

次に華僑人口の増加に影響した諸要因を検討して見よう。支那人の東印度への移動は數世紀來の現象であるが、二十

世紀以後激増したといふことは先述した。而してかゝる移動の歴史の過程に於てはかなりの動搖を示してゐるのである。支那本國の經濟狀態の影響を強く受けるのみならず、無論東印度自體の景氣、不景氣の制約を受けるからである。諸方面から提供されてゐる資料に信を置くとせば、一八四〇—一五〇年代に相當の數に上り、十九世紀の末葉に停滯した後、二〇世紀の二十年代に至つて復活し、最近まで多少共この趨勢は繼續したのである。二十世紀に入つて後の移民數は恐らくそれ以前のものを超かに超えるであらう。かくの如き華僑移民は支那本國に於ける諸種の自然的・社會的原因——天災・内亂・凶作等——のために、時に盛衰を示し、それが同時に蘭印への華僑移入の消長に反映するのである。蘭印への華僑移民は、支那及びシンガポールとの海上交通の發達及び蘭印の經濟的繁榮の時期以來、急激に膨脹したものであるが、蘭印政府が近年支那人其他の東洋外國人に與へた領内に於ける移動の自由も亦それを刺戟したであらう（第三章第二節「政治的地位」參照）。

東洋外國人の蘭印に於ける移動の自由に対する法律的制限の撤廢は、なほ比較的最近の事實に屬する。二十世紀の初頭以後、従前から存在した居住及び旅行の自由に対する諸種の制限は、逐次に廢止された。ジャワ及びマヅラでは一九一四年の旅券制度の廢止に依て旅行が、一九一九年の居留地制度の廢止に依て居住が、完全に自由となつた。外領では旅券制は一九一八年に、居留地制は一九二六年に廢止された。

之と前後して華僑移民に對する嚴重な監督制度が、ジャワ及びマヅラでは一九一二年、ボルネオ西部州では一九一三年、その他の外領では一九一八年に制定され、次いで入國税が、最初の二五ギルダーから、一九二二年五〇ギルダー、一九二四年一〇〇ギルダー、一九三一年一五〇ギルダーへと高められ、華僑の質量兩面に對する無制限の移民にブレ

キが加へられることになつた。

以上のやうな諸種の事情の發生が原因となり、結果となつて、二十世紀以後華僑移民の流入は増大したのであるが、かゝる外部よりの流入が異常な華僑人口の増加の主要契機の一つになつてゐることに間違ひない。併しそれが同時に、蘭印に定着し、家族を形成し、自己増殖を遂げなかつたならば、それ程の數字は示さなかつたであらうと思はれる。そこで華僑人口の増加を招來した諸要因の強度について、項目を分ち精細に検討を加へよう。

1 移民

如何なる原因が二十世紀以來の華僑移民の急速な増加に作用したかに就ては、統計の缺如の爲に正確には斷言し得ない。

第53表 上陸後入國を許可された華僑數
(契約苦力及び其家族を除く)

年 度	ジャワ及マヅラ	スマトラ	其他の方地
1900—1903	13,858	67,771	12,225
1904—1907	15,682	72,235	14,632
1908—1911	20,962	73,284	18,509
1912—1915	31,629	58,852	22,479
1916—1919	25,959	54,714	14,308
1920—1923	47,241	52,857	20,114
1924—1927	31,381	57,298	22,211
1928—1931	44,994	56,371	21,747
1921	18,659	17,962	7,260
1922	14,266	11,938	5,120
1923	7,925	11,919	3,841
1924	6,624	10,046	3,524
1925	6,195	12,431	4,242
1926	8,217	17,245	7,210
1927	10,345	17,576	7,235
1928	13,246	20,552	7,873
1929	11,926	17,848	7,043
1930	13,173	13,919	5,089
1931	6,649	4,052	1,742
1932	3,294	1,657	1,018
1933	2,710	1,308	918

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 40)

い。一九〇五年にヨーロッパ人の資本制企業が勃興して以來、年々の移民數は増加し、大戰中の一時的沈滯期を経て、戦後の復興期間には再び増加した。併し後者の激増期は一部分、内亂と凶作の蔓延に依て人口と食糧と

の調和を喪つてゐた南支那の疲弊の時期に相當してゐる。かくの如く二箇の原因が重複してゐるために、支那に於ける經濟状態と、蘭印のそれと、何れが支那人の蘭印移動を惹起した最重要要因であるかは決しかねるのであるが、多くの研究者は支那國內の政治的經濟的狀態を支配的要因として強調してゐる（第五三表）。

ジャワ及びマヅラでは華僑の移民は戦前よりも戦後に増大し、スマトラを除く外領でも同一のことが云へるが、スマトラでは戦後のブームの時期に於ても、それ以前に比して少い。これと同様のことが又、第五三表には含まれてゐないスマトラ輸入の契約苦力數に就ても言ひ得る（第五四表）。

第54表 蘭印契約苦力數

年 度	蘭印渡航者	契約終了後 入國許可數*
1912—1915	50,852	×
1916—1919	47,713	×
1920—1923	40,335	14,957
1924—1927	44,907	14,069
1928—1931	39,700	36,152

* 家族を含む
(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 40)

ゐないのである。

第五三表に引用した數字は、移民局の設置に依つて集計數字に相當の權威を與へ得るやうになつた一九一八年後の分に於ても次の理由で、華僑人口の増加要因を考察する上に於ては充分でない。即ちこの數字は移民中の一部、即ち「入國令」の適用を受ける移民のみを集計したもので、従つて蘭印に到着して苦力契約を締結した労働者及び以前に蘭印に居つたことのない者でも永住権者の家族を含まない。第一の難點は第五四表に依つて補ふとしても、第二の難點は如何ともし難い。かくて前表の移民數字の利用性は減退する。蓋し近年に至つて總移民者中、永住権者に從屬する婦人兒童の入國が顯著に増加しつゝあるから。又殊に、入國令の適用範圍外であるリオ州及び附屬島嶼の入國支那人に就ては詳細が判つて

以上に見た如く蘭領印度の入國統計は完全ではないのである。このために入國華僑に關する諸問題の多くに就ては嚴密な考察を下し得ない、従て當面の問題として持つ入國移民の華僑人口増加に對する影響の度合に關する検討も可なり嚴密性を缺くものである。

これだけの留保を置いて、本論に入らう。

移民群は大體次の二類に分ち得る、即ち

- (イ) 一時若くは高々數年間蘭印に滞在する移民群
- (ロ) 永久に又は長期間定住する移民群

この兩移民群は新たな入國又は出國に依つてその勢力が變動する。併しこの勢力の變動が華僑總數の増加率に及ぼす度合は種々様々である。

華僑人口の増加率の重要部分が、一時的在留者の増加に歸因することは疑問である。この類の入國者の大小は、産業の好不況、労働需要の多寡に依存すること大である。この種の浮動的移民者の或る者は例へばリオに於けるが如く僅に一收穫期間のみ滞在するのであり、他の者は一年又は數年間滞在する。毎年、特に支那正月後に多數來島し、毎年再び労働機會の大小に依つて來島者數以上か以下かが本國に歸還する。

かくの如き一時的滞在者中の一部、即ちデリー、パンカ及びピルトンの華僑苦力にあつては、一九二〇年後年々四千乃至六千人の歸國が記録されてゐる（第五五表）。併しこの現象は景氣状態に關聯したものではなく、久しい以前からスマトラ東海岸の華僑苦力は、ジャワ人苦力に依つて代替されて居り、他方パンカ及びピルトンの錫鑛山では、採掘の機械

第55表 大企業に於ける華僑苦力數

年 月	スマトラ東海岸	バンカ	ピリトン
1920年3月	×	18,766	21,920
1920年 末	22,402	×	×
1921年3月	×	×	21,356
1924年 末	29,068	21,483	15,438
1930年 末	22,814	18,323	14,275
1931年 末	18,484	13,281	8,321
1932年 末	13,823	7,853	3,524
1933年 末	12,900	5,071	3,319

(Volkstelling 1930, Deel VII, p. 41)

化に依つて華僑の鑛山苦力が仕事を失ひ解雇されつゝあるに基くものである。

農鑛業以外の一時的従業者は數に於ては確に増加して居る、併しこのグループの増減が華僑總人口の増減の本質的部分を成すとは云へない。

一九三一—三三年の恐慌年度のみに就ては、景氣の變動がどの程度に一時的滞在者數を變化させたかに關して可なり近い數字を利用し得る。船會社の輸送統計で補充した英領マレーの外國人統計に依て、一九三一年、三二年及び三三年の間に少くも七萬五千乃至八萬五千人が歸國したことになる。いまこの三ヶ年間に三萬五千人のエステート農業苦力及び鑛山

苦力が解雇され、新來者に依て交代されてないと假定せば、少くも他の四萬乃至五萬人の一時的在留者が流出したことになる。

異常な不況年度たりし一九三一年—三三年に於けるこの一時的在留者の流出流入が、それ以前の十年間のこのグループの數の増減以下であるとは思はれない。後者に關しての計數を持たないが、とにかく右の數字の助けを藉りて、同期間に於ける一時的在留者の増加のあり得べき大いさに就て推考することが出来る。かくて一九二〇年—三〇年に華僑總數について約四二萬五千人を算した増加に對して、この要因の意味は大したものではないことが判明しよう。華僑人口の増加に就ては、永住しつゝある又は少くも長期間蘭印に定住し來つた移民者群の數の變化が、もつと重要

である。このグループは主として、蘭領印度に良好な生活方法を見出し、家族を形成し、又は妻及び支那で生れた子供を招致する新來者から成る。この移民者グループの華僑人口増加に對する意義は頗る重大であつて、彼等の大部分は本國に歸還せず、また子供を出産する家族の増加に依て出生數を高めてゐる。移民の出産する子供の數は近年著しく増加してゐる。一九三〇年に九歳以下の新來移民の子は約十萬を算した。これに對して十歳—十九歳の者、即ち十年前になほ十歳に達してゐなかつた者は僅に二萬五千であつた。従つて永住的に居住しつゝある移民が非常に膨脹し、又その子に考慮を拂ふとせば、第一の移民グループに比して、蘭印華僑人口の増加上重要な要因たるは全く疑ふ餘地が無い。次に基本的永住者層の構造上の變化に因る増加要因はどうか。

新來移民の出産兒數の増加は既に久しく續いて來てゐる。今世紀の初頭に於けるこの種の出生數の増加に因つて現在では多數の蘭領印度生れの中年の成年者が存在するに至つてゐる。かくて蘭印生れの成年者は、生殖の規模を次第に増大して行くのである。

新來移民の子並に蘭印出生者の子の出生數の増加は、近い將來に中年の成年者數を更に擴大し、華僑の永住者社會の生殖力を一段擴張された規模で増大する。かくて華僑人口の増加に寄與するこの要因の意義は深大である。

以上に於て統計資料に基いて示し得る華僑人口の増加要因を列擧した。この他に尙ほ次の諸項が考へ得るであらう。衛生狀態の改善は疑ひもなく生存年齡の延長を齎し増加率の向上に資するであらう。特に最近では外領の農鑛業苦力の健康狀態は徐々に改善されつゝある。

土民婦人が支那人男子との婚姻に因て華僑人口に吸収されつゝある事柄も擧ぐべきであらう。併し華僑人口に編入さ

第57表 蘭印入國支那人の職業別統計

年度		一九三〇	一九三〇	一九三〇	一九三〇	一九三〇	一九三〇	一九三〇	合計
原始産業	工場労働者	35	24	21	29	5	15	59	188
	栽培業者	8	3	2	—	1	—	44	58
	漁夫	7	16	12	8	5	12	96	156
	合計(其他を含む)	54	45	39	41	16	27	199	421
工業	製麵業者	15	8	5	3	4	6	14	55
	理髮業者	42	26	21	14	15	24	55	197
	自轉車修理工	187	101	128	158	64	96	224	958
	仕立屋	102	72	46	42	32	36	102	432
合計(其他を含む)	999	463	416	361	226	349	395	3209	
交通業		6	1	3	9	7	—	—	26
商業	金貸	—	—	—	2	—	—	—	2
	賣買業者	319	148	188	181	132	273	402	1,643
	雇傭者	62	14	16	10	19	43	124	288
	行商人	15	53	82	53	18	45	—	266
	露店商人	22	51	76	88	59	36	305	637
	店員	2,064	1,079	1,024	1,148	772	753	260	7,100
絹商人	89	103	114	116	118	82	210	832	
合計(其他を含む)	2,983	1,728	1,545	1,652	1,144	1,280	3,701	14,033	
自由業	醫師	2	—	—	—	—	1	41	125
	商科醫師	30	12	10	6	5	18	3	64
	宗教家	13	14	20	6	4	4	1	4
	看護婦	—	2	—	—	—	1	1	481
學校教員	59	55	55	58	50	71	133	481	
合計(其他を含む)	140	90	82	76	69	136	178	771	
家事従業人		252	150	140	173	126	94	100	1,035
有業者總數(1)		6,337	3,222	3,135	2,934	2,045	647	412	18,732
其他全國入國許可數(2)		6,996	4,824	4,919	4,607	2,919	3,387	—	27,652
(内、未成年者)		2,592	2,244	2,294	2,252	1,297	1,301	—	11,980
總計(1+2)		13,333	8,046	8,054	7,541	4,954	5,921	12,702	60,551

(Indisch Verslag, 1932—1938, p. 46.)

第56表 海關統計に現れた厦門、汕頭、瓊州——蘭印間出入國者數

年度	蘭印への出國者				蘭印よりの歸國者			
	厦門	汕頭	瓊州	計	厦門	汕頭	瓊州	計
1937	14,105	6,720	—	20,825	7,331	1,351	—	8,682
1936	10,098	—	—	10,098	12,043	—	—	12,043
1935	6,679	936	—	7,615	10,343	1,583	—	11,926
1934	6,580	340	—	6,920	9,657	—	31	9,688
1933	11,805	—	—	11,805	20,976	—	—	20,976
1932	9,260	—	—	9,260	11,157	—	—	11,157
合計	58,527	7,996	—	66,523	71,507	2,934	31	74,472

(The Trade of China, Vol. I.)

蘭領印度に於ける華僑

九八

何増減したかを知りたいのであるが、蘭印統計局發表の統計年報には、蘭印入國者數と、出生者數の一部と、主要都市に於ける死亡者數のみが掲載されてゐて、全出生者、全死亡者、全出國者の數字は全然不明である。華僑の蘭印への入國者に關しては、海關統計にあらはれた厦門、汕頭よりの入國者數(第五六表)と蘭印政府發表の入

れた土民婦人數は未だ一萬人程であるから、特別に重要な要因とは云へぬであらう。同様に支那人の妾となつた土民婦人の子に依て華僑人口の増加は助けられるであらう。現行法に據ればかういふ性質の子は支那人ではない。但し蘭印民法の支那人適用前にかういふ關係から生じた子は支那人とせられる(適用宣言はジャワマツラ及び外領の若干の地域では一九一九年、蘭印全體では一九二五年)。實際には支那の道德に従つて彼等は今日でも非合法的に支那人の子とせられ、ある程度華僑人口の増加に参加してゐるであらう。

蘭印に於ける支那人の妊娠率の問題も重大であるが、現在では科學的正確さを以て證明し得るに至つて居らない。支那人家庭を觀察した人々に依て、昔程子供が多くないと云はれるが、大數觀察的根據に立つてゐるかどうかは斷言できない。

最後に、一九三〇年國勢調査施行以來、一九三七年迄に華僑人口が幾

第59表 主要都市に於ける華僑死亡者數

都市	年度				1936年度調査 ニヨル支那人生民
	1937年度	1936年度	1935年度	1934年度	
ジャワ及マヅラ					
バダビア	1,773	1,631	1,569	1,566	78,815
メステル・コルネリス	154	171	214	151	7,179
バイテンゾル	101	95	80	90	4,587
スカブミン	238	236	229	257	16,657
ガド	23	24	41	43	1,683
チャアミ	11	12	11	20	681
チエリボ	178	145	177	183	8,191
ベカロン	114	96	120	155	5,407
テガ	44	39	40	40	3,277
スマラ	511	545	543	580	27,423
サラテ	26	19	17	36	1,822
チラチ	19	33	18	33	1,520
ブルウオケルト	42	58	40	34	2,395
マゲラ	114	92	98	130	4,633
ジョクジャカル	178	169	149	154	8,913
スラカル	213	210	207	197	11,286
スラバヤ	722	694	678	703	38,871
モジョケルト	60	41	59	46	2,608
マデイウ	63	50	51	44	3,174
ケデイ	74	85	67	77	3,698
ブルン	36	43	42	40	2,746
トルン	59	52	46	45	2,756
マラ	103	104	229	323	7,831
パスル	81	81	64	69	2,739
プロボリン	55	57	53	68	3,646
ボン	48	34	36	29	1,323
バン	29	20	20	17	1,095
外 領					
パレンバン	331	275	296	279	15,492
メダン及ブラウアン	721	824	747	732	27,287*
バダ	132	145	146	142	7,263
サバ	31	36	43	43	1,488
ボンテア	138	123	124	130	15,275
サマリク	59	59	57	38	2,201
メカ	43	33	25	43	4,327
マカ	90	85	61	96	5,519
カン	283	255	293	261	15,363
ア	21	8	21	34	1,126
合計	6,918	6,679	6,711	7,022	350,297

* ブラウアンを含まず
(Indisch Verslag, 1936—1938, p. 68.)

第58表 地域別に依る支那人の入國許可數

州名	支那人			總計		
	男	女	子供	男	女	子供
ジャワ及マヅラ	2,526	1,591	1,596	4,531	2,903	2,361
スマトラ東海岸	1,236	827	888	1,764	1,134	1,037
其他のスマトラ、リオウ、パンカ及ビリトン	871	476	395	1,248	607	464
ボルネオ西部	771	149	158	845	167	158
其他の地方	898	396	555	1,026	456	581
外領合計	3,776	1,848	1,996	4,883	2,364	2,240
蘭領印度 1937	6,302	3,439	3,592	9,414	5,267	4,601
		13,333			19,282	
1936		8,046			12,738	
1935		8,054			12,720	
1934		754			11,899	
1933		4,954			9,280	
1932		5,921			10,257	
1931		12,702			19,231	
1930		32,181			41,985	
1925		24,278			32,273	
1920		28,653			42,046	

(Indisch Verslag, 1938, Vol. II, p. 45.)

印間出入國者數の統計(第五六表)によつて見れば、恐慌後は歸國者の方が多く、最近では蘭印への出國者の方が増加してゐる。一九三二—三七年間を合計すれば蘭印よりの歸國者の方が約八千人許り多い。華僑の死亡者數は主要都市に於けるもの(第五九表)のみ判明してゐる。これによれば主要都市に於ける支那人の死

國者數(第五七表)とは相違してゐる。後者(第五七表)にあつては明らかに苦力労働者を含まず、またリオウ等への入國者數、蘭印永住權者の家族等を算入して居ない(前文参照)。前者(第五六表)にあつては、香港を経由したる者、シンガポールに若干滞在したる後、出・入國したる者、及び其他の港より出・入國したる者等を含んでゐないと思はれる。二者共に不完全で、相互に齟齬するところがある。しかし、いま海關統計に現れた厦門、汕頭、瓊州——蘭

第60表 正式結婚による華僑の届出
出生兒數 (母親が支那人の場合)

州	男	女	合計
西部ジャワ	65	49	114
中部ジャワ	17	20	27
ジョクジャカルタ	3	3	6
スラカルタ	1	5	6
東南ジャワ	26	17	43
ジャワ及マヅラ	112	94	206
スマトラ	10	8	18
ボルネオ	7	4	11
セレベス	6	2	8
モルッケン	2	2	4
チモール	1	—	1
バリ及ロンボック	—	—	—
大東地方	9	4	13
外領	26	16	42
蘭印合計	138	110	248
1937	138	110	248
1936	110	111	221
1935	80	90	170
1934	75	106	181
1933	95	84	179
1932	87	83	170
1931	77	69	146
1930	94	76	140
總計	726	729	1,455

(Indisch Verslag, 1932—1938.)

亡率は約二%である。支那人の届出に依る出生兒數は第六〇表及び第六一表に見る如く極めて少く、これ等を推定の基礎となすことは出来ない。

いま全蘭印居住支那人の死亡率を二%、出生率を三%と假定すれば、兩者の差は一%となり、出生及び死亡を比較しての華僑増加數は年平均約一萬二千人となる。この假定によれば、一九三一—三七年間に華僑は約九萬六千人増加したことになる。

第61表 1930年—1937年間に於ける
華僑の届出私生兒推定數

I. 1930年—1937年間に於ける 全蘭印届出私生兒數	2,294
II. 1930年—1937年間に於ける 正式結婚による全蘭印届出 出生兒數	46,732
III. 1930年—1937年間に於ける 正式結婚による全蘭印届出 支那人出生兒數	1,455
IV. 正式結婚による届出出生兒 中支那人の占める割合	III÷II=0.031
V. 届出出生兒中支那婦人私生 兒推定數	I×IV=71

(Indisch Verslag, 1932—38.)

かくて、極く大ざつばな推定であるが、一九三七年末に於ける蘭印華僑總數は約百三十萬人と思はれる。
なほ日支事變の影響で戦禍を避けて蘭印に來る者が激増した如くであるが、しかし今日では平常状態に復して居る。^{註1}

〔註〕1 「東亞情報」第三二二號(昭和十四年三月十五日發行)及び、「東印度日報」昭和十四年一月十七日號、參照

第三章 蘭印政府の華僑對策

第一節 概 説

少數のオランダ人が尨大なるインドネシヤ大衆を搾取するには華僑は實に恰好の助手であつた。オランダ人はこの敏腕勤勉なる助手に對して、特殊なる利得を喰はすと共に、彼等より一段下の特殊なる身分を以て之を遇した。蘭印華僑は長い間、この數十年前までは、たゞ經濟的地位の向上のみを念として、何等文化的、政治的慾望を有しなかつた。^{註1}

しかし、蘭印に於ける産業資本の發展は勤勉なる多數の華僑労働者を需要し、こゝに清朝政府との間に交渉が開かれた。(一)華僑の手中に猶ほ残存してゐた諸特權が一九〇〇年頃に廢止されたこと、(二)清朝政府の積極的華僑保護政策、(三)支那人意識の昂揚、(四)日露戰役後に日本人がヨーロッパ人並の扱を受けることになつたこと等が、蘭印華僑(主としてインテリ青年層)をして彼等の地位改善運動に狩り立てた。華僑の地位は漸次に向上改善されて行つた。現在、蘭籍を有する華僑は代議機關に其の代表者を送り、下つ葉ながら小役人も大分居る。しかし、華僑在來の慣習法と新らしく適用されることになつたヨーロッパ法との間の開きは相當に大きい。(華僑の教育に關しては第五章第一節參照)

オランダ人は、土民に對すると同様に、昔も今も、華僑に對して所謂「同化政策」なるものを決してとらず、飽くまでも放任的な態度である。

蘭印に於ける華僑の國民黨運動及び排外貨運動は母國支那の情勢及び之を含む國際狀勢の大きな流れに従つて一進一退したが、蘭印政府はそれらが公共の安寧を害せざる限り、概して無類の放任政策を以て之に對してゐた。新聞などには言ひたいだけ言はして置いて恰も『コップの中の嵐』^{註2}と觀じて大して問題にもして居ない。外國に本部を置く政治結社が支部を蘭印内に設けることは禁ぜられてゐるが、しかし國民黨は巧みに外廓團體を作つて之をカムフラージュしてゐる。共產主義運動は勿論禁止されて居り、潜行的な運動をなしてゐた。

ボルネオの支那領土化運動^{註3}、スマランのメーデー騒動等^{註4}の如く、華僑が度外れた行動に出た場合、オランダ人は斷乎

〔註〕1 Vandenbosch: The Dutch East Indies, p. 301.

2 "Die chinesische Bewegung in Niederländisch-Indien", Oostasiatische Rundschau, 16. März 1929, p. 161.

3 一九一四年に勃發す。第一章附「ボルネオ西部州華僑發展史」C參照。なほ Van den Bosch: The Dutch East Indies, p. 314. には左の如き記事あり。
『嘗て西ボルネオの青年支那人間にダヤク族(ボルネオの土民)と聯携して同地を支那の領土たらしめんとする運動が始まり、その鎮壓は軍隊の力を要した。』

4 長野朗著「華僑」一六五頁

『一九二七年、ジャワ島のスマランでは五月一日のメーデーを支那労働者が舉行する計畫であつたが、政府は法律で此種運動を禁じて居るので、之を探知した官憲は首謀者を捕へ書類を押收した。然るにこゝにも國民黨の勢力が入り込み、中華會館も亦搜索を受けた。所が労働運動の中心をなしてゐるBPM石油會社の職工等約三四百人は警察に押しかけ拘引者の放免を要求して動かず、衛兵は發砲して支那側の死者十二名、負傷者二十八名を出し、更に十六名逮捕された。』

として火器を以て之を鎮壓した。

概して新客は支那人意識が強く、また廣東省出身者は福建省出身者に比して政治的關心が強い。

蘭印生れの支那人は、世代が遠ざかれば遠ざかる程、また、土民の血液を混ざることが多ければ多い程、蘭印への土着化とその反面に對本國關係の稀薄化とが促進され、彼等の中には自らを(一)インドネシア國民黨の陣營内に置く傾向、(二)オランダ政府に迎合・追従せんとする傾向、及び(三)支那民族主義の傾向を見ることが出来るが、第二の傾向が特に強い。土民インテリ、特にインドネシア民族主義者は華僑の經濟的勢力を憎み、いたく華僑を嫌つて居り、從つて若しもインドネシア人のインドネシア國家が實現する時があるとなれば、彼等が現在享樂しつゝある利益は少くとも可なり削減を蒙るに至るであらうと一般に考へられてゐる。そこでオランダ人の側に立つて己が利益を保護せんとする者の方が非常に多い。特にオランダに留學した者にこの傾向が強い。即ちオランダに在つては強い支那主義者であるが、東印度へ歸れば忽ちにしてヨーロッパ人の側に立つのである。^{註6}

支那人が、オランダ人と土民との間に介在して中間搾取階級を形成してゐることよりして、支配者たるオランダ人が『華僑の中間搾取を排除し以て土民生活の向上に資する』といふスローガンの下に各種の土民協同組合の成立を奨勵し其の發達を援助育成し、或は土民の爲の各種金融機關を設立し、或は華僑の暴利を嚴に取締るなど所謂華僑いぢめの政策をとつて來たことは、覺醒・昂揚しつゝある土民の憤懣の對象を他に外らす効果があり、土民懐柔のための良き術の一つであつた。將來土民の反オランダ氣運が高まれば高まるほど益々オランダ人はこの政策を有効に用ひようと努めるであらう。かゝる事情よりして、土民運動の萌芽期に於て土民運動の指導者達が華僑排斥をスローガンとしたことは其の

結成を容易ならしめたとも見ることが出来る。^{註7}

オランダは既に「持ち過ぎる國」、「飽腹満喫せる國」であつて昔日の如く蘭印開發に對しては最早熱心さを失つて居るからにはや多數の移民は不必要であり、蘭印在住のオランダ人の生活を脅かすところの貧乏で活動力旺盛なる他人種の人口が多數増加することは望ましくなく、貧乏人、無職者の増加によつて一般公共の安寧秩序の害せられることを恐れ、また土民保護政策及び企業の機械化と相俟つて、オランダ政府は入國法を以て一般移民特に華僑移民の入國を制限した。特に世界恐慌後は入國制限の障壁は益々高くされた。また、蘭印政府は華僑労働者に對し、一般的に適用される勞働法規及び東洋外國人のみに適用される勞働法規を以て之を統制してゐる。

〔註〕5 『インドネシア民族主義者が華僑の大量移民に對する態度は、一九三二年に國民參議會のインドネシア國民黨團體が入國税を二五〇盾に引上げんとした決議に表明されてゐる。ヨーロッパ人議員は諸外國の反動を恐れ、支那人議員は爪哇糖の支那輸出が報復的なポイコットに會ふことを指摘した。議員多數の緊急動議に依てこの決議は撤回され、その代りに移民問題の總括的研究をなすことを政府に要請する決議が通過した。』(De Locomotief, Overzee editie, Aug. 4, 1932)

6 Vandenbosch: The Dutch East Indies.

7 サリカット・イスラムは、華僑商權排撃を目指して結成した土民更紗業者達の團體の發展・轉化したものである。

(Blumberger: De Nationalistische Beweging in Nederlandsch-Indie, p. 56.)

第二節 政治的地位

本節は主として Vandenbosch 著 'The Dutch East Indies' に依つた

蘭印在住華僑は、東印度會社時代から、その經濟的實力よりして、蘭印社會内部に於てヨーロッパ人よりは低い、土民よりは高い社會的地位を占めてゐた。後に東洋外國人なる名稱の下に含まれて、他の人民グループなるヨーロッパ人及び土民と種々の點に於て區別された。

東印度會社本來の目的は貿易にのみ在つて、政治とか行政とかには大した關心も無かつた。従つて華僑社會に平和と秩序とがある限り會社は全く放任政策を採つてゐた。そこで華僑は土民と同様に其の頭領(Hoofd)——第一章第二節及び第三節參照)の支配下に委ねられた。彼等は「ヒネーセ・オフィスイレン」(De Chinese officieren)と呼ばれ、Juitenant (蘭珍納)、Kapitein (甲比丹)、後には Major (馬腰)の軍隊式の稱號が與へられた。一般に有力商人が選ばれ、各箇の華僑社會を統括した。「ヒネーセ・オフィスイレン」は會社及び後には政府からその執行すべき命令を受け、華僑社會内の出來事に就いて細大洩らさず會社に報告し、一方では支那人社會集團の請願者、信友、代表者であり、同時に他方では政府の半官的役人の役割を果した。政府も亦此の政策を踏襲したのであつた。

支那の開國後、清國政府が海外華僑の積極的保護政策に乗り出してより、蘭印華僑が不平を鳴らし改善を要求した諸制度——その諸制度の下に彼等が長い間忍従して來た——を左に述べよう。

華僑が特に嫌がった司法機關は警察裁判所 (Politie rol) であつた。この法廷は微罪を處決し、豫審を行ふのであつ

て、地方行政官吏が判事の機能をなすのである。この法廷は、Fromberg ^{註8}によれば『華僑の生活の中に深く喰ひ込み、行政官吏が裁判長として證人の言を聴取することなく、假令證言を聴取しても證人を宣誓臺に立たせることなく、彼の發見した事實を材料に判決を下し、そしてその判決は直ぐ執行に移し、控訴がなされても原則として執行を猶豫するとはなかつた。』『法律上、罪にならない事實』が屢々罰せられた。ランドラード (Landraad) に持つて行かれない様な事件が警察裁判所に持ち出されたのである。

土民及び東洋外國人に對する中間法廷であるところのランドラード (Landraad) が昔も今も非難的である。ジャワではこの法廷は次の様な構成である。裁判長(大抵ヨーロッパ人)一名、土民官吏(現職或は退職)二名、土民裁判官一名、華僑顧問一名及び書記一名。素人の悲しさに法律に明るくないのと、役人によつて任命される爲に警察裁判所に對する非難と同様の非難がこの法廷に對して擧げられてゐる。豫備檢束が廣汎圍に華僑及び土民に對して行はれ、且つ起訴前に長期間に互つて留置されることが屢々ある。家宅搜索及び異議申立てに於てもヨーロッパ人は遙に多く擁護されてゐる。また華僑にとつては土民の裁判官によつて審理を受けることが堪へられぬ屈辱であつた。

[註] 8 P. H. Fromberg: Verspreide Geschriften, p. 410.

Fromberg は東印度大審院判事であつて、東印度に於ける大の親支家で、また華僑の擁護者であつた。中華會(蘭印華僑學生協會)は彼の論文を集めて Verspreide Geschriften なる表題の下に發行した。この書中には往時の蘭印華僑の不平がよく記述せられてゐる。

其の他にも華僑の不平の種はいくらでもあつた。

一、居住及び旅行の制限

原則として華僑は華僑區域（支那人街）にのみ居住することが出来た。また彼等は自由に旅行することが出来なかつた。華僑商人のなす各旅行毎に政府より旅券を下附して貰はねばならなかつた。

政府は華僑の隔離は彼等を統制し、華僑及び土民の双方を保護する上に是非とも必要だと主張した。

一、華僑兒童教育機關の皆無

一八五五年の東印度政府條例の一條項は、東印度政府に對して土民兒童教育の爲の學校を建てる義務を課したのであるが、華僑兒童の教育に關してはこの條項は適用されないと解釋された。華僑學校には補助金が下附されず、土民小學校に缺員があるときのみ華僑は入學を許可され、ヨーロッパ人小學校へは缺員がある時で、オランダ語が充分に話せ、高い授業料を拂ふ場合にのみ許可された。（第五章第一節參照）

一、官吏になる資格の缺除

彼等は下つ葉小役人にもなれなかつた。

一、外國人待遇で領事の無設置

彼等は外國人として待遇され、彼等を庇護すべき領事が東印度に設置されて居ない爲め、他の外國人並みの利益にも與かることが出来なかつた。

所謂「倫理的植民政策」が始められるに至つた後に於てもかゝる状態は些かも改善されなかつた。それどころか此の

政策は土民經濟の保護を考慮したものであるから、その點から却つて華僑は土民の幸福に害があるものとせられた。多くの官吏は土民を保護する義務を當然に華僑を迫害するの義に解した。華僑は土民を搾取し、商取引上ではヨーロッパ人をベテンにかけるものとして非難された。東印度生れの華僑を土人中に分類し、華僑の男が土民の女に生ました私生兒の認知を禁止する法律を制定して彼等を土民化する方策の採用が屢々論議された。

一九〇〇年頃は東印度でも、支那本國（拳匪の亂）でも支那人の政治運動にとつて實に意義が深い。一九〇〇年の前後には蘭印華僑の手から極めて重要な諸特權が失はれて行つた。

- (一) 一八九四年、阿片の販賣請負制度が廢止されて政府の專賣となつた。（第五章第六節參照）
- (二) 一九〇〇年、庶民金融制度が創設され、華僑高利貸の慘害から土民農民を救済する方法が講ぜられた。（第四章第三節參照）

(三) 一九〇三年、官營質屋が東印度全部に設置され、私營質屋は非常に打撃を蒙つた。（第四章第三節參照）これらの諸處置によつて華僑の受けた打撃は甚大で、多數の生業を失つた者を生じた。

支那政府が華僑に對して示し始めてゐた關心に鼓舞されて華僑が積極的にその地位の改善を要求し出したのは、前述せし如き華僑の利益に關する重大問題が発生しつゝあつた時期と前後してゐた。

歐米諸列強の資本主義的發展と其の獲得した植民地の開發とは勤勉なる支那人苦力労働者を需要した。一八六〇年英佛兩國に求められて已むなく支那人の自由なる海外移住を認めてより、こゝに清朝は在來の無關心なる態度を一擲せざるを得なくなつた。更に西洋諸列強が其の在支國民の保護促進の措置を熱烈に要求した爲め、清朝は對抗要求及び對抗

壓迫の目的の爲に海外華僑を利用せんとした。亦、支那自身の開發にとつて華僑の本國投資並に本國送金は頗る有意義となつた。日清戦役以後歐米諸列強の支那侵略は愈々露骨となり、國內官民間に變法自強の改革運動等起り、在外華僑も之に呼應し一致して外國に當らんとする氣運があつた。

日露戦役以後、同じ黄色人種でありながら蘭印在住の日本人はヨーロッパ人並の待遇を受けたことが彼等をいたく刺戟した。かくて蘭印華僑は其の政治的、社會的地位の向上を蘭印政府に對して絶えず要求した。

清朝が、その末期に於て、海外華僑に對してなした積極的な保護政策は甚だ周到で、華僑の利益を擁護して海外に於ける彼等を鼓舞激勵したことは多大であつた。民國成立以後、民國政府としてなした華僑に對する政策が、内亂に禍されて、無爲無策であつたのに比して著しき相違がある。

清朝の蘭印華僑に對する關心は幾多の方法で表示され、その中の若干はいたく蘭印政府の氣に障つたものもあつたやうである。

- (一) 一八八七年、清朝は通商關係を調査する委員を派遣した。之に對し清朝はあらかじめヘーグの外交機關を通じて使節を派遣する許可を得た。蘭印政府は友好國の旅行者として委員會の委員を迎へた。^{註9}
- (二) 一八九一年、支那本國に於ける水害罹災者救済の義捐金を蘭印在住華僑から募集することに對する蘭印政府の許可を要求した。^{註10}
- (三) 一九〇五年、蘭印華僑教育改善の爲め劉士驥が派遣せられた。(第六章第一節第二項參照)
- (四) 一九〇六年、支那人官吏が華僑の各種商業團體を統一する爲にジャワに派遣された。

(五) 一九〇七年、北京政府から Yang Shih Tshi が通商關係調査のため蘭印に派遣された。彼は蘭印の華僑から北京政府宛の幾多の請願事項を託された。^{註11}

(六) 一九〇八年、在ヘーグ支那公使館員 Wang Kang Ky は數ヶ月に亙つて蘭印を旅行した。スラバヤで半官的な華僑人口調査を行ひ、且つ蘭印の華僑に支那國籍かオランダ國籍か、どちらか一方を選ぶべきを奨めた。

(七) 一九〇九年、清國巡洋艦二隻が清國使節 Wang Ta Cheng を乗せてバタビア港に來た。彼は通商關係を研究するとして若干時日をジャワで過した。

(八) 一九一〇年、Choa Tsung Fan が通商關係の調査に來た。

(九) 一九一三年、ヘーグの新任公使 Wei Ch'En Tsu は赴任の途次來印し、全島を視察した。^{註12}

支那政府よりの公式訪問は母國と華僑との親睦を表現する唯一の形式ではなかつた。

(一) 有力なる蘭印華僑は表彰されて勳章を貰ひ、支那の位階を授けられた(一八九九年)。

(二) ジャワの重要商會の役員達は正式に北京から招聘された。

(三) 學校協會から選定した學者が、支那政府の出費で支那本國へ勉學の爲に派遣された。

〔註〕9 Van Ginkle: Overzicht van de internationaal rechtelijke betrekkingen van Nederlandsch-Indië (1850—1922), p. 42.

10 Ibid., p. 52.

11 Ibid., p. 74.

12 Ibid., p. 75.

- (四) 支那軍艦が蘭印の港を訪問した際には大したお祭騒ぎで歓迎された。
- (五) 支那祝祭日には支那国旗が仰々しく軒並みに掲揚された。
- (六) 一九一一年、スラバヤ、ジョクジャカルタ及び其の他各地の商會は廣東の省會議員選舉に投票を送つた。この事に關して支那政府は歸國する意志ある海外華僑は投票することが出来ることを辯明した。(第三節參照)
- (七) 一九一二年、蘭印の華僑の商會は海外華僑を代表すべき六名の『海上院議員』(overseas senators)の選舉の爲に委員を送つた。

(八) 蘭印華僑は國民革命の爲に人員と資金とを惜しみ無く貢いだ。(第五章第二節參照)

- (九) 國民革命を祝賀するため、スラバヤ市の華僑數千名相會して彩旗を翻し爆竹を鳴らした。餘りに喧噪なために和蘭官憲は之を制止したため、兩者間に争鬭起り遂に華僑側に死傷者を生ずるに至つた。華僑は大いに忿悲し直ちにボイコットを行ひ、和蘭人官吏は忽ち食料に缺乏した。又一方華僑側は在ヘーグ駐劄公使をして和蘭本國政府に交渉せしめ、左の四箇條を承諾せしめ、全然支那側の勝利に歸した。(一) 華僑毆殺に關し、責任ある官吏を法律に準じて處分すること。(二) 殺害せられたる華僑は、政府より祭典を設けて埋葬し且つ遺族に賠償金を支拂ふこと。(三) 負傷したる華僑には、政府より醫藥を給し且つ負傷者に對しては賠償金を支拂ふこと。(四) 損害を蒙りたる華僑には損害額を辨償すること。
- 和蘭政府も之に懲りたためか、バタビヤ市に於ける華僑の革命祝賀會には、理事廳より一千盾を贈り、理事官が式場に臨んで祝賀の演説をした。^{註14}

これらの諸運動、諸出來事は當然蘭印在住華僑の待遇及び地位改善の爲に東印度政府を動かすに與つて力あつた。

- (一) 一九〇四年に旅行券制度が寛大となり、旅券は特別の旅行にのみ限定せず、一年間有効の旅券となつた。
- 一九一〇年に更に寛大となり、ジャワ及びマヅラの主要商業中心地及び主要市場間、並びに主要道路に沿ふ地域は旅券を要せざることとなり、華僑有力者は全然旅券が要らないこととなつた。^{註15}
- (二) 一九一〇年に居住制限が寛大となり、一九一四、一五、一六年に更に緩められた。^{註16}
- (三) 土民學校に華僑兒童は自由に入學出来ることになり、一九〇八年に所謂蘭支小學校が開設され、一九〇九年に華僑私立學校は政府から補助を受けるに至つた。(第五章第一節參照)
- (四) 一九〇八年に控訴中のものは警察裁判所の判決執行を停止する規定が公布された。
- (五) 一九〇七年、歸化法が發布され、華僑は一種の歸化の手續をすればヨーロッパ人と同等の待遇を受ける途が開かれた。(第三章第五節「國籍問題」參照)。

また一九一〇年の政府條例により蘭領印度臣民となつた者には代議機關議員被選舉權、官吏被任命資格、永代借地取

[註] 13 Knobel, "Kolonial bestuur in verband met buitenlandsche zaken," Vragen van den dag, (1915), XXX, 684 ff. 一九一二年八月十日發布の共和國憲法は海外華僑商會代表者より成立する選舉團體によつて六名の上院議員が選舉さるべきを制定した。

14 中井錦城著「南洋談」八六—八八頁。

15 Vandenbosch: The Dutch East Indies, p. 308. カーターに依れば旅券制の完全なる廢止は、内領では一九一四年、外領では一九一八年に行はれた。

16 Vandenbosch: The Dutch East Indies, p. 309. カーターに依れば、居留地の完全なる廢止は内領では一九一九年に、外領では一九二六年になされた。

得權、鑛業權取得權其の他幾多の特權が與へられてゐる。(第五節「國籍問題」参照)
 蘭印に於て出生せる華僑の國籍に關する長い間の外交上の紛争は一九一一年に解決し、また蘭印に支那領事が駐在することゝなつた。(第五節「國籍問題」参照)

支那政府から東印度生れ華僑に對する支配權を獲得した東印度政府は、次で華僑臣民の歡心を買ふ爲に華僑の不平とする諸制度を廢止して行つた。

(一)一九一四年に警察裁判所が廢止され、各種族共通の微罪裁判のための第一審法廷として、ランドヘレヒト(Landge-recht)を設定した。

(二)一九一九年、親族相續上の若干の例外を除いて(例へば養子縁組)ヨーロッパ的法律の全體系が華僑に適用されることになつた。(第四節「法律的地位」参照)

(三)裁判制度について現在尙ほ行はれてゐる不平の一は、華僑は土人官吏の豫審を受けた後、土人法廷に依て裁判されるといふ點である。東印度政府は支那人をヨーロッパ人及び日本人と同一の法律的基础の上に置く目的の立法を考慮中と屢々言明してゐるが、豫算の關係に藉口して未だに實行してゐない。即ち新客をヨーロッパ人法廷で裁判することにすれば、プラナカンも同様にせねばならない。さうするとヨーロッパ人の五倍もゐる華僑のために多數の法廷を開設せねばならぬ。而して又、支那人をヨーロッパ人と同一待遇にすればインドネシヤ人も黙つてはゐまいといふのである。

一九〇〇年以後、蘭印政府は華僑問題に就て専門家の助言の必要を痛感し、遂に内務省の中に支那人事務局(Dienst der Chinesche Zaken)が設立された。この局は支那本國及び蘭印華僑社會に於ける諸動向と密接な接觸を保ち、政府

のあらゆる部門に對して報告と助言とをなし、蘭印内の華語新聞並びに華語・マレー語新聞に關する半月刊の報告書を呈出し、華僑學校に特別な關心を拂ふものであつた。この支那人事務局と並んで日本人事務局(大正十二年設立)があつたが、共に一九三二年に廢され、新たに内務省の中に東亞人事務局(Dienst der Oost-Aziatisch Zaken)が設けられた。これは支那人、日本人、及び其他の東洋外國人に關する事務を管掌するものである。この事務局の局長の官名は Adviseur で、これは我國の勅任官に相當し、月一回總督に面接して事務報告をなすものである。

東亞人事務局の主なる役人は左の如くである。^{註17}

局 長	A. H. J. Lovink
日本人課長	I. Kamper
支那人課長	G. W. Overdijking
東亞事務局專屬事務官	A. F. P. Hulséwé
事務官	J. D. Thijs, F. J. E. van Gelder, Mr. Th. H. Bot, S. Meijer Jr., F. P. Thomassen
東亞事務局專屬事務官補	H. Hagenaar, G. J. Dissevelt, G. J. Jongejans
日本語通譯生	S. Cho 別名 Tsang Tsui Shih (朝鮮人)
支那語通譯生	J. King, Tso Ping Nam
書記	Tjittoroeno
判任書記	Soelono, Soemarsono

[註] 17 Regering Almanak, 1938, p. 310.

「ライテナント」、「カピテイン」、「マヨール」の肩書を附して華僑中から其の頭領を任命する「ヒネーセ・オフィスイレン」制度は、地方問題に對する華僑の自治制として一六一九年にバタビアに創設されたものであるが（第一章第二節參照）。ヨーロッパ人私法の殆ど全體系が華僑にも適用されるに至つた結果、華僑の法律的地位に著しい變化が齎され、過去二十年間に可なり大規模の修正が施された。そこで、華僑が自身の慣習法を維持することを認められてゐる限りこれらの「オフィスイレン」は支那人家族法及び仲裁和解制度に關聯して、重要な役割を果したのであるが、ヨーロッパ民法の殆ど完全な適用が實施されるに至つて其の機能も漸次無用のものとせられるに至つた。また、かつては、租税の徴收請負（阿片税、質屋税、賭博税）、旅行券の發行をしてゐたのに、現在では華僑の行動の自由が増大し、居住及び旅行の制限が廢止され、請負制が廢止されて、その勢力は全く失墜したのである。殊に華僑青年層は本制度の廢止について強硬である、青年層は本制度の如きは舊時代の遺物なりとし、ヨーロッパ人との平等を主張してゐる。

「ヒネーセ・オフィスイレン」の權力を弱めた他の原因は一九〇六年に於ける商會の創設である。商會は問題の發生する毎に支那人代表者として現れ、且つ、支那政府及び在蘭印領事館と緊密なる接觸を保つてゐたからである。更に「ヒネーセ・オフィスイレン」は支那民族の代表者としてよりも寧ろ政府御用掛と見られてゐたから、華僑の反感を買ふ場合が多く、勢力の失墜を來したのである。

數代に亘つて爪哇に居住する華僑は、法律上の諸問題及び言語に於て周圍の環境に自ら順應するから、頭領（「ヒネーセ・オフィスイレン」）に依て支配される必要はないであらうが、しかし一方では本制度を必要とする華僑も多數居るのである。

一九一九年に蘭領印度政府は支那人統治方式に根本的改革を施さんと考慮したのであつたが、この計畫は後に廢止され、改廢を要する如き事態については地方事情に依て決定することにされた。^{註18}

現在、バンカ及びボルネオ西部州では「ヒネーセ・オフィスイレン」は相當の力を有してゐる。（これは同時に邊境に於けるオランダ警察制度の未熟を意味してゐる。）その他の地方では單なる名譽職に過ぎず、支那人の慣習に就き政府官吏の諮問機關となつてゐる。

華僑は他の區分の住民と同様に發行後の檢閲義務のみで新聞雜誌を發行する自由を有してゐる。この權利は非常に利用されてゐる（「言論機關」參照）。

華僑は他の區分の住民と同様に集會・結社の自由権を有してゐる。秘密結社は禁止されてゐるが、商業團體、産業組合、郷黨團體、讀書俱樂部（閲書報社）等の適法の目的を追求する團體の組織は何等妨げず、一般的な意味の政治團體組織及び集會は差支へない。但し國民黨及び共產黨の結成は禁止せられてゐる。（次節參照）

現在の華僑の政治運動は大約次の如き色分けが施されるであらう。かゝる對立は選舉運動又は新聞論說等に現はれてゐる。

(1) 三民主義

極端な國民主義的感情を有する。本國の利益追求に専念し、蘭印生れ支那人の支那國籍認知に對する鬭争をするな

[註] 18 Indisch Verslag, 1934, vol. I, p. 446

ど、蘭印政府を眼中に置かず、一般に非協調政策を採つてゐる(次節参照)。

- (2) インドネシア獨立主義
- 蘭領印度の獨立國家への政治的、社會的、經濟的發展を主張し、而してその獨立國家に於ては蘭印生れの支那人がインドネシア國民の一部を形成すべきものとしてゐる。この主義の爲に一九三二年に中華インドネシア黨が結成された。また東印度社會黨黨員になつてゐる華僑もある。
- (3) 協力主義

オランダ政府の支配を認め、支那本國との精神的物質的紐帶の強化に依て東印度出生華僑の利益を助長することを目的とし、支那人とヨーロッパ人との間に於ける諸権利の平等を主張するもので、この目的の爲に中華會がある。また、政經黨に入つてゐる華僑もある。中華會のメンバーの大部分は富裕なる商人、地主、工場主等である。別に「祖國派」及び「議員派」と分類するものがある。この場合に(一)は前者に、(二)及び(三)は後者に屬するのである。

オランダの國籍法によつてオランダ國臣民となつた者は代議機關議員被選舉權及び選舉權を有してゐる。代議機關に參與してゐる華僑の狀況は第六二表に依つて明らかである。代議機關に參與してゐる華僑は二二八名で、總數の約九%にあたる。國民參議會、省議會、地方議會、市會では合計五六名で、五一名が選出、五名が任命に依る。しかし部族議會及び土民理事州議會に於ける華僑は悉く任命によるものである。

政黨別に見れば、中立又は不明の者が殆んど四分の三を占めてゐる。中華會は合計五六名の議席を有し、支那人政黨中最も多い。次が中華インドネシア黨で七名居る。政經黨に屬する支那人議員は國民參議會に一名、東部ジャワ省議會

に一名居るのみである。

國民參議會に於ける東洋外國人議員數は最低三名最高五名(普通五名)と定められて居り、其の内華僑議員は大抵三名を占めて居る。Regerings Almanak (1938) に依れば國民參議會の華僑議員は四名で、その氏名及び所屬黨派は左の如くである。

H. H. Kan 中華會

Yo Heng Kam 政經黨

Loa Sek Hie 中華會

Ko Kwat Tiong 中華インドネシア黨

なほ一九三九年一月の選舉では Ko Kwat Tiong が落選し、現在では華僑議員は三名である。中華會の役員は Re-geerings Almanak (1938) に依れば左の如くである。

會長 H. H. Kan 秘書 Lie Ping An

役員 Loa Sek Hie, Tjio Thiang Soey, Khouw Kim An, Thio Thiam Tiong, Tjong Pen Som, Dr. Han Tiau Tiong,

Tan Tek Peng, Drs. Khouw Bian Tie, Oei Tiong Hauw, Dr. Thung Tjeng Hiang, H. L. Liem, Liem Hwie Giap,

Sie Khwan Djioe.

また同書に依れば、中華インドネシア黨の役員は次の如くである。

黨首 Ko Kwat Tiong 秘書 The Boen Liang

書記長 Tan Tik Hien

4. 市 會										
バ タ ビ ア	4					1	5			33
バイテンゾルフ	1					1	2			15
チエリボン	1					1	2			17
スカブミ	1						1			11
バンドン						3	3			27
テガール						2	2			17
ベカロンガン	2						2			15
スマラン	4						4			27
サラテガ						1	1			11
マゲラン						1	1			13
マディウン						1	1			13
モジョケルト						1	1			11
スラバヤ		3			2		5			31
ケデイリ						2	2			15
ブリダル						1	1			13
マラン	2						2			13
バスルアン						1	1			17
プロボリンゴ						1	1			14
合 計	15	3			2	17	37			313
バレンバン						2	2			17
メダシ						2	2			17
テビンティンギ					1	1				9
ピンヂヤイ					1	1				9
タンジョンパライ					1	1				9
ベマタンシヤンタル					1	1				9
バダシ						2	2			17
フォルト・ドウ・コック					1	1				9
バンジェルマシ						2	2			13
メナド					3		3			13
マカッサル						2	2			17
アンボイナ						1	1			11
合 計					3	5	11	5	14	150

第62表 華僑の政黨別代議機關參與狀況

代 議 機 關	華 僑 議 員								議 員 總 數	
	政 黨 別									
	中 華 會 (C. H. H.)	中 華 會 (Chung Hwa Hui)	中 華 會 (P. T. I.)	政 經 黨 (P. E. B.)	政 經 黨 (Politiek Economische Bond)	其 他 の 政 治 團 體 (Overige partijen of Groepen)	中 立 又 は 不 明 (Neutral of partij onbekend)	合 計		
任 命	選 出	任 命	選 出	任 命	選 出	任 命	選 出	任 命	選 出	
1. 國民參議會	1	1	1	1				1	3	61
2. 省 議 會										
西部ジャワ	1	1			2			1	3	45
中部ジャワ		3					1	1	3	51
東部ジャワ	1	1	1	2				2	3	65
合 計	2	5	1	2	2		1	4	9	222
3. 地方議會										
スマトラ東海岸栽培地域							1	1		30
コメリンヒリール栽培地域										19
オハンヒリール栽培地域										23
ルマタンヒリール栽培地域							1	1		23
アンコラヒリール栽培地域							1	1		27
ミナハサ							1	1		27
アンボン								1	1	27
合 計							1	4	5	176

ケ ン ダ ル	1				1	2	21
ス マ ラ ン					2	2	23
デ マ ク					2	2	17
ク デ ウ ー ス					3	3	17
ジ ヤ バ ラ	1		1			2	15
バ テ イ			2	1	3		23
レ ム バ ン				3	3		15
グ ロ ボ ガ ン				2	2		18
プ ロ ラ ー	1			2	3		19
チ ラ チ ヤ ツ プ				2	2		25
バ ン ユ マ ス				3	3		27
プ ル バ リ ン ガ				2	2		19
バ ン ジ ャ ル ネ ガ ラ				2	2		17
ウ オ ノ ソ ボ				2	2		17
ケ プ ウ メ ン	1			2	3		27
プ ル ウ オ レ デ ヤ ウ				3	3		23
マ ゲ ラ ン				2	2		27
テ ウ マ ン グ ン			1	1	2		15
合 計	9		4	38	51		475
東 部 ジ ヤ ワ							
ポ ノ ロ ゴ				2	2		19
バ チ タ ン				2	2		15
マ ゲ タ ン				2	2		15
マ デ イ ウ ン				2	2		17
ン ガ ウ イ				3	3		17
ボ ジ ョ ネ ゴ ロ				1	1		19
ト ウ バ ン				2	2		23
ラ モ ン ガ ン				2	2		23
ジ ョ ム バ ン				3	3		23
モ ジ ョ ケ ル ト				1	1		18
ス ラ バ ヤ				2	2		21
シ ド ア ル ジ ョ				2	2		21
バ ン カ ラ ン			2		2		19
バ ム カ サ ン				2	2		25

1+2+3+4=	15	3			5	5	28	5	51	463
5. 部 族 議 會										
メ ナ ン カ バ ウ						2	2			49
バ ン ジ ア ル						1	1			33
合 計						3	3			82
6. 土 民 理 事 州 議 會										
西 部 ジ ヤ ワ										
セ ラ ン					1	1	2			25
バ ン デ グ ラ ン						2	2			17
レ バ ク						2	2			17
バ タ ビ ア						5	5			27
メ ー ス テ ル ・ コ ル ネ リ ス						4	4			25
バ イ テ ン ゴ ル フ						3	3			31
ク ラ ワ ン						2	2			31
イ ン ド ラ マ ニ	1					1	2			25
チ ェ リ ボ ン	1					2	3			33
ク ニ ン ガ ン						3	3			19
マ ジ ャ ル ン カ						2	2			21
ス カ ブ ミ						2	2			29
チ ャ ン デ ユ ー ル						2	2			25
バ ン ド ン	1					1	2			35
ス メ ダ ン						2	2			17
ガ ル ウ ト						2	2			29
タ シ ク マ ラ ヤ					1	1	2			29
チ ャ ミ ス						2	2			17
合 計	3				2	39	44			452
中 部 ジ ヤ ワ										
プ レ ベ ス	1						1			29
テ ガ ル						2	2			31
ベ マ ラ ン						1	1			23
ベ カ ロ ン ガ ン	4						4			27

第63表 國民參議會議員選舉狀況
(一九三五年度に於ける定期的選舉)

臣民の類別	被選舉人數	有權者數	投票數			
			合計	有効投票數	%	
					4÷3	5÷4
1	2	3	4	5	6	7
オランダ人	15	528	479	476	91	99
土 民	20	1,500	1,368	1,363	91	100
外 國 人	3	238	223	223	94	100
合 計	38	2,266	2,070	2,062	91	99

(Indisch Verslag, 1938, p. 503.)

第64表 省議會議員選舉狀況(最近の定期的選舉)

選舉團體の種類	有權者數 (臣民數)		投票數							
	合計		合計				有効投票數			
	外國人	合計	外國人	合計	%		外國人	合計	%	
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
西部ジャワ(1)										
土民理事州議會	48	452	45	438	94	97	×	×	×	×
市 會	14	112	13	106	93	95	×	×	×	×
合 計	62	564	58	544	94	97	56	536	97	99
中部ジャワ(1)										
土民理事州議會	54	476	44	435	82	91	×	×	×	×
市 會	10	83	8	71	80	86	×	×	×	×
合 計	64	559	52	506	81	91	36	379	69	75
東部ジャワ(2)										
土民理事州議會	64	577	60	532	94	92	×	×	×	×
市 會	14	126	13	101	93	80	×	×	×	×
合 計	78	703	73	633	94	90	73	566	100	89

(Indisch Verslag, 1938, p. 503.)

1 選舉は一九三七年に行はれたり

2 選舉は一九三六年に行はれたり

代議機關議員選舉狀況は第六三表、第六四表、及び第六五表に示す如くである。有權者中外國人臣民とあるもの殆んどが華僑と思はれる。

ス メ ネ プ					2	2	25					
ケ デ イ リ					2	2	27					
ン ガ ン ジ ョ ッ ク					2	2	21					
ト ロ ナ ゴ ン					3	3	23					
ブ リ タ ル	1				1	2	21					
マ ラ ン				1	1	2	41					
バ ス ル ア ン					2	2	23					
プ ロ ボ リ ン ゴ				2		2	21					
ル マ ジ ヤ ン					2	2	17					
バ ナ ル カ ン					1	1	15					
ボ ン ド ウ オ ソ					1	1	19					
ヂ ョ ン ベ ル					2	2	33					
バ ン ニ ュ ワ ン ギ					1	1	13					
合 計	1			5	46	52	574					
5 + 6 =	13			11	123	147	1,501					
總 計 (1+2+3+4+5+6=)	16	21	1	6	3	12	5	136	28	165	63	2,505

備考 其の他の政治團體とは次の如き諸團體を示す

Hua Chiau Tin Nien Hui 華僑青年會 (3), Tiong Hwa Hwee Koan 中華會館 (6), Tiong Hwa Kie Tok Kauw Hwee 中華基督教會 (1), Hoo Hap 和合 (1), Tong Gie Hiap Tjoe (2), Sam Lauw Hwee 三老會 (1), Lie Boen Yat-groep (2), Lim Oey Tiong-groep (1), (Indisch Verslag, 1938, p. 500.)

メダシ	302	3,514	234	83	224	96
テピンテイ	—	—	—	—	—	—
ビンジャイ	—	—	—	—	—	—
タンジョン	—	—	—	—	—	—
ベマタシアン	—	—	—	—	—	—
パダシ	683	2,790	391	57	383	98
フォルト・ドゥ・コック	—	—	—	—	—	—
バンジェルマシ	173	748	C	C	C	C
メナド	262	1,289	227	87	225	96
マカッサル	147	1,366	110	75	103	94
アムボイナ	91	1,165	C	C	C	C
(三) 部族議會						
メナンカバウ	—	—	—	—	—	—
バンジャル	—	—	—	—	—	—

表中Cは指名
(Indisch Verslag, 1938, p. 504.)

華僑の中、官吏になつてゐる者は大抵下つ端の小役人で、數も少い。一九三二年三月一日現在に於て、支那人官吏(第六七表)は八二〇名(其の他の東洋外國人は第六六表によれば五八名)で、全體の-%にも足らない位少數である。華僑の最も多く勤務してゐるところは内務部で、その次は教育宗教部、官業部、財務部の順である。第六六表によれば、東洋外國人官吏の大半はA級で、B級の東洋外國人はその半數、C級になるとB級の四分の一にしか過ぎない。東洋外國人官吏の得てゐる最高の俸給年額は八千盾——一萬盾である。第六八表によれば、勤務年數の低くなるに従つて東洋外國人官吏の全體の内に占める割合は概して多くなつてゐる。A級の東洋外國人官吏の數が第六六表と第六八表とで異なつてゐるのは算出の基礎を異にしてゐるためであらうか。

第65表 1938年度地方議會、市會及び部族議會の選舉に於ける外國人臣民

議 會 名	有 権 者 數		投 票 數		有 効 投 票 數	
	外 國 人 臣 民	合 計	外 國 人 臣 民	% (4÷2)	外 國 人 臣 民	% (6÷4)
1	2	3	4	5	6	7
(一) 地方議會						
スマトラ東海岸栽培地域	—	—	—	—	—	—
コメリンヒリル栽培地域	—	—	—	—	—	—
オーガンヒリル栽培地域	—	—	—	—	—	—
ルマタンヒリル栽培地域	—	—	—	—	—	—
アンコラシビロック栽培地域	—	—	—	—	—	—
ミナハサ	—	63,127	—	—	—	—
アムボン	—	231	—	—	—	—
(二) 市 會						
バタビア	781	12,812	404	52	376	93
バイテンゾルフ	277	2,446	215	78	208	97
チエリボン	278	1,519	225	81	224	100
ズカブミン	195	1,195	128	66	127	99
バンドン	863	9,490	535	62	523	98
テガル	63	627	C	C	C	C
ペカロンガン	241	967	45	19	29	64
スマラン	470	4,550	C	C	C	C
サラテイガ	107	1,201	59	55	59	100
マゲラン	255	3,891	87	34	76	87
マデイウン	140	1,401	105	75	102	97
モジョケルト	113	490	C	C	C	C
スラバヤ	2,499	8,738	827	33	792	96
ケデイリ	92	756	C	C	C	C
ブリタル	69	482	C	C	C	C
バスルアン	89	574	23	26	23	100
マラン	183	4,764	C	C	C	C
プロボリンゴ	344	838	C	C	C	C
バレンバン	212	2,708	C	C	C	C

第67表 勤務先別華僑官吏數

(一九三二年三月一日現在)

部 別	給 別	支 那 人		總 計	官 吏 總 數 中 華 僑 官 吏 占 割 合 (%)
		合 計	其 中 華 僑 官 吏 數		
政府並に諸局……	A	—	—	216	—
	B	5	3	284	1.7
	C	1	1	87	1.1
司 法 部……		6	4	587	1.00
	A	47	2	5,302	0.88
	B	6	3	1,159	0.51
財 務 部……	C	3	—	618	0.48
		56	5	7,479	0.74
	A	68	3	10,354	0.65
内 務 部……	B	58	25	2,865	2.00
	C	3	1	499	0.60
		128	29	13,718	0.93
教 育 宗 教 部……	A	231	—	41,458	0.55
	B	23	7	1,515	1.50
	C	13	1	2,185	0.59
		267	8	45,158	0.59
教育宗教部……	A	105	7	12,921	0.81
	B	17	6	542	3.10
	C	32	13	2,669	1.10
		154	26	16,132	0.95

第三章 蘭印政府の華僑對策

第66表 俸給額別華僑官吏數

(一九三二年三月一日現在)

俸 給 月 額 (單位盾)	俸 給 年 額 (單位盾)	A 級		B 級		C 級	
		東 洋 外 國 人 合 計	%	東 洋 外 國 人 合 計	%	東 洋 外 國 人 合 計	%
10以下	120以下	—	18	—	—	—	—
10 — 12.50	120 — 150	—	78	—	—	—	—
12.50 — 16.67	150 — 200	22	4,210	0.52	—	—	—
16.67 — 20.83	200 — 250	30	7,852	0.38	—	—	—
20.83 — 25.00	250 — 300	13	9,038	0.14	—	—	—
25.00 — 33.33	300 — 400	70	18,050	0.38	2	—	—
33.33 — 41.67	400 — 500	51	7,785	0.65	1	—	—
41.67 — 50.00	500 — 600	23	3,446	0.66	2	—	—
50.00 — 66.67	600 — 800	52	9,477	0.54	10	531	1.8
66.67 — 83.33	800 — 1,000	43	7,306	0.58	12	727	1.6
83.33 — 100.00	1,000 — 1,200	13	3,246	0.4	22	931	2.3
100.00 — 125.00	1,200 — 1,500	45	2,791	1.6	26	1,734	1.4
125.00 — 166.67	1,500 — 2,000	74	2,514	2.8	68	2,308	2.9
166.67 — 208.33	2,000 — 2,500	68	1,441	4.7	35	1,634	2.1
208.33 — 250.00	2,500 — 3,000	8	396	2.0	18	810	2.2
250.00 — 333.33	3,000 — 4,000	37	1,369	2.7	44	2,583	1.7
333.33 — 416.67	4,000 — 5,000	5	648	0.77	15	1,176	2.1
416.67 — 500.00	5,000 — 6,000	—	157	—	11	1,136	9.6
500.00 — 666.67	6,000 — 8,000	—	297	—	3	1,150	0.26
666.67 — 833.33	8,000 — 10,000	—	57	—	1	339	0.29
833.33 — 1,000.00	10,000 — 12,000	—	—	—	—	16	—
1,000.00 — 1,200.00	12,000 — 15,000	—	2	—	—	—	635
1,200.00 — 1,666.67	15,000 — 20,000	—	75	—	—	—	338
1,666.67 — 2,083.33	20,000 — 25,000	—	—	—	—	—	20
2,083.33 — 2,500.00	25,000 — 30,000	—	—	—	—	—	6
2,500.00以上	30,000以上	—	—	—	—	—	1
合 計		554	80,253	0.69	265	15,080	1.758
							8,286

(Indisch Verslag, 1938, p. 424.)

蘭領印度に於ける華僑

勤務年數	A 級			B 級			C 級		
	東外國 洋人	合 計	%	東外國 洋人	合 計	%	東外國 洋人	合 計	%
0	35	2,886	1.2	3	106	2.8	3	182	1.6
1	26	3,032	0.85	10	235	4.2	9	336	2.6
2	31	2,740	1.1	15	502	2.9	12	409	2.9
3	39	4,275	0.91	21	652	4.2	4	444	0.89
4	19	4,246	0.44	22	755	2.9	7	423	1.6
0—4	150	17,179	0.87	71	2,250	3.1	35	1,794	1.9
5	23	5,283	0.43	17	774	2.1	5	433	1.1
6	17	3,488	0.48	17	782	2.1	6	362	1.6
7	29	4,391	0.66	20	893	2.2	1	307	0.12
8	19	2,964	0.64	12	761	1.5	2	395	0.50
9	20	3,986	0.50	14	675	2.0	4	370	1.00
5—9	108	20,112	0.53	80	3,885	2.0	18	1,867	0.96
10	15	3,044	0.49	10	791	1.2	3	448	0.66
11	12	4,263	0.28	34	928	3.6	1	513	0.19
12	9	3,530	0.25	16	823	1.9	—	444	—
13	5	3,690	0.13	12	766	1.5	—	380	—
14	5	2,833	0.17	17	654	2.5	—	383	—
10—14	46	17,360	0.26	89	3,962	2.2	4	2,168	0.18
15	14	3,752	0.37	7	649	1.0	—	348	—
16	6	2,495	0.23	4	591	0.67	—	315	—
17	3	2,651	0.11	4	570	0.70	—	265	—
18	3	2,106	0.14	2	636	0.22	—	252	—
19	5	2,274	0.21	4	455	0.87	—	248	—
15—19	31	13,278	0.23	21	2,901	0.72	—	1,428	—
20	2	1,779	0.11	1	360	0.28	—	213	—
21	5	1,948	0.25	—	317	—	—	170	—
22	6	1,293	0.46	2	250	0.80	1	121	0.82
23	3	1,078	0.27	—	270	—	—	141	—
24	4	1,007	0.39	—	203	—	—	91	—
20—24	20	7,105	0.28	3	1,400	0.21	1	736	0.13
25	4	696	0.50	—	156	—	—	68	—
26	3	512	0.58	—	108	—	—	43	—
27	2	543	0.36	—	76	—	—	54	—
28	1	426	0.23	—	72	—	—	27	—
29	2	361	0.55	—	48	—	—	15	—
25—29	12	2,538	0.47	—	460	—	—	207	—
30	1	317	0.31	—	38	—	—	10	—
31	1	247	0.40	1	32	3.1	—	11	—
32	—	151	—	—	16	—	—	4	—
33	1	124	0.80	—	14	—	—	4	—
34	—	79	—	—	3	—	—	2	—
30—34	3	918	0.32	1	103	0.90	—	31	—
35以上	3	192	1.5	—	16	—	—	8	—
不明	4	64	6.2	—	68	—	—	42	—
合計	377	78,746	0.47	265	15,041	1.7	58	8,281	0.70

(Indisch Verslag, 1938, p. 423.)

第68表 勤務年數別華僑官吏數 (一九三二年三月一日現在)

衛 生 部.....	A	9	—	2,460	0.36
	B	3	—	412	0.72
	C	1	1	419	0.23
農 工 商 務 部.....		13	1	3,291	0.39
	A	11	1	3,014	0.36
	B	6	2	560	1.00
土 木 部.....	C	1	—	453	0.22
		18	3	4,027	0.44
	A	5	1	1,686	0.29
官 業 部.....	B	9	2	735	1.20
	C	2	2	146	1.30
		16	5	2,567	0.62
陸 軍 部.....	A	11	—	1,656	0.66
	B	119	28	5,700	2.00
	C	2	—	771	0.25
海 軍 部.....		132	28	8,127	1.60
	A	—	—	480	—
	B	5	3	554	0.90
合 計.....	C	—	—	89	—
		5	3	1,123	0.44
	A	17	—	706	2.40
合 計.....	B	7	1	354	1.90
	C	—	—	350	—
		24	1	1,410	1.70
合 計.....	A	504	14	80,253	0.63
	B	258	80	15,080	1.70
	C	58	19	8,286	0.69
		820	113	103,619	0.78

(Indisch Verslag, 1938, p. 421.)

第三節 三民主義運動と共產主義運動

蘭印に於ける三民主義の組織は華僑の民族意識の覺醒・昂揚・發展と共に生長して行つた。

居住地制限(前節参照)の爲め他の人民グループとは區別された一定地域にのみ華僑は永年に互つて居住してゐたことにも影響されて、峇々には支那的風俗習慣が濃厚に残存し(たとへ彼等の内支那語を解せない者が多いとはいへ)、従つて稀薄ながら支那人意識が相當に潜在してゐた。而して國際狀勢の影響、清朝の積極的對華僑政策(前節参照)、革命志士の亡命せる者南支及びシンガポールより招聘された學校教師(第五章第一節参照)、其他のインテリ、時代の空氣を敏感に報道する新聞雜誌(特に本國の——なほ蘭印華僑發行の新聞雜誌に關しては第六章第四節「言論機關」参照)、濃厚な革命思想のみなざる南支から渡來する年々絶えざる移民の流入等は華僑の民族意識(支那人意識)を覺醒・昂揚・發展せしめた諸原因である。^{註19}

民國成立後、國民黨員は華僑の多數居住する蘭印各地に於て事實上華僑を代表する傾向を帯び來り、三民主義運動の核心となつて其の内面指導をなして來た。蘭印に於ける國民黨は在蘭印支那領事を有力なる背景として組織され、その黨員中には民國國籍の支那人のみならず和蘭臣民たる支那人をも包含してゐる。蘭印に於ては國民黨は非合法の存在であつて、正式に認められた政治團體ではなく、従つて何等表面に出るといふことはない。必要に際しては——例へばボイコットの如き——中華會館、商會、書報社(讀書俱樂部)、及び其他各種の合法的機關を動員し之を自由に驅使するのである。蘭印の國民黨と支那本國との密接な連絡はバタビヤ國民黨中央支部に在る執行委員會(本國の國民黨中央本部

の任命に係る)に依て行はれてゐるものの如くである。また支那總領事は本國政府より國民黨支部を指導後援すべきことを訓令されてゐるものと思はれてゐる。

蘭印内に於ては國民黨の選舉及び選舉運動は禁止されてゐる(蘭印刑法第一五八條、第一五九條)。しかしこれに違反せる事實及び摘發された事件も相當に多いと推測される。(備考一、二、三参照)

備考

一 蘭印刑法第一五八條「外國ニ設置セラレタル政治團體ノ選舉ヲ蘭領印度ニ於テ行ハシメ、又ハ蘭領印度若クハ外國ニ於テ行ハルベキ右ノ選舉ノ準備ヲ爲シ若クハ助長シタル者ハ二年以下ノ重懲役又ハ五〇〇盾以下ノ罰金ニ處ス」
同第一五九條「蘭領印度又ハ外國ニ於テ行ハルル第一五八條所掲ノ選舉ニ參加シタル者ハ六ヶ月以下ノ重懲役又ハ一〇〇盾以下ノ罰金ニ處ス」

二 一九三六年十一月月上旬、中國國民黨大會の選舉に参加した爲め多數の中國國民黨に屬する支那人が檢舉せられた。當時の蘭字紙の報ずる所に依れば「支那總領事は在留華僑にこの選舉に参加せざるやう三回も警告を發し、此の警告は漢字新聞及び漢字、馬來字新聞にも發表されたにも拘はらず、多數の華僑は通信手段を用ひて母國の選舉に参加した爲に檢舉せられた。バタビヤ市の國民黨會館も搜索されて四百冊以上の書籍が押收され、バダン・シデムブアンの支那人學校協會所屬の建物も搜索の結果多數の文書が沒收された。檢舉された人々は、バタビヤ市の中國國民黨支部首腦者二名、同市の福建學校長、支那人醫師一名、福建學校校主、漢字新聞及出版會社社長、メダ市の支那人貿易商協會長、スカブミ市の貿易商協會長及び副會長、チエリボン市の貿易商協會長(此の會長は不拘束の保證金として一萬盾の提出をなしたが、當局は之を許可しなかつた)である。入手の當時沒收された書物及びパンフレットの性質に關し、更に五名の者が取調べられたが、其の後釋放された。尙ベリヌの支那商協會會長も警察官より事

態を聴取せられた。彼は選挙運動に就き有罪なることを自白したが、逮捕せられなかつた。逮捕された者は悉く選挙運動に参加したことを自白した。又、この事件の總てはバタビヤ駐在支那總領事が知つて居て行はれた事を示す若干の材料があらはれた。」と。

三 小林新作「華僑の研究」二〇八頁

『民國成立當時並に其後數次の政局變轉に際し華僑有志が議員委員又は代表の名を以て之に参加せる實例枚舉に遑ないが、民國十八年三月十五日より開かれた國民黨第三次全國代表大會に於て、代表總數三百五十六名中海外華僑は八十二名を占め、約四分の一に達せるは偶々以て國民黨を通じ華僑の支那政局に對する關心を推知すべく……この際、蘭印よりは代表九名出席した。蘭印代表者の選出方法は半数選挙、半数指名であつた』。

國民黨支部の設置される以前に於て、華僑を代表する組織として、清朝の末期以來存在してゐる中華會館及び商會（バタビヤの商會は一九〇六年創立）を擧げることが出来る。（第五章第五節「團體及其構成員」參照。一九一一年に廣東及び福建兩省の省議會の評議員の選挙は商會に於て行はれ、支那本國に於ける學校病院の設立、支那政府の兵器購入等各種目的の資金募集等は屢々この商會の名の下に行はれてゐる。中華會館も商會も、國民黨支部の設置後は次第に政治的指導勢力を失ひつゝあつた。一般的に、國民黨支部や書報社には革命的精神の旺盛な客家や廣東人がより多く加入したに對し、福建人やプラナカンは通常中華會館又は商會により多く接近してゐた。

共產主義の運動については、彼等の活動が殆んど地下に於て行れてゐる爲に信頼すべき資料を利用し得られないが、大戰後の十年間に比してはその影響が決定的に減退してゐることは明らかである。^{註20}

新嘉坡に本據を置く南洋共產黨 (The Nan Yang Communist Party) が蘭印内の若干の支那人團體に働き掛ける爲

に宣傳をやつてゐるらしい。

蘭印在住歐洲人の間では屢々「若い支那人は悉くボルシェヴィストだ」との意見もあるが、是は當らない。蘇聯の上手な宣傳は至るところに混亂を捲き起して居り、勿論華僑の極左も居るが、蘭印ではその數は非常に少い。蘭印在住華僑の大部分をしめる商人及び手職人はボルシェヴィズムの鬭爭相手たる身分であり、契約苦力は大抵農民出身で、そのひたすらなる願ひは獨白の農業財産或は小店舗であつてボルシェヴィズムの理想とは凡そ縁遠いものである。^{註21} 故に現在、蘭印華僑中、共產主義的な傾向を有するものは教師、ジャーナリスト其の他の知識階級の内の極く一小部分であると推察される。

一九二六年十一月のジャワ反亂及び一九二七年一月のスマトラ反亂に重大な役割を演じた共產主義者の運動は本質的にインドネシア人の運動であつて、支那人の参加は僅かであつたが、しかし華僑が關係したことは興味がつながれて良^{註22}。また當時この革命的土民運動に對して蘭印華僑一般は何等の敵意をも抱いて居なかつたものやうである。^{註23} なほ支那本國に於ける國民黨と共產黨との關係に順應して、蘭印の兩黨は離合をなしたものと^{註24}思はれる。

〔註〕19 丘漢平撰述「華僑問題」一〇二頁（山崎清三譯。「現代華僑問題」一一二頁）參照。

20 Rupert Emerson: "The Chinese in Malaysia," Pacific Affairs, 1934—9.

21 Ostasiatische Rundschau, 16. März, 1929.

22 Rupert Emerson: op. cit.

23 木下平治「蘭印最初の大叛亂の分析」（東亞第七卷第八號八十六頁）『當時百萬以上と算せられた華僑ですら、最も深い同情

の眼を以て蘭印民衆運動の發展の跡を見守つてゐた。當時在蘭印華僑間に最大の勢力を有ち、土着民の間にも相當の讀者を有つてゐた「晨報」の如きは、一九二六年始めに、華僑に向つて、土着民の運動に對してはたゞに精神的支持のみでなく進んで物質的援助をも與ふるべきであると勸告してゐる』

24 Rupert Emerson : op cit.

第四節 法律的地位

東印度會社が蘭印の領土を取得し、行政を行ふ義務が生じると、如何なる方法によつてヨーロッパ人、支那人、土民等の各人民グループを支配すべきかの問題が起つた。彼等の各種各様の希望は、行政上の職能を劃一的に實施し、同一の規範と規則に従つて司法權を行使することを不可能ならしめた。依つて會社は彼等自身の利益の規制は出来るだけ是等のグループの各々に委せ、殊に婚姻及び相続に關する法律に就ては會社は西洋的な精神を東洋社會に適用しないやうにした。しかし、この異質の社會の相互の接觸と發達とは屢々政府の干渉を要請するに至つた。無論、利害の餘りに懸け隔てない者を一定の規準に従つて出来るだけ實情に副ひ類別する努力はなされた。宗教が有力なる規準として用ひられたことは幾多の諸法規に就いて立證されることであるが、實際は各人種グループ間の利害の相違が主たる限界線を劃したのであつて、宗教の相違は單にその差別の明示に用ひられたに過ぎない。^{註25}

蘭印の發達が益々顯著になると共に、各異種グループの法律的分化のより確定的な固定の必要が切實となつた。その結果、ヨーロッパ人、土民、東洋外國人（この中に支那人を含む）の如く區別された法律上の人民區分となつた。この

區別は實體法及び手續法、私法及び公法に於て貫かれてゐる。^{註26}

現在、蘭印憲法にはもはや法律的に規定された人民グループの間に何等差別を設けてゐないが、然しヨーロッパ人、土民若は東洋外國人に適用される各別の法規には従つて差別が存在するのである。^{註27}

一世紀以上の間、各グループ間のかゝる區別について熱心な議論がなされた。一方に於ては、總てのグループに對して一個の共通な實體法及び手續法の制定を要求する聲があつた。然し蘭印の如き複合的な社會に於ては法律的劃一主義と法律的平等とは何等同意語になり得ないのである。他のグループは、法典化されると否とに拘らず、蘭印の統一に重大な影響を與へるやうな徹底的分化を欲した。事態の發展するところ次のやうな事になつた。實際的要求を考慮に入れて、法律的劃一の形成は、それが法律的平等を達成せしめる限り、常に促進せしめられた。之に對する理論的根據を van Vollenhoven 教授は左の如く説明してゐる。^{註28}

『法律的不平等は一方の者を他方の者に對して意識的に不利な地位に置くにあるならば、それは忌まはしいことである。しかし、種々雑多の法律的欲望から生じたものであれば、當然である。』

[註] 25 Mastenbroek : Staatsr. bevolkingindeeling, pp. 9—10.

26 Coudes : Privatrecht Vreemde Oosterlingen. Zarab : Publiekrecht Vreemde Oosterlingen.

27 Kleinjys : Staatsinstellingen, Vol. I, p. 105.

28 Carpenter Alting : Rassenvraagstuk, p. 206.

次に華僑に適用された諸法律の變遷を眺めて見よう。

一八四八年の東印度條例の下に於ては東洋外國人は土人と同一取扱を受けた。この土人との同一待遇は華僑にとつて利益がないでも無かつた。蓋しこの原則の下では彼等は自己の慣習法を安寧秩序を害せざる限り存続し得たからである。^{註29}

一八五五年の東印度政府條例はヨーロッパ人に有効な民法及び商法は爪哇及びマヅラの總ての東洋外國人に適用する旨宣言された。但し親族法及び相続法は支那人の慣習法が有効とされた。引き續いてこの制度は諸島全部に擴張適用された。此の際一八五五年より一九一七年にかけて此の例外規定に對してなされた激しい論争（本來の支那人の法律によるべきや或は蘭印の支那人の慣習法によるべきやに關する）をこゝに細かく論ずることは出来ない。^{註30}

華僑間及華僑と他の人民グループとの間に營まるゝ取引の激増は、成文法典を必要とした。それに對してはヨーロッパ法が採用された。この際には特に支那人の二、三の商業制度に正常な考慮が拂はれた。成文化化されてゐない支那慣習法は、その性質自體からいつても、亦、それに通じてゐる人の少いことからしても、他の人民グループとの莫大な商業的交渉の基礎に採用することは出來ず、更に、華僑が他の人民グループと比較して例外的な地位の利益を得べく努力してゐた事實に鑑みてこのヨーロッパ商法の適用は必要であつた。ヨーロッパ商法の華僑適用宣言に際しても、立法者は明かに華僑の法律的欲望に正常な考慮を拂つてゐたといふことは次の事實で明かである。(1) 支那人の爲の多數の特殊規定が作成されてゐる。(2) 他の人民グループとの間に發達した商業的交渉のない地方では、舊慣法が存続された。即ちその例として、各地に散在する華僑の公司制度のために、この制度を立法中に採り入れ、公司の行爲は公表すべしといふ條項が作られた。公司のなした行爲の中に作られた約諾は公司の社員各個に對して有効であつた。その行爲が公

表されない公司の場合にあつては全員が公司の締結した契約全部に對して集團的に責任を負ふものである。一九一七年の法律改正によつて、公司はヨーロッパ人の會社法及び組合法中の一の組合形態として挿入された。しかしその後、公司制度はヨーロッパ人の法律體系中からは全然取除かれた。^{註31}

更に一九一九年、ヨーロッパ人私法の殆ど全部（出生・死亡・婚姻に關する登録所設立をも含めて）は華僑に適用された。この場合ヨーロッパ人には無い養子などの特別法規が考慮されてゐる。これらの諸規定は爾來蘭印全部に互つて次々と適用される旨宣言された。その最後として一九二五年にボルネオ西部州に適用されることになつた。

華僑の例の詐偽破産（第四章第一節參照）の類發に鑑み、パタビア商業會議所は政府に華僑の會計帳簿をラテン文字を使用し、歐羅巴語又はマレー語で記入することを強請するやう要求した。^{註32} この要求は拒絶された。（フィリピンでは一九二二年二月の法令によつて右の要求を課してゐる）。蘭領印度の法律に依れば支那語の會計簿の使用が許容されてゐるのみならず、裁判上これ等は證據書類として認められる。たとへ正規に記入されてゐない場合に於ても認められる。これは華僑の正式な簿記帳法に習熟してゐないことに對する極めて特殊の辦法である。^{註33}

[註] 29 Vandenbosch: The Dutch East Indies.

30 Fromberg: Verspreide Geschriften, p. 334.

31 Vleming: Het Chinese Zakenleven, p. 65

32 de Waal: Onze Indische Financien, Vol. I, p. 186.

33 Vleming: op. cit., p. 131

華僑中、既に數代に亙つて支那の慣習に従ふことを止め、従つて又その大部分は支那語をも大部分忘れた。その反面ヨーロッパ人の法律制度に慣熟した部分、即ち峇々與其他の遅れた部分即ち新客との間には若干の區別がなされねばならない。前者は主として爪哇に居住してゐるものであるが、その勢力は大であり、言語の武器によつて活動的で、ヨーロッパ法の適用を受けるグループとの完全な法律上の平等を要求してゐる。しかしながらこれらの活動的グループの要望を、その生活と服装とに於て依然九九%支那人としてとゞまつてゐる蘭領印度一般の華僑の願望と同一視することは出来ない。この後者のグループに對してはヨーロッパ的規範は財産法に關しても親族法に關しても全く不適當である。この例として一九二五年外領に於けるヨーロッパ私法の制定に對する華僑の反對の例をあげるのみで充分であらう。しかし、新規則は施行された。尤もその大部分は死文となつてゐる。また、蘭印の殆ど全領域に互る支那人の出生、死亡、婚姻に關する登録所の失敗せる事實がある。(第五九表乃至第六一表参照)

現在、租税法、刑法、その他公・私法の大部分は各人種區分間には最早何等の區別も設けられてゐない。従つて裁判所が華僑に適用する法律は輸入されたヨーロッパ人法律である。しかし、それと并んで、彼等自身の慣習法(親族法、相続法、商法)が相變らず行はれ、獨自の發達を遂げてゐる。蘭領印度の全領域に亙つて、法律の條文とは拘りなく、支那人の婚姻が契約され、離婚が公表され、養子縁組、相続の分割が行はれてゐる。しかも、これらの適法でない多くの行為に法律上の効果を附與し難いのであるから裁判上の危険があるにも拘らず、實際には至るところ行はれ、且つこれらの婚姻に依て生じた子供は法律上の婚姻から生れたものと見なければならぬのである。華僑相互の商取引は、多く商法に依らずに、彼等個々の慣習法に従つてゐる。従つて華僑の商取引に於ては公司是常に普遍的な商業制度であるにも

拘らず、登録された公司はその數は極めて少い。

いままでに述べた如く、蘭印に於ける資本主義的發展と共に、華僑慣習法の適用範圍がチリ／＼と狭められて行つた。華僑社會の封建性がこの資本主義的な攻撃によつて震撼されたが、然し決して根こそぎ清算された譯ではなく、未だに幾多の封建的な要素が強固に残存してゐる。而して法律上の平等を熱心に主張してこの攻撃の手引となしたものは華僑の知識階級であり、彼等は更に進んでヨーロッパ人との法律上完全な劃一平等を頑強に要求してゐる。しかし華僑の古い連中はこの新しい動向に頗る不満で、支那人慣習法の縮小化に對して絶えず不平を鳴らしてゐる。

華僑はヨーロッパ法が彼等に提供してくれる利益は拔目なく活用してゐる。例へば、蘭印に於ては支那人程有限責任會社を多く組織するものはないのであるが、それに於て次の利益を考慮に入れてゐる。(イ)個人的責任を免れる方法が容易に與へられ、(ロ)彼等自身の資本を危険ならしめることなく商取引(主に投機的な)を行ふ幾多の可能性を與へられるのである。同様に、彼等はヨーロッパ人破産法は巧みに利用する。最近の破産宣告を受けた件數中支那人の部分は極めて大である。(第七二表)

第五節 國籍問題

一八五四年發布の蘭印政府條令には國籍の觀念が頗る曖昧で、蘭領内に居住する者は悉く「住民」とされてゐる。官吏の資格としてこの條例はオランダの市民権を要求して居り、かゝる市民権の規定として依據すべきオランダの諸法律を擧げてゐる。これらの諸法律は二種に分けられ、一種類は公法上の市民権を、他は民法上の市民権を規定してゐる。

公法上の市民権はオランダ本國出生者並びにその子孫に與へられる。オランダ本國出生者の子孫は本國以外のオランダ領土内に居住することによつて市民権を失ふことは出来ないで、蘭印で出生したオランダ市民の子孫は依然としてオランダ市民であつた。民法上の市民権は本國及び植民地居住の両親より本國及び植民地に於て出生せる一切の者に與へられた。オランダ本國及び同植民地に於て同地に居住する両親より出生せる土民及び支那人も従つて含まれるのである。そこで土民及び支那人はオランダ本國に於てはオランダ市民として民法上の訴訟手続を行ふことが出来たが、東印度ではこれは出来なかつた。

一八九二年の條例はこの二種の市民権を廢した^{註34}が、土民及び東印度に居住する東洋外國人の出生兒の身分に關しては何等宣明にされて居ない。同法第十二條には彼等を外國人として規定して居る。せいゝ彼等はオランダ領土の「住民」又は「居住者」と見なされてゐて、國外に於ける身分は頗る不安定なものであつた。シヤム國に於ける蘭印系華僑は、オランダ臣民として通ることを欲し、シヤムの裁判所から取消を命ぜられ、支那人に適用される特別入國稅制度に従はねばならなかつた。又海峽植民地及びマレー聯邦州に使用された多數のジャワ人を保護すべき權利に就いてみても頗る不確定なものであつた^{註35}。かくの如く蘭印内居住華僑の國籍に關する規定が頗る明確を缺き、他の諸國との間に論争されて居て、國籍に關する新立法を早晚制定しなければならなかつた。

更に、オランダは一八六三年、支那と最惠國待遇條約を結び、オランダは公使及び領事設置の權利を得、オランダ臣民は旅券無くして支那國內を旅行する權利を與へられたが、オランダ領在住の支那臣民の權利に就いては何事も規定されなかつた^{註36}。一九〇八年の日蘭通商條約によつて日本は蘭領印度に領事館を設置するに至つたのみならず、日本人は從

前の東洋外國人たる地位より向上して特にヨーロッパ人並の待遇を享けることとなつた事實は蘭印の華僑に一大刺戟を與へ、領事設置の要望に油をそゝいだ。オランダ側では清國政府は蘭印華僑の支持・要望を以て領事設置問題を最早不問に附さないだらうと見てとつた。そこで條約を締結する前に、出来る丈多くの華僑を支那領事の保護下から除く爲に、先づオランダ國籍を解決せんとした。

一九〇七年の法令によつて、支那人は一種の歸化の手續をすればヨーロッパ人と同等の待遇を受ける途が開かれた。しかし、その條件はオランダ語の知識、一定額の財産所有、兵役の義務、相続財産の均等な配分(從來支那人の遺産處分方法が複雑不公平だとの理由で差別待遇を享けてゐた)であつて、この條件は相當苛酷な爲に實績が擧がらなかつた。而もこの規定は依然として夫自身華僑に對する差別待遇を語るものであるから、彼等は日本人が受けたやうな外國人としての地位の改善を要求した^{註37}。一九二〇年の「センサス」に依れば、上述蘭籍取得の手續を採り歐米人と同待遇を享くる者僅々五二八人に過ぎなかつた^{註38}。兵役義務の點を除いて華僑は歸化を望み、又、オランダ臣民となつた華僑の大部分は徴兵に應じて居ない。實際問題として、オランダ人に五倍する華僑は充分オランダに臣従して居るかどうかは疑問であり、

[註] 34 *Nederlandsch Staatblad*, No. 268, 1892

35 *Fromberg*: op. cit., p. 432.

36 *Hertslet*: I, No. 70.

37 *Mac Nair*: *The Chinese abroad*, p. 108.

38 小林新作者「華僑の研究」二九二頁

蘭印國防の危機に際して銃口をどちらへ向けるか甚だ不安で、蘭印政府も敢て強制しない方針を執つてゐる。

華僑の多数は一九〇七年の同化法によつて蘭籍を取得するを潔しとせず、却つて支那本國に依頼せんとする感情を昂むるに過ぎなかつた。そこでオランダ當局は待遇問題に觸れないで、一九〇八年在住華僑を強制的に和蘭國籍に移し、以て支那との關係を斷絶せしむる手段を採り、こゝに清蘭兩國間に數次外交上の應酬を見るに至つた。^{註39}

兩國の主張を見るに、オランダは *jus soli* (出生地主義) に基き、蘭領東印度に於て出生せる華僑は、同地に現住すると將又支那に在るとを問はず、之を和蘭臣民と看做すべしと論じ、進んで支那は國外に在る支那人の國籍を主張し得べき根本法規たる國籍法を有しない事實を指摘した。之に對し支那は和蘭の *jus soli* を否認し、反對に *jus sanguinis* (血統主義) を主張し、出生地並びに在留地の如何を問はず、支那人より出生せる子女は支那臣民なりと酬いた。且支那には國籍法存在せずとの不利なる事實を打消す爲め、急遽一九〇九年勿々支那國籍の取得並びに喪失に關する法規を發布し、血統主義に依り原則として外國出生華僑を支那臣民と認めた。^{註40} 清國が一八六〇年、英國並びに佛國との條約に依り、已むを得ず人民の海外自由移住を認めた當時は、未だ華僑の國籍又は其身分に付き何等規定することがなかつた。降つて一八六八年米國との條約に於て支那は始めて在外公館を設置することとなつたが、該條約中の「本條約ハ支那ニ於ケル合衆國人民又ハ合衆國ニ於ケル清國臣民ニ歸化權ヲ附與セズ」との一節は支那が對外的に華僑の國籍上の地位に關し、其意志を表明せる嚆矢と見ることが出来る。即ち之に依つて支那は合衆國に於ける支那人の依然清國臣民たるを認めたものであつて、又清國政府の華僑に對する觀念を知る上に甚だ興味がある。然るに國內に戶籍すら存在しなかつた支那が、蘭印華僑の國籍上の地位に關し清蘭兩國間に行惱める外交紛議の結果、早くも一九〇九年支那國籍の取

得並びに喪失に關する近代的の法規を發布するに至つたのである。^{註41}

一九一〇年の東印度政府條例はオランダ市民と外國人との區別を廢し、代りに市民と臣民との區別を付けた。この法律は *jus soli* (出生地主義) の原則に依り、東印度に居住する兩親の出生兒は假令オランダ市民でなくとも、オランダ臣民である。オランダ臣民の身分は、(一)外國に歸化、(二)外國人男子との結婚、(三)總督の許可無くして外國政府に官吏及び軍人としての服務、(四)他國に到着後三ヶ月以内にオランダ領事館に登録せずして其國に滞在、(五)各曆年の最初の三ヶ月以内に登録を怠つて引き続き外國に滞在する場合には喪失した。^{註42} フロンベルヒは、この法律は、(一)國內居住者を出来るだけ多くオランダの管轄下に收めんと努め、(二)臣民がオランダ領以外にある場合、出来るだけ早く臣民の身分を喪失せしめんとしてゐると批評してゐる。^{註43} この法律は強制的な歸化といつた感じが有り、屢々二重國籍を生ぜしめるのである。何となれば蘭印に居住する兩親よりの出生兒には例外無くこの法規が適用され、丁年に達した際國籍を拋棄する何等の規則も設けられてゐないからである。海外在住の土民に再三の登録を要求することは頗る無理な話で、殊に彼等が領事館から相當の距離あるところに使用されてゐる場合は特に然りで、多數の者が登録を怠ることは目に見えてゐる。

〔註〕39 小林新作者「華僑の研究」(昭和六年十月發行)二七五—六頁

40 同書、二七六頁。同法規の内容は同書二七七頁—二八二頁に述べられてある。

41 同書、二七四頁

42 Indisch Staatsblad, No. 296, 1910.

43 Fromberg: op. cit., p. 440.

一九二九年の改訂によつて東印度の土民はこの規定から除外された。^{註44} 併しながら蘭領印度臣民たるの事實は、これに幾多の社會的、經濟的、政治的特權を伴ふ。就中著しい特權は次の如くである。

- (一) 代議機關議員の被選舉權
- (二) 官吏被任命資格
- (三) 永代借地取得權
- (四) 鑛業權取得權

當時清蘭兩國間には、蘭領内に清國の領事館を設置する條約を締結すべく交渉が進められてゐた。オランダ側では領事館設置の好餌を以て支那側を牽制し右條約内に『オランダ領内の人民は支那國民と看做すを得ず』の一項を挿入せしめんとした。清朝は頑強に反對した。當時支那側を代表してこの交渉に當つてゐたのはオランダ駐在代理公使唐在復で、オランダ側と論争久しく交渉殆んど決裂せんとするに至つて、彼は外交部に書を送り、領事館設置の最早一日も延引すべからざる旨を述べ、その爲には國籍問題に於て一應讓歩するの止むなきを力説した。清廷も遂に屈し、宣統三年四月十日（一九一一年五月八日）北京に於て兩國代表は蘭領領事條約（十七條）に調印し、右條約の條項の疑義解釋に關し兩國間に左記趣旨の公文が交換せられた。『本日調印を了したる領事條約の中に清國臣民、オランダ臣民の文字あり、兩國の國籍法が同一ならざるが故に之等の文字は疑義を生じ易し……オランダ領内にありては一地當該領地現行法律に基づいて解決するものとす』と。

この公文に依つて、血統主義を根本精神とする支那國籍法は、蘭領東印度に關する限り支那側自身より否認せらるゝこととなつた。蘭印の華僑は母國の此の處置を以て彼等を遺棄するものだと大いに非難した者もあつた。かくて蘭印在住華僑の國籍をめぐる清蘭兩國の外交上の紛争は一應表面上解決された。

國民黨政府が出現して以來、東印度政府と支那領事との間に華僑の登録問題に就て屢々紛議を繰返した。東印度に着任する新任領事は常に本國政府から在留支那人全部の登録を訓令されてゐたらしい。東印度政府は各地の知事に廻狀を以て、オランダ臣民たる支那人に支那領事による登録を禁ずる旨命令し、支那領事に對しては現行の領事條約の下に於ては許し難き旨抗議した。かゝる抗議があると、支那領事は文切型に新客のみの登録を意圖したのに時には誤りも生じたのだと苦しい辯解をした。Vandenbosch はかゝる紛争の起る一部の原因として、支那領事に對して本國政府が給料を正確に拂はないので、領事は登録税を徴税して己が給料に充てることを指摘してゐる。^{註45}

第六節 入國法及び勞働法

蘭領印度に於ける入國法は、蘭領印度入國令 (Toelatingsbesluit) 及びこの入國令の施行細則とも云ふべき蘭領印度入國條例 (Toelatings Ordonantie) であつて、何れも一九一八年四月一日より實施されて今日に及んで居るが、其間數

【註】44 Indisch Staatsblad, No. 204, 1929.

45 Vandenbosch: The Dutch East Indies, p. 317.

同に互り追補改正されてゐる。

これらの入國法の外に、土民と同一取扱を受ける労働者の入國に關する特別規定が一九一七年十一月二十九日付を以て發布されて居る。また外國人勤勞條例が一九三七年十二月三十一日に公布されて居る。同條例第三條第六項及び第八條施行の爲の政府令（一八三八年四月一日實施）及び一九三八年三月三十一日に公布せられた一定地方に於ける支那人に對し外國人勤勞條例の適用免除に關する總督決定等の法令が存在する。

此等の入國に關する諸法令が第三國人の入國に際して嚴格に適用される事は云ふ迄もない。即ち蘭領印度に入國せんとする者は總督の指定する港——タンジョンプリオク、パタビア、スラバヤ、ブラワンデリ、サバン、ムントク、メナド、マカッサル、タラカン、マノクワリ——に於いてのみ上陸を許可される。上陸に際しては移民官より上陸許可證が下附されるのであるが、その手数料として一五〇盾を徴收される。この手数料が最初二五盾であつたものが次第に引き上げられて今日に至つたことに關しては本書第二章第六節に於て述べた。

かくして入國を許可された者は交通及び居住規則に従つて蘭印に在留する事が出来るのであるが、若しも在留中に公共の安寧及び秩序を維持するに害ありと認められたとき、自己及び家族の生計を維持する能力なしと認められたとき、或は蘭印に入國後刑の宣告を受けたことのある者は定住證明書の下附を受けられず、退去を命ぜられることがある。然しながら一般には二ケ年の在留期間が満了した後出願すれば居住地所轄の地方長官は各一年を超えざる期間を以て二回及び第三回目には六年以内の期間——全部で十ケ年——の滞在を許される。この場合にも前述の罰則は適用され、期限延長を拒絶されることもある。

かくして引續き九ケ年蘭印に居住し、第十年目に定住許可が與へられるのが一般の原則となつて居る。然しながらこの場合にも前述の罰則は適用され、定住許可證は下附されず、その理由を記載して出願人を蘭印より退去を命ずるのである。かくして定住許可證を受けた者は初めて蘭領印度の民権を獲得するのである。然しながら特定人が短期間蘭領印度に在留した後定住許可證を所有する事を必要とする場合が生じた時には、前述の一般的原则に拘泥しないで特別の便法が講ぜられる。即ち市民権を有して居ない事が彼等の職業（例へば辯護士）を執行する場合又は鑛業コンセンション及び永代借地拂下を申請する場合の障礙となる者に對しては特に早く定住許可證が下附されると云ふ除外例がある。

入國を許可される外國人數については、毎年總督府令を以て、その總數、國籍別に割當てに付いて決定する。近年に於ける入國を許可さるべき外國人總數は一九三四年以來毎年一二、〇〇〇名と決定されて居る。

この場合に、一年度に於て入國を許可せられた外國人數が、入國勅令第十八條A第一項aにより定められた人數に達しない限り、同項により定められた國籍別數は、この適用規定の實施さるべき年度前十ケ年間に、蘭領印度に入國した當該國籍別移民の一定を限定として超過することが出来るのである。しかし外國人總數に達しても國籍別割當に達しない部分の外國人に對してだけは、其の未滿數だけ更に入國が許可されるのである。

蘭印に入國を許可された華僑の數に關する統計表は、本書第二章第六節に於て既に掲げておいた。

次に入國法規に關連して問題となるのは、華僑移民の總數の内多數を占むる苦力の入國に關するものである。之につき入國令は第二十條第二項に、總督は土人と同等待遇の労働者に對しては特別規定を設けることを得として居る。その所産が前述の土人と同一取扱を受くる労働者の入國に關する特別規定である。その第一條第一項に「入國に關する勅令

の規定は、蘭印の爲若しくは苦力條例の規定に依る労働契約に基き労働に従事するため、外國に於て募集された土人と同一取扱を受ける労働者に對しては適用せず」とされて居る。併し、労働契約が成立せざるとき或は契約登記が變更したとき、又は契約の履行されないときは入國勅令はその労働者に對しても適用され、一般入國者と同様に入國令第九條によつて發給される入國許可證に對して百五十盾を徴收される。而して労働契約の成立したものは入國許可證を下附されるまで、或は労働契約完了後募集地に送還される爲に乗船せしめられる迄の間地方長官の命令に基いて移民收容所に收容されるのである。後者の場合契約満了後蘭領印度に残留せんとする者は契約解除後一ヶ月以内に申請して、入國令第四條によつて入國許可證を下附されて入國が許可されるのである。

最後に労働者を除外した一般華僑入國者を構成する大多數の者は既に入國者人口に就いて既述される如く南支よりの零細耕作農民及び中小商工階級であるので、蘭領印度入國後何らかの勤務に従事せるものが大部分であるので、外國人勤勞條例の適用を受ける者が非常に多い事は云ふまでもない。この條例に於ける勤勞と云ふのは、性質の如何を問はずその勤勞に對して賃銀或は其他の金錢若しくは現物に依る報酬を受けようと受けまいと第三者の爲に行はれる勤勞、及び請負によつて使用者の業務の一部に従事するもの及び其の補助者としての行爲をなすものを勤勞と云ふと規定して居るから、入國者の相當多數が適用されることは云ふ迄もない。而してこの法令は比較的新しい法令であり、一九三八年四月一日以後の入國許可證或は假入國許可證を所有する者に對して書面により許可申請して許可された後でなければ勤勞に従事し得ないと規定して居る。故に之に反せる時には罰則を適用される。

然しながら、この法令に續いて公布された一定地方に於ける支那人に對し、外國人勤勞條例の適用免除に關する總督

決定によつて、パンカ州、ボルネオ西部州、スマトラ東海岸州中ペンカリヌ州等の地方に於いては適用されない事になつて居る。

外領に於ける華僑の苦力労働者に對しては、土民苦力に對すると同様に、苦力募集令 (Wervingordonantie) 及び苦力條例 (Koelie Ordonantie) が適用される。前者は労働契約の締結に際して起る各種の弊害を防止すると共に精神上肉體上の適不適を定め、或は疫病の傳播を豫防するもので、後者は雇主及び契約苦力の權利義務を嚴重に規定して居るのである。

蘭印最初の苦力條例は一八八〇年に制定されたスマトラ東海岸苦力條例である。其の後各州に各々獨立した別個の、刑罰規定を附帶する苦力條例が制定されて居たが、一九三一年に是等の各條例は撤廢されたと同時に外領全體に互つて一律に適用される外領苦力條例 (Koelie Ordonantie voor de Buitengewesten) が制定された。この條例の内容は前述の各苦力條例のそれと殆んど同一であるが、特に刑罰規定の漸次的撤廢に關する規定を新たに包含してゐる點に於て重大なる變化を示して居る。

而してこの條例には、五箇年毎にこの條例を改正することを規定して居り、これに基いて一九三六年十月十日に新苦力條例が公布された。この新條例によつて、刑罰規定を伴ふことによつて一種の強制労働と看做されて列國の非難の的であつた契約苦力 (Contract Arbeiders) の漸減方針が愈々明瞭とされ、次第に契約苦力を廢して非契約苦力 (Niet-Contract Arbeiders) 即ち自由苦力 (Frije Werklieden) を以て之に代へんと^{註46}して居る。

〔註〕46 新苦力條例の要點は臺灣總督府發行南洋年鑑(第三回版)一四三八頁に掲載されてある。

恐慌の影響を受けて、華僑中にも幾多の失業者を生じた。その正確な数字は不明であるが、職業紹介所に登記せる東洋外国人求職者は第七〇表に依れば約一千名で、これを職業別に見れば第六十九表の示す如く書記、商店賣子及び行商人が多い。

第69表 職業別東洋外国人登記求職者数

職業別	1937		1936		1935	
	東洋人	外人	東洋人	外人	東洋人	外人
I 技 術	合計	21	28	32	1,233	2.5
	%	1,299	1.6	1,301	2.0	
	外人	26	12	19	762	2.4
II 工 業 及 農 業	合計	26	12	19	762	2.4
	%	1,005	2.5	1,070	1.1	
	外人	325	5,976	359	4,884	7.3
III 行 政	合計	325	5,976	359	4,884	7.3
	%	5,976	5.1	6,432	5.0	
	外人	292	1,808	377	1,919	14.4
IV 商 業	合計	292	1,808	377	1,919	14.4
	%	1,808	16.1	1,981	15.6	
	外人	55	3,197	56	3,556	1.5
V 家 事	合計	55	3,197	56	3,556	1.5
	%	3,197	1.7	3,730	1.0	
	外人	85	3,579	89	4,707	1.8
VI 熟 練 手 先 勤	合計	85	3,579	89	4,707	1.8
	%	3,579	2.3	4,707	1.8	
	外人	211	4,116	262	6,046	4.3
VII 其 他	合計	211	4,116	262	6,046	4.3
	%	4,116	5.1	262	6,046	4.3
	外人	147	2,490	147	2,490	5.9

(Indisch Verslag, 1936—1938, p. 233.)

蘭印政府は一九三二年より失業者救済資金を設定して失業者に與へてゐるが、失業者救済手當の受與者並に支給金額はヨーロッパ人が最も多く、土民が之に次ぎ、東洋外国人は最も少い。一九三七年までに東洋外国人失業者に支給された金額は總計約三十萬盾にのぼる(第七一表)。その全體の中に占める割合は頗る少い。

第70表 職業紹介所に於ける東洋外国人求職状況

職業紹介所所在地	(1) 新求職者数		求人者数		就職者数		登記済の求職者数(2)		
	男	女	男	女	男	女	男	女	
パタビア(コルネリスを含む)...	383	17	100	11	57	8	116	4	
バイテンゾルフ	34	3	6	—	4	—	5	2	
スカブミ	39	3	26	2	14	—	43	3	
バンドン	159	6	16	—	—	—	38	—	
ガルウト	4	—	—	—	—	—	—	—	
チェリボン	18	—	—	—	—	—	6	—	
ペカロンガン	5	1	—	—	—	—	6	1	
スマラン	220	45	51	3	51	3	198	49	
ジョクジャカルタ	32	6	4	3	3	3	46	4	
スラカルタ	22	—	3	—	3	—	15	—	
スラバヤ	406	21	59	5	59	5	222	8	
マディウン	6	—	3	—	2	—	4	—	
マラン	91	5	3	2	2	1	16	—	
パレムバン	58	1	6	—	1	—	13	—	
メダン	11	1	1	—	1	—	20	1	
バダン	50	—	—	—	—	—	16	—	
メナド	28	1	22	—	17	—	23	1	
マカッサル	66	3	15	2	8	—	33	—	
労働紹介所合計	1,632	113	315	28	222	21	820	73	
労働紹介所出張所合計	45	—	4	—	3	—	122	—	
總 計	1937	1,677	113	319	28	225	21	942	73
	1936	1,883	85	257	10	189	4	1,072	37
	1935	1,970	71	196	14	155	17	1,083	21

備 考

- (1) 凡ての職を求むる者が労働紹介所に登記したわけではない、この数字は失業者の大部分を示すに過ぎない。
- (2) 再登録期限迄に届出を怠つた者は登録名簿より削除せられる、彼等の中仕事を得られなかつた者もこの数字中には入つてゐない。

(Indisch Verslag, 1938, p. 232.)

第71表 蘭印東洋外國人失業者救済手当受與者並に支給額

州	東洋外國人 受與者人數		支 給 額 (單位盾)		
	一 月	十二 月	東 洋 外國人	合 計	%
西 部 ジ ャ ワ	62	99	7,177	224,172	3.2
中 部 ジ ャ ワ	51	4	2,083	109,262	1.9
ジ ョ ク ジ ャ カ ル タ } ス ラ カ ル タ }	16	1	543	65,941	0.8
東 南 ジ ャ ワ	136	70	15,591	277,977	5.6
ジ ャ ワ 及 マ プ ラ	265	174	25,394	677,352	3.7
外 領	74	—	3,216	24,945	12.4
蘭 印 合 計	1937	339	28,610	702,297	3.0
	1936	589	44,238	1,001,702	4.4
	1935	839	61,192	898,429	6.8
	1934	696	97,528	1,266,087	7.7
	1933	190	51,188	904,046	5.6

註 失業救済手当は1932年度より支給されたるものゝ如くなるが
同年度に於ける東洋外國人受與者數及び支給額は不明なり。

(Indisch Verslag, 1934—38.)

第四章 華僑の經濟的勢力

第一節 概 說

蘭印に於ける華僑の經濟的勢力は一般に過重評價されてゐる。^{註1}

華僑が産業資本への参加の割合は極めて貧弱であつて、農業及び工業に於て弱々しき萌芽を見るのみである。

華僑の主たる經濟的勢力は仲介商業的活動にある。極く一部の大商業に進出せるものを除いて、華僑の大部分はヨーロッパ輸入業者及び輸出業者と土民との中間にあつて土民生活必需品(輸入品)及び(輸出向)土民農民生産物の仲介業を獨占してゐる。華僑の高利貸的搾取は土民生活全般に浸潤し、土着農民及び土民工場と華商との間には各種の形式に於ける貸付——生産物提供の關係が存在してゐる。而して華商の運轉する商業資本の額は頗る莫大であるが、彼等自身の出資は豫想外に少く、彼等の多くは主として外商より商品の長期融通を受けて居り、或は友人・知己及び外國銀行より融資を仰いでゐるものもある。

[註] — Vandenbosch: The Dutch East Indies, p. 316.

小林新著作「華僑の研究」一三一頁

竹井十郎著「富源の南洋」六六九—六七二頁

華僑の経済的勢力は近年、絶對的にも相對的にも次第に衰落の傾向にある。^{註2} 即ち蘭印經濟が益々老成化して行くのに反し、華僑は舊態依然として何等經濟的躍進をなさず、他方、華僑自身の領域は (一) 土民の覺醒、(二) 政府の土民保護政策 (三) 他國 (特に日本) 商人の進出等によつて漸次的に、不斷に侵蝕されてゐる。

蘭印華僑の大規模經營に於ける進出が極めて微弱である理由として左の諸條件が擧げられる。^{註3}

一、資本の不足。

華僑は相當致富成功すれば、蓄財を携へて其出身郷土、支那の開港場又は香港に隱退し悠々晩年を樂しまんとする傾向が強く、概して熟知せる南洋の華僑に出資し、所謂「アブセンテ」^{註4}として其利益配分に依て餘裕ある生活を享樂してゐる。成功後引續き其地にあるものも、有價證券に依る近代的大企業に投資することは稀で、蓄財は主として不動産 (第七九表参照)、裝飾品、銀行預金 (外國銀行の定期預金多し)、友人知己の事業に投ぜられる。^{註4} 而して華僑は一般に大資本の投下による利益の可能性に對して餘り信賴して居らず、また蘭印では一般に通貨不足であるから華僑の小資本は之を大會社に投資しなくても自己の周圍で更に有利に使用し得る途が容易に見出だせる。例へば土民物産の買占、小口金貸、家屋及び土地の賣買・貸貸等。また、華僑の不斷の本國送金及び歸國携帶金等は蘭印華僑資本の蓄積を阻む有力なる要因である。

二、頑強の家族感情 (又は同族感情) を基礎とする華僑社會の保守的構造。

この保守的な構造を有する華僑社會は新しい狀態に則した己が近代的な編成替を頑固に拒否し、従つて依然として近代的企業形態への推移を強力に阻止してゐる。

三、近代的企業經營に必要な知識・經驗の缺乏。

華僑の營業組織は多く個人經營及び公司組織であつて、經濟活動に於ける方式は古く、従つて非能率的である。この缺陷は特に事務遂行及び簿記にあらはれてゐる。全般的に華僑の教育が進んでゐない爲に近代的企業經營に必要な知識・經驗が缺乏して居り、特に新客の富豪中には行商人又は苦力の類から起つた一代分限者が多く、彼等は大規模の事業管理、近代的な會計組織等に就いては頗る暗い。また峇々富豪の子弟には無氣力なものが多い。^{註5}

四、經濟的道德觀念の缺如。

特にこの傾向は新客に強く、詐欺破産 (詳細後述) が頗る多い。その被害を主として蒙るものは外商で、これに對す

[註] 2 Wang Shang-Yu: "The Overseas Chinese in the Netherland's Indies" (The China Weekly Review, 1936, p. 424)

竹井十郎著「富源の南洋」六八六頁

Chen Kung-Po: "The Overseas Chinese and their economic position" (Chinese Economic Journal and Bulletin Vol. XX, April, 1937), 同平山勳翻譯「南支那及南洋情報」昭和十二年九月一日號掲載

丘漢平著「華僑問題」四九頁

3 Wang Shang-Yu: "The Overseas Chinese in the Netherland's Indies" (The China Weekly Review, 1936, p. 424)

興中公司東京支社新川傳介著「南洋華僑の研究」三「南洋華僑の觀た華僑觀」(某南洋華僑稿)

4 小林新作著「華僑の研究」一二七頁、一三一頁

5 Siem Ding Hoat: Het Chinesech Kapital, p. 16.

る華商間の社會的制裁は全然缺除してゐる。

五、仲介機關たるの地位の餘りにも有利・安固なるに甘んずる傾向。

大體に於て直接土民と接觸して小額宛の煩はしき取引行爲をなすを好まぬ少數のオランダ人と無智なる土民との中間にあつて、オランダ人より貨物の長期融通を受け、自らは小額の資本を以て仲介行爲をなす華僑の殆ど獨占的な地位は餘りにも恵まれ過ぎてゐる。近年、土民・オランダ人・日本人・アラビヤ人・インド人などがこの華僑の分野に進出して來てゐるが、全體から見ればほんの僅かな部分を侵蝕したに過ぎない。

六、政治的勢力の缺如。

彼等はオランダ人の土民擄取の良き助手ではあるが、決して主人ではない。ヨーロッパ人より一段下の階級である。すべての國家機關はヨーロッパ人の爲には有利に活用されるが、支那人に對してはさうではない。かくて華僑は益々其の特性——買辦的天性——の發揮し得られる部門に踴躍専念した。

華僑が會社を組織する場合は普通、公司(Kongsi)を作る。公司とは多數の華僑商人が小額宛の出資をして作り上げた利益團體で、人的要素が非常に重要視され、大抵は親族知己の結合の場合が多く、單なる資本の結合であることは稀で株式會社組織は少い。形式は株式組織でも内容は舊態依然たるものである。一九二二年及び一九二三年にスマラン州で設立された五五箇の華僑の有限責任會社の内、二三箇は二人によつて、一八箇は三人乃至四人によつて、四箇のみが四人以上の者によつて組織されてゐた。^{註7}

華僑の會社及び個人の資産内容は華僑以外のものでは容易に其の真相を知ることが出來ない。一般取引上の信用状態

は新客と峇々とは相違がある。峇々は蘭印を生國とし、墳墓の地としてゐるから左程無闇なことはしない。詐欺破産者の殆んどすべては新客であり、^{註8}新客の中でも潮州出身者は、特に信用が置けない。

華僑の會社及び個人商店には破産が非常に多い。第七二表に見る如く、支那人自然人の破産件数は全破産件数中の壓倒的大部分を占めて居り、また合名會社及び株式會社の破産件数中にも支那人の分が相當にあると思はれる。更に第七三表に見る如く、破産財産に對する孤兒財産管理局の經費中、支那人の破産に對する經費は異常に多い。支那人に特に破産が多い理由として次の如きものが挙げられる。

- 一、流動資金の缺乏。
- 二、投機的要素（特に先物取引に於ける）。
- 三、華僑の投機は頗る盛んで、屢々實務が附けたりで、投機が主たる生業であることがある。（第二節参照）
- 三、會社幹部の無能。
- 四、詐欺的要素。

詐欺破産の場合が頗る多く、支那人破産の殆んど大多數を占めてゐるともいはれる。峇々は東印度に生死するのであるから左程のことはないが、新客が主として詐欺破産を行ふのである（特に潮州人に多い）。蘭印に於て支那人の詐欺破産が特に多いのは左の如き恵まれたる好（？）條件に依るものと思はれる。